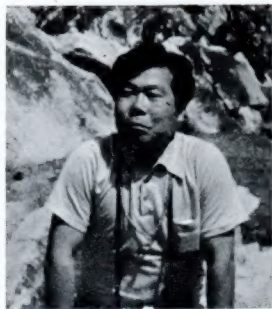
鑑賞とかるた遊び・早取り法

絵入り百人一首入門

佐藤安志著

絵入り百人一首入門

佐藤安志著

佐藤(さとう)　安志(やすし)

●昭和8年、宮城県に生まれる。二松学舎大学で国文学、中国文学を学ぶ。学生時代から良寛、西行、芭蕉に惹かれ、歴代和歌のふるさとを訪ねる。のち、民族伝承を求めて、日本の各地とヨーロッパ、インド、ネパール諸国をめぐる。
●著書に『少年周恩来物語』(曙出版)『ヨーガに見る東洋の叡智』『格言名句による冠婚葬祭スピーチ集』(土屋書店)ほかがある。
●日本の美刊行会同人。東洋研究の「ことたま会」「裸木」同人。
●現住所　東京都小平市喜平町860　小平団地1—6—306

はじめに

人はいさ心も知らずふるさとは花ぞむかしの香に匂ひける……紀貫之。この歌のように「小倉百人一首」は、ながい歳月、移り気な人の心とかかわりなく馥郁(ふくいく)と香り、心ある人たちに親しまれてきた。

あるときはひっそりと、そしてある時代にはうねりのように、しかし途切れることなく日本人を惹きつけてきたのが百人一首であり、これほど多くの人々に愛された古典はない。そして、脱物質文明ということが叫ばれているいま、砂漠をゆく旅人が泉にたどりついたときのように、百人一首にうるおいを求める人たちがふえている。

本書の執筆を思い立ってから三年余り、心むくままに百人一首の味読をくりかえしながら、恋ひとすじの、あるいはさびしさそくそくと伝わりくる、いにしえ人のおおらかな、麗わしい心情にふれるひととき、心澄む、いい知れぬやすらぎをおぼえるのであった。学生時代には味わうことのなかった、ふかい、はるかなよろこびであった。一首、一首、そっと胸にしまっておきたい想いであった。

小倉百人一首は、古来、歌学入門書として尊重され、やがて習字の手本にも用いられ、明治にはいってからは〝かるた〟の普及で「百人一首」の名が全国にひろまり、とくに明治末期から大正にかけての〝競技かるた〟ブームで、より多くの人たちに親しまれるようになったのである。

本書は日本人の心の華ともいうべき和歌を、時代背景、作者、同時代の歌風を学びながら鑑賞、さらに高尚優雅な「百人一首」かるたを楽しむ、さらに競技かるたの爽快さを味わえるよう、構成に意をつくした。

歌は、かな文字の使用など、先学の研究書を参照、もっともふさわしいと思われるものを採用した。歌意は詠人の心を求めて、歌の意味がわかりやすいように心した。参考の歌は、本歌の源流、背景など、鑑賞に役立つよう意を用いた。作者については、本歌が詠まれた時代、立場、歌人としての業績など、本歌がより鮮明に、味わいぶかいものになるよう、主要事項を記した。出典は、本歌を詠んだときの作者のことばを掲げ、同時代の歌風を学び、古典に親しむ手がかりになればと希求し、記した。

小倉百人一首のかるた早取り法研究は、お正月などの〝お座敷かるた〟遊びの〝散らし〟や〝源平合戦〟からはいり〝競技かるた〟の規則、早取りのための〝音別〟暗記法、きまり字の知識、札の配列法、取り手紹介など、百人一首ははじめての人でも、すぐ百人一首かるたの〝遊び〟と〝競技〟ができるよう、競技がいっそう楽しくなるよう意をつくした。

歌の鑑賞に、優雅な競技に、活用していただければしあわせである。

佐藤安志

絵入り 百人一首入門 ――鑑賞とかるた遊び・早取り法――

もくじ

2 百人一首考……115

3 かるた遊びのいろいろと早取り法……121

・装　幀　　岡　昌平
・イラスト　山田　勲
・企画編集　(株)弘文エディター
・編集担当　渡部小童・名島　勝

1 百人一首鑑賞

小倉百人一首の鑑賞

小倉百人一首は、いまから千三百年ほど前の、大和時代から鎌倉時代のはじめまでの約六百年にわたって詠まれた、当代の代表的歌人百人の歌から、各一首ずつ選ばれた秀歌百首である。

出典は、わが国ではじめての勅撰歌集で、和歌の伝統を確立した「古今和歌集」からの二十四首を筆頭に、「続後撰和歌集」までの、中世の和歌の代表的な歌が選ばれた十代勅撰和歌集である。

詠人は、第三十八代天智天皇から第八十四代の天皇順徳院まで、御鳥羽院と順徳院を別格にして、歌人の年代順に配列されている。

詠人の身分は、天皇八人、親皇二人、関白、大臣九人、大納言、参議などの朝臣四十五人、女房二人、官女十七人、その他管家、人麻呂、赤人、猿丸太夫、蟬丸の五人で、男性七十九人、女性二十一人である。恋歌がいちばん多く四十四首、ついで雑、秋、春、冬、夏、旅の歌となっている。

本文の歌詞および引用した歌詞、出典の文章は、詠人の想いに近づく一助にと心し、歴史的仮名づかいで表記、その他は現代仮名づかいとした。歌意は、詠人が求め、感じ、詠んだ、歌を味わうことを第一とし、ことばの注釈、文法に深入りすることを避けた。参考の歌をそえたのもそのためであり、作者紹介、出典を記したのも、詠人とその時代の理解を促す心である。挿入した百人一首の絵は、徳川時代から伝えられ、明治にはいっからは一般家庭に普及、鑑賞、愛蔵された貴重な木板本よりのものである。

1

秋の田の　かりほの　庵の苫をあらみ
わが衣手は露に濡れつつ

天智天皇

【歌意】秋の田の、仮りにつくった稲の番小屋にいると、屋根をふいた苫（カヤやワラであんでつくったむしろ）の細目があらいので、衣の袖は朝夕の露に濡れに濡れる。

農民を思う帝のいたわりがしみじみとつたわる歌である。

▨参考　「秋田苅借廬乎作吾居衣手寒露置爾家留」（万葉集・作者未詳）。

【作者】天智天皇（推古三十四年・六二六～天智十年・六七一）。三十八代天皇舒明天皇の皇子。母は皇極天皇。在位四年（ただしその前に六年間政事を治めたので実際は在位十年）。帝位につく前は葛城皇子、のちに中大兄皇子という。中臣（藤原）鎌足らとともに、蘇我入鹿を討滅し、大化改新を行ない、都を近江国志賀（大津）にうつした。

歌人としては「万葉集」第一期の歌人で、十三、十四、十五に大和三山をよんだ長歌と反歌がとくに有名で「日本書紀」にも歌がみえ、「古今集」などの勅撰集に六首入首。

▨出典　「後撰集」巻十・秋の歌。「題知らず――天智天皇御製」。

2 春過ぎて　夏来にけらし白妙の
衣干すてふ天の香具山

持統天皇

【歌意】春がすぎて、いつのまにか夏がきたらしい。むかしからの習わしどおりに、白い衣を干してある。

この時代は藤原宮といって、大和国高市郡に都があり、ほど近い香具山のあたりまで見渡せたのであろう。この時代のくらしがしのばれる歌である。

▨参考　「春過ぎて夏来るらし白妙の衣ほしたり天の香具山」(万葉集)。

【作者】持統天皇(大化元年・六四五～大宝二年・七〇二)。四十一代天皇。天智天皇の第二皇女。天武天皇の皇后。天武天皇崩御のあとをうけて即位。都を藤原宮にうつす。在位十二年(六八六～六九七)。

天武天皇崩御を悼んでの挽歌が知られている(万葉集一五九、一六〇、二六一)。勅撰集に八首。この時代は柿本人麿や高市黒人などすぐれた歌人がでて、万葉歌風の最盛期である。

▨出典　「新古今集」巻三・夏の歌。「題知らず――持統天皇御歌」。

3

足引の　山鳥の尾のしだり尾の
ながながし夜をひとりかも寝む

柿本人麿

【歌意】 恋しい人とはなればなれの、山鳥の尾のように長い秋の夜を、私はひとり寝なければならないのか。

恋の歎き、ひとり寝のため息がきこえてくるような歌である。

▨参考　「ささの葉はみ山もさやにさやげどもわれは妹思ふ別れ来ぬれば」（万葉集）。人麿が妻に別れて都へのぼったときの、旅愁の歌である。原歌は「念友念毛金津足檜之山鳥尾永此夜乎」。「足日木乃山鳥之尾乃四垂尾乃長永夜乎一鴨将宿」（万葉集・「寄物陳思」作者未詳）であるとされている。

【作者】 柿本人麿（生没年未詳）。持統天皇の御代のはじめに石見国から上洛して持統、文武（六八三～七〇七）両朝に仕え、文武天皇の御代の末に石見国の役人となって赴任。和銅二、三年（七〇九、七一〇）ころ、任地で没したと伝えられる。

「万葉集」第二期の代表的歌人で、歌聖といわれる。勅撰集には二百四十数首はいっている。

▨出典　「拾遺集」巻十三・恋の歌。「題知らず――人まろ」。

4

田子の浦に　打出でて見れば白妙の
富士の高嶺に雪は降りつつ

山部赤人

【歌意】田子の浦に出て、真白い富士山をながめると、高い峯にはいまも雪が降りつもっている。じつにすばらしいながめである、という叙景の歌である。

参考　「田子浦従打出而見者真白衣不盡能高嶺爾雪波零家留」（万葉集・「山部宿祢赤人望不尽山歌一首並反歌」）が原形である。

【作者】山部赤人（生没年未詳）。奈良朝の初期、元明・元正・聖武の御代のころ（人麿と同時代から聖武帝の天平年間まで生存したと伝えられる）に朝廷に仕えた官吏で、人麿と同じく宮廷歌人の一人。紀伊や吉野、駿河、下総などを旅している。

自然を客観的に描写した歌が多く、官位は低かったが、人麿とともに〝山柿の門〟と称され歌聖といわれた。「万葉集」には長歌十三首、短歌三十七首あり、勅撰集には四十九首はいっている。「万葉集」第三期の歌人。

出典　「新古今集」巻六・冬の歌。「題しらず――赤人」。

5

奥山に　紅葉踏み分け啼く鹿の
声きく時ぞ秋は悲しき

猿丸太夫

【歌意】 秋はもの悲しい季節であるが、人里はなれた深山の一面に散ったもみじ（秋）を踏みわけながら歩いていて、ふと聞く妻恋う鹿のなき声は哀れで、秋の悲しさがひとしお身にしみる。
晩秋の悲しさをうたった感傷的な歌である。

▨参考　菅原道真は「新撰万葉集」巻上で、この歌を漢詩に記している。

秋山寂々葉零々　麋鹿鳴ク音数処ニ聆ク
勝地尋ネ来リテ遊宴スル処　無レ友無レ酒意猶冷シ

秋山はさびしく落葉ふりしき、鹿の鳴く声があちこちにきこえ、景勝をたずねて人々は来て遊ぶが、友もなく、酒もなく、わがこころはさびしい、という意である。

【作者】 猿丸太夫（生没年・伝記未詳）。三十六歌仙の一人。「三十六歌仙伝」には、元慶年間（八七七〜八八五）ころの人とあるが不明。この歌は読人知らずで、猿丸太夫の作というのは誤りである。勅撰集には一首もはいっていない。

▨出典　「古今集」巻四・秋の歌。「これさだのみこ（是定の皇子）の家の歌合のうた――読人知らず」。

6

鵲の　渡せる橋に置く霜の
白きを見れば夜ぞ更けにける
中納言家持

【歌意】七月七日の夜、かささぎがつばさをひろげて天の川に橋をかけ、織女星をわたすという中国の故事(「淮南子」)にあるような、美しい宮中の御階にふりおいている霜の白々としたようすをみると、しみじみと夜ふけを感ずる。(家持の作ではないとの説もある)

▨参考　「鵲の渡せる橋の霜の上を夜半にふみわけことさらにこそ」(大和物語・壬生忠岑)。

【作者】中納言家持(霊亀二年・七一六〜延暦四年・七八五)。大伴氏。従二位大納言旅人の子。奈良時代末期の貴族。天平十八年(七四六)に越中守となり、因幡守、薩摩守、東宮太夫などの任を経て、延暦二年(七八三)中納言。同四年没。七十歳(「公卿補任」には五十七歳とあり、六十八歳という説もある)。

「万葉集」第四期の歌人で、奈良時代末期の代表的歌人。「万葉集」の撰にも関係したとみられ、「万葉集」中で歌数がいちばん多く、短歌三百九十二、長歌四十五、連歌一、詩一。三十六歌仙の一人、「拾遺集」などの勅撰集に六十二首はいっている。

▨出典　「新古今集」巻六・冬の歌。「題知らず——中納言家持」。

7

天の原 ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

安倍仲麿

【歌意】 大空をはるか遠くながめると、月が輝いている。あの月は故郷、奈良の春日にある三笠山からのぼった月と同じ月であろうか。

十六歳のとき、唐へ留学生として派遣された仲麿は、三十五年後に遣唐使藤原清河が派遣された折に、一行とともに帰郷しようとしたとき、唐の友人たちとの別れの宴でよんだ望郷の歌である。

▨参考 「青海原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」（土佐日記）。

【作者】 安倍仲麿（仲麻呂。大宝元年・七〇一～宝亀元年・七七〇）。中務大輔船守の子。養老元年（七一七）三月、吉備真備らと唐に渡る。唐名は朝衡（晁）。左補闕として玄宗（唐朝）に仕え、詩人の李白・王維・儲光儀らと親交。粛宗、代宗にも仕え安南都護もつとめた。在唐三十五年。天平勝宝三年（七五三）、遣唐使の藤原清河と同行帰国しようとしたが遭難、ふたたび唐朝に仕え、宝亀元年正月、唐土に没した。

「古今集」に一首、「続拾遺集」に一首はいっている。

▨出典 「古今集」巻九・羇旅の歌。「もろこし（唐土）にて月を見て詠みける――安倍仲麿」。

8

我庵は　都の辰巳しかぞすむ
世を宇治山と人は云ふ也

喜撰法師

【歌意】わたしのいおり（住家）は都の東南の宇治山のほとりにあり、このように心静かにくらしている。それなのに世間の人たちは、まだここも憂き山、わずらわしいところだと思っているようだ。俗界をはなれてくらす、ゆったりした歌である。

▨参考　「みわ山をしかも隠すか春霞人に知られぬ花や咲くらむ」（古今集・紀貫之）。「あらし吹くむかしの庵のあときえて月のみぞすむうぢの山もと」（寂蓮法師）。

【作者】喜撰法師（生没年・伝記未詳）。六歌仙の一人。「八代集抄」によると、橘奈良麿の一族とあり、また一説には紀名虎の子ともあり、清和天皇（貞観六年・八六四〜貞観十八年・八七六）御出家の法号とも伝えられる。いずれにしても、「古今集」の序に六歌仙の一人とあり、仁明天皇（天長十年・八三三〜嘉祥二年・八四九）から宇多天皇（仁和三年・八八七〜寛平八年・八九六）までの人であると思われる。

六歌仙の一人とされているが、喜撰法師作という確かな歌はこの一首だけである。

▨出典　「古今集」巻十八・雑の歌。「題しらず——きせん法師」。

9

花の色は　移りにけりないたづらに
吾身世にふるながめせしまに

小野小町

【歌意】もの想いにふけっているうちに、長雨にうたれて花（さくら）の色はすっかり色あせてしまった。同じように、恋の想いにふけりむなしい日をおくっているうちに、わたしの姿もおとろえ、かなしみをおぼえるようになった。

花にことよせた青春を惜しむ情がただよう歌である。

▨参考　「はかなくに過にしかたを数ふれば花にものおもふ春ぞへにける」（二四代集・式子内親王）。「たれこめて春の行方も知らぬまに待ちし桜も移ろひにけり」（古今集・小野小町）。「五月雨に物思ひをれば時鳥夜深く鳴きていづち行らん」（同・紀友則）。

【作者】小野小町（生没年・伝記未詳）。出羽国（秋田県）の郡司小野良真の娘で、参議小野篁の孫と伝えられる。平安朝初期の女流歌人の第一人者。「古今集」第二期の歌人である。六歌仙および三十六歌仙の一人で、晩年は路傍に食を乞い諸国を漂泊したという。「古今集」に十二首、勅撰集に六十二首。家集に「小町集」がある。

▨出典　「古今集」巻二・春の歌。「題しらず――小野小町」。

10 これやこの　往くも帰るも別れても
知るも知らぬも逢坂の関

蟬丸

【歌意】これがまあ、東国へゆく人も京へ帰る人もここで別れ、まえから知っている人も未知の人もここで逢うから、逢坂の関というのであろう。

名高い関をさらりとよんだ歌である。

■参考　「これやこの大和にしてはわが恋ふる紀路にありといふ名に負ふ背の山」（万葉集・阿閉皇女）。「足柄の関の山路を行く人は知るも知らぬも疎からぬかな」（後撰集）。「世の中はとてもかくても同じこと宮も藁屋もはてしなければ」（新古今集・蟬丸）。「逢坂の嵐の風は寒けれどゆくへ知らねばわびつつぞぬる」（古今集・蟬丸）。

【作者】蟬丸（生没年・伝記未詳）。「今昔物語」巻二十四によれば、宇多天皇の第八皇子敦実親王の雑色（雑役）で、のち隠者となって、延喜五年（九〇五）ころには逢坂山に住んでいたと伝えられる。

勅撰集には四首はいっている。

■出典　「後撰集」巻十五・雑の歌。「逢坂の関に庵室を造りて住侍りけるに行かふ人を見て――蟬丸」。

11 わたの原　八十島かけて漕ぎ出でぬと
人には告げよあまの釣り船

参議篁

【歌意】 広い海原を、数多くの島のあいだを通って、(隠岐の国へ流される)船出をしたと、(流人の身で便りもできないから)わが想う京の人に伝えてくれ。つり船に乗っている人(漁夫)よ。

ままならぬ身のせつない想いを託した歌である。

▨**参考**　「思ひきや鄙のわかれに衰えて海人の縄たぎいさりせぬとは」(古今集・参議篁)。

【作者】 小野篁(延暦二十一年・八〇二〜仁寿二年・八五二)。参議正四位下小野峯守の長男。二十一歳のとき文章生となり、太宰少弐に任ぜられ、承和三年(八三六)遣唐副使として船出したが暴風にあって引きかえし、翌四年の再出発にさいして大使の藤原常嗣と争い、病気といつわって船に乗らず、大使をそしる詩をつくったりしたので、嵯峨天皇の怒りにふれて、同五年十二月隠岐島に流された。同七年、文才を惜しまれて許され、蔵人頭、参議を経て従三位。五十一歳で没。

「古今集」の六首をふくめ、「新古今集」などの勅撰集に十四首はいっている。

▨**出典**　「古今集」巻九・羇旅の歌。「隠岐国に流されける時に船に乗りて出立つとて京なる人の許に遣はしける――小野篁朝臣」。

12

天津風　雲の通ひ路吹とぢよ
乙女の姿しばしとどめむ

僧正遍昭

【歌意】空吹く風よ、天女のかえるみちを吹きとじてくれ。美しい天女の舞姿をいましばらく見たいので。

美しいものを、まともに美しいとみるうるわしい歌である。

▨参考　「たらちめはかかれとてしもうば玉のわが黒髪を撫でずやありけむ」(後撰集・僧正遍昭)。「末の露もとのしづくや世の中のおくれ先だつためしなるらむ」(前十五番歌合・同)。「来たれども云ひし馴れねば鶯の君に告げよとをしへてぞ鳴く」(同)。「霜雪のふる屋の下にひとり寝のうつぶし染のあさのけさなり」(同)。

【作者】僧正遍昭(弘仁七年・八一六～寛平二年・八九〇)。俗名は良岑宗貞。仁明天皇に仕え、嘉祥三年(八五〇)帝の崩御にあい、深草山に葬った夜、叡山に登り、慈恵僧正の弟子となる。元慶三年(八七九)に権僧正。七十六歳で没。

三十六歌仙、六歌仙の一人。勅撰集には三十五首はいっている。家集「遍昭集」がある。

▨出典　「古今集」巻十七・雑の歌。「五節の舞姫を見て詠める――よしみねのむねさだ」。

13

筑波根の　峯より落るみなの川
恋ぞつもりて淵となりぬる

陽成院

【歌意】筑波山の峯を源として流れおちる男女川のように、しずくが末には大河になるように、人知れず芽ばえたわたしの恋も、いつのまにか大河のふちのように深くなってしまった。
ふかみゆく恋をしずかに思う心の歌である。

■参考　「筑波嶺の岩もとどろに落つる水世にもたゆらにわが思はなくに」(万葉集)。「津の国のみつの堀江に雨ふればかぎりもしらずたまるわがこひ」(伊勢集)。

【作者】陽成院(貞観十年・八六八～天暦三年・九四九)。第五十七代天皇。諱は貞明。清和天皇の第一皇子。元慶元年(八七七)十歳で即位。母高子の兄藤原基経が摂政となり政務を執る。同八年(八八四)二月、精神病のため譲位。狂暴、非道な行ないが伝えられている。八十二歳で崩御。
勅撰集にはこの一首だけがはいっている。

■出典　「後撰集」巻十一・恋の歌。「釣殿の内親王につかはしける――陽成院御製」。

14 陸奥(みちのく)の　しのぶもぢずり誰ゆゑに
乱れそめにし我ならなくに

河原左大臣(かわらのさだいじん)

【歌意】奥州の信夫郡(しのぶごおり)（福島県）産のもぢずり（捩り摺り……草木で乱れ模様に摺った布）のように、わたしのこころは乱れてしまった。だれのせいでしょう。自分で乱れたのではない、みんな、恋しく想うあなたのせいです。

せつない恋心を相手に訴える歌である。

▨参考　「うちつけに思ひ出づとやふるさとも忍草にてすれるなりけり」（藤原敦忠）。「春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れ限り知られず」（伊勢物語）。「陸奥の信夫もぢずり乱れつつ色にと恋ひむ思ひ染めてき」（拾遺愚草・藤原定家）。

【作者】河原左大臣（弘仁十三年・八二二～寛平七年・八九五）。源融(みなもとのとおる)。嵯峨天皇の第八皇子。承和五年（八三八）源氏姓を賜わって臣籍に降下。貞観十四年（八四七）に左大臣となる。七十四歳で没。風流を好み、奥州塩釜に河原院などの別荘をもち、宇治の別荘はのちの平等院である。勅撰集には、「古今集」と後撰集に各二首はいっている。

▨出典　「古今集」巻十四・恋の歌。「題知らず――かはらの左大臣」。

15 君がため　春の野に出て若菜つむ
わが衣手に雪はふりつつ

光孝天皇

【歌意】あなたにあげようと思って、春の野辺に出て若菜を摘んでいるわたしの衣の袖に、たえまなく雪がふりかかってくる。

絵をみるように美しい歌である。

▨参考　「明日よりは春菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ」（万葉集・山部赤人）。「春日野の若菜摘みにやしろたへの袖ふりはへて人の行くらむ」（古今集・紀貫之）。「君がため衣の裾を濡らしつつ春の野に出て摘める若菜ぞ」（大和物語・良岑宗貞に贈ったある女の母の歌）。

【作者】光孝天皇（天長七年・八三〇〜仁和三年・八八七）。第五十八代天皇。諱は時康。仁明天皇の第三皇子。元慶八年（八八四）五十四歳で即位。病のため五十八歳で崩御。在位の年号から「仁和の帝」ともよばれた。

勅撰集には「古今集」などに十四首はいっており、「仁和御集」がある。

▨出典　「古今集」巻一・春の歌。「仁和の帝の皇子におはしましける時に人に若菜たまひける御歌」。

16

立別れ　いなばの山の嶺に生ふる
まつとし聞かば今かへり来む

中納言行平

【歌意】わたしはいま、みなさんとお別れして因幡の国（鳥取県）へゆくが、かの地にある稲羽山に生えている松の木の名のように、みなさんがわたしを待っていると聞いたならば、すぐにもこの京に帰ってきましょう。

旅だちの情がしみじみとつたわる歌である。

▨参考　「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ」（古今集・行平）。

【作者】中納納言行平（弘仁九年・八一八～寛平五年・八九三）。平城天皇の皇子。弾正尹四品阿保親王の第二子。在原業平の異母兄。天長三年（八二六）業平とともに在原姓を賜わり、臣籍に降る。文徳天皇の斉衡二年（八五五）正月に従四位に叙せられ、因幡守に任ぜられて京をたつ。元慶六年（八八二）に中納言に任ぜられ、民部卿もかねたが、七十六歳で没。

「在民部卿家歌合」（仁和元年・八八五）は現存最古の歌合であり、この人の家で催されたものの集である。勅撰集には「古今集」「後撰集」「玉葉集」などに十一首入首。

▨出典　「古今集」巻八・離別の歌。「題知らず――在原行平朝臣」。

17

千早ぶる　神代もきかず龍田川
からくれなゐに水くくるとは

在原業平朝臣

【歌意】神秘な神代にも、このような不思議なことがあったとは聞いたことがない。この絵のように龍田川の流れを美しい紅色にくくり染め（しぼり染め）にするということは。
おおらかなほめ歌である。

▨参考　「もみぢ葉の流れてとまるみなとには紅深き浪や立つらむ」（古今集・素性法師）。「世の中にたへて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」（業平の代表作）。「つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」（古今集・業平の辞世の歌）。

【作者】在原業平朝臣（天長二年・八二五〜元慶四年・八八〇）。阿保親王の第五皇子。五十六歳で没。美男で「伊勢物語」の主人公格。天才的歌人で六歌仙、三十六歌仙の一人。勅撰集には「古今集」に三十首、「後撰集」などに五十七首はいっている。家集「業平朝臣集」がある。

▨出典　「古今集」巻五・秋の歌。「二条の后の春宮の御息所と申しける時御屛風に龍田川に紅葉流れるかた（絵）を描けりけるを題にて詠める——なりひらの朝臣」。

18 住の江の　岸に寄る浪よるさへや
夢の通路人目よくらむ

藤原敏行朝臣

【歌意】 岸による波ということばではないが、恋しい人に逢いにゆく夜の夢のみちでまで、人目をさける自分の姿をみるのはどうしたことであろうか。

忍ぶ恋のやるせなさがつたわりくる歌である。

参考　「恋ひわびてうちぬるなかに行きかよふ夢のたびぢはうつつならなむ」（古今集）。「秋きぬと目にはさやかに見へねども風の音にぞ驚かれぬる」（同）が代表作。

【作者】 藤原敏行朝臣（生年未詳。没年も昌泰四年・九〇一と延喜七年・九〇七の二説がある）。陸奥出羽按察使藤原富士麿の子。仁和二年（八八六）に従五位上左兵衛権佐に任ぜられ、従四位上右兵衛督までのぼったが、若死（二十歳という説がある）した。

能書家としても知られ、歌人としては三十六歌仙の一人で、勅撰集には「古今集」などに二十八首はいっている。家集には「敏行朝臣集」がある。

出典　「古今集」巻十二・恋の歌。「寛平の御時后宮の歌合の歌――藤原敏行朝臣」。

19

難波潟　みじかき蘆のふしの間も
逢はで此世を過してよとや

伊勢

【歌意】難波の干潟に生えている葦のあの短い節のあいだほどのわずかな間でも、あなたに逢わないですごせというのですか。

それはあまりにせつない、という恋の歌である。

▨参考　「散りちらず聞かまほしきを故里の花見て帰る人も逢はなむ」（今昔物語・伊勢）。「飛鳥川渕にもあらぬわが宿も瀬に変りゆくものにぞ有ける」（古今集・伊勢の晩年の作で、住む家まで売ったとき、柱に記してあった歌とつたえられる）。「津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたるなり」（西行法師）。

【作者】伊勢（生没年未詳。一説には陽明天皇即位の元慶元年・八七七～天慶二年・九三九とつたえられる）。伊勢守藤原継蔭の娘。寛平四年（八九二）ころから七条の后に仕え、のち宇多天皇の寵愛をうけて行明親王（桂宮）を生んだので「伊勢の御」と称せられた。

三十六歌仙の一人。古今集時代を代表する閨秀歌人で、「後撰集」（六十九首）「古今集」などの勅撰集に百八十首はいっている。家集に「伊勢集」がある。

▨出典　「新古今集」巻十一・恋の歌。「題知らず――伊勢」。

20 わびぬれば　今はた同じ難波(なには)なる
身をつくしても逢はむとぞ思ふ

元良親王(もとよししんのう)

【歌意】逢いびきが人に知れてしまったうえは、さびしくつらい思いをしていてもしかたがない。今はもう何をしても同じことだから、難波にある澪標(みおつくし)ではないが、いっそのこと一身を捨てたものと思って逢おうと思う。

こらえにこらえた忍ぶ恋の実感がこもる歌である。

▨参考　「世にふればありてふことを菊の花めで過ぎぬべき心地こそすれ」(元良親王)。「ふもとさへあつくぞありける富士の山みねのおもひの燃ゆる時には」(同)。「鈴虫の声のかぎりをつくしても長き夜あかずふる涙かな」(源氏物語・桐壺)。

【作者】元良親王(寛平二年・八九〇～天慶六年・九四三)。陽成天皇の第一皇子。元慶元年従四位上、のち三品兵部卿(さんぼんのひょうぶのきょう)に任ぜられ、五十四歳で没。親王の説話は「大和物語」「徒然草」に記されている。勅撰集には後撰集などに十九首はいっている。家集には「元良親王御集」がある。

▨出典　「後撰歌」巻十三・恋の歌。「事出で来て後に京極の御息所に遣はしける——もとよしのみこ」。

21　今来むと　云ひしばかりに長月の
有明の月を待ち出でつるかな

素性法師

【歌意】すぐにゆこうとあなたがいってきたばかりに、それを信じて待っているうちに、秋の長い夜が明けはじめ、明けがたの月（二十日すぎの月）をみる時刻になってしまいました。

女性の立場から詠んだ恋の歌である（これは一夜の待ちではなく、待てども訪れぬ人を幾月も待つうちに、秋も長月の頃になったとみる定家の説もある）。

▨参考　「長月の有明の月のありつつも君しきまさば我恋めやも」（拾遺歌・柿本人麿）。「秋山にまどふ心を山河の滝の白沫に消ちやはててむ」（素性法師）。

【作者】素性法師（生没年未詳）。良岑宗貞（僧正遍昭）の子で、俗名は良岑玄利。清和天皇に仕え、のち剃髪して素性と改め、寛平八年（八九六）に権律師となり、そののち大和石上守の良因院の住持となった。

三十六歌仙の一人で、「古今集」の三十二首をはじめ、勅撰集には「後撰集」などに六十五首はいっている。「素性法師集」がある。

▨出典　「古今集」巻十四・恋の歌。「題知らず——そせい法し」。

22

吹くからに　秋の草木のしをるれば
むべ山風を嵐と云らむ

文屋康秀

【歌意】それが吹くとすぐ秋の草や木がしおれる。それをみていると、なるほど山風を嵐というのも当然である。

　これだけの歌であるが、当時はこのような技巧の歌が重んじられる傾向があったようである。

▨**参考**　「雪ふれば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅と分きて折らまし」（古今集・紀友則）。「打ち吹くに秋の草木のしをるればうべ山風は荒しなるらむ」（新撰万葉集）。「年の内の雪を木毎の花と見て春を遅しときゐる鶯」（続古今集・為家）。「春の日の光にあたるわれなれど頭の雪となるぞわびしき」（古今集・康秀）。

【作者】文屋康秀（生没年未詳）。元慶元年（八七七）正月、山城大掾。同三年、縫殿助に任ぜられ、のち三河掾として下る。このころ、小野小町とのあいだに歌の贈答があったことが小町の歌の詞書からうかがえる。

　技巧の歌にすぐれ、六歌仙の一人。勅撰集には「古今集」に五首、「後撰集」に一首はいっている。

▨**出典**　「古今集」巻五・秋の歌。「是貞の親王の家の歌合の歌——文屋やすひで」。

23

月見れば　千々に物こそ悲しけれ
我身ひとつの秋にはあらねど

大江千里

【歌意】月をながめていると、いろいろなことが胸にこみあげ、心がみだれて、ものがなしく感ぜられる。わたしひとりの秋ではないのに。

秋のさびしさが胸にせまりくる歌である。

▨参考　「吾が為に来る秋にもあらなくに虫の音聞けば先づぞかなしき」（新撰万葉集・菅原道真）。「おほかたの秋くるからに我身こそかなしき物と思ひしりぬれ」（古今集・よみ人知らず）。「いく秋を千々にくだけて過ぎぬらむ我身ひとつを月に憂へて」（拾遺愚草・定家）。「ながむればちぢに物思ふ月にまたわが身ひとつの峯の松風」（新古今集・鴨長明）。

【作者】大江千里（生没年未詳）。参議従三位大江音人の第二子。行平、業平の甥。玉淵、春潭、千古は兄弟。平安朝の人で延喜三年（九〇三）に兵部大丞に任ぜられる。

文学にすぐれ、寛平六年（八九四）宇多天皇の命により、古い漢詩句を題として詠んだ「句題和歌」（「大江千里集」ともいわれる家集）を詠進した。歌人としては勅撰集に二十五首入首。

▨出典　「古今集」巻四・秋の歌。「是貞の親王の家の歌合の歌――大江千里」。

24

此たびは　幣もとりあへず手向山
紅葉の錦神のまにまに

菅家

【歌意】こんどの旅では、帝のお供だったので、おそなえしなければならない幣も捧げられませんでしたが、ここへ来てみて錦織のように美しいこの紅葉を、幣のかわりとして捧げさせていただきたく思います。どうぞ神の御心のままにおうけください。一点の曇りもない美しい心の歌である。

▨参考　「たむけにはつづりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさん」（古今集・素性法師）。

【作者】菅家は菅原道真（承和十二年・八四五～延喜三年・九〇三）。参議従三位是善の子。文章博士菅原清公の孫。幼少のころから文才を知られ、元慶元年（八七七）文章博士。宇多天皇の信任を得、昌泰二年（八九九）には右大臣と、異例の昇進をしたが、延喜元年（九〇一）正月、左大臣藤原時平を中心とする藤原氏の中傷により太宰権師に左遷され、九州の太宰府で同三年二月二十五日、五十歳で没。

勅撰集には三十四首入首。編著書は「類従国史」「三代実録」「新撰万葉集」、詩集に「菅家文草」「菅家後集」がある。

▨出典　「古今集」巻九・羇旅の歌。「朱雀院の奈良におはしましける時に手向山にて詠める――すがはらの朝臣」。

25

名にし負はば　逢坂山のさねかづら
人に知られてくるよしもがな

三条右大臣

【歌意】 逢ってともに寝るという、名の通りの逢坂山のさねかづらであるならば、そのさねかづらを繰るように、人に知られずに通う方法があってほしいものだ。

恋しい人に、だれにも気づかれずに逢いたいという願望の歌である。

▨参考　「大和には鳴きてかきたらむ呼子鳥きさの中山よびぞ越ゆなる」（万葉集）。

【作者】 三条右大臣とは藤原定方のこと（貞観十五年・八七三〜承平二年・九三二）。内大臣高藤の次男。延喜六年（九〇六）右権中将。醍醐天皇の延長二年（九二四）正月、大納言から右大臣となる。邸が京都の三条にあったので三条右大臣とよばれた。

和歌を好み、管絃に秀でた才人であった。家集に「三条大臣集」があり、「古今集」に一首、「後撰集」に九首、「新勅撰集」に四首など、勅撰集に十六首はいっている。

▨出典　「後撰集」巻十一・恋の歌。「女の許に遣しける――三条右大臣」。

26

小倉山　峰のもみぢ葉心あらば
今ひとたびのみゆき待たなむ

貞信公

【歌意】小倉山の峰のもみじの葉よ、もし心があるならば、もういちど、みゆき（醍醐天皇の行幸）があるはずだから、それまでそのまま散らずに待っていてほしい。

美しい紅葉に語りかける、心から皇室讃美がつたわってくる歌である。

▨**参考**　「吉野山きしの紅葉し心あらば稀のみゆきを色かへて待て」（古今集・祖父良房）。

【作者】貞信公とは藤原忠平の諡（元慶四年・八八〇〜天暦三年・九四九）。関白基経の四男。時平の異母弟で道真と親しかった。延喜十四年（九一五）右大臣。摂政、太政大臣を経て天慶四年（九四一）に関白となる。

聡明温厚な人柄で人望があり、藤原氏隆盛のもとをつくった政治家、小一条に邸があったので、小一条太政大臣ともよばれた。

「後撰集」に七首、「拾遺集」に六首入首。わが国古代の法典「延喜格式」を完成、日記に「貞信公記」がある。

▨**出典**　「拾遺集」巻十七・雑秋の歌。「亭子院大井河に御幸ありて行幸もありぬべき所也とおほせたまふにことのよしそうせんと申て――小一条太政大臣」。

27

みかの原　わきて流るる泉川(いづみがは)
いつ見きとてか恋しかるらむ

中納言(ちゅうなごん)兼輔(かねすけ)

【歌意】瓶(みか)の原（京都府相楽郡）に湧いて流れるいづみ川の、そのいつということではないが、わたしはいったいあのひとにいつ逢ったというので、こんなに恋しく思うのであろう。

恋こがれる人の心を詠んだ恋歌である（なお契冲(けいちゅう)は「改観抄」で、この歌は兼輔の作ではなく読人しらず、としている）。

▨参考　「泉川ゆく瀬の水のたへばこそ大宮どころうつろひゆかめ」（万葉集）。「都いでて今日みかの原泉川川風寒し衣かせ山」（古今集）。

【作者】中納言兼輔（元慶元年・八七七～承平三年・九三三）。藤原利基の六男。左大臣冬嗣(ふゆつぐ)の曽孫。邸が賀茂川堤ちかくにあったので堤中納言とよばれた。

「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（後撰集）が代表作として知られる。家集に「兼輔集」があり、勅撰集には五十六首はいっている。

▨出典　「新古今集」巻十一・恋の歌。「題知らず――中納言兼輔」。

28 山里は　冬ぞさびしさまさりける
人目も草もかれぬと思へば

源宗于朝臣

【歌意】 山里はさびしいものであるが、冬になるとなおさらさびしく感じられる。たずねくる人の姿もなく、草木も枯れてしまうと思うと、さびしさが身にしみる。

冬景色につのる寂莫感を詠んだ歌である。

▨参考 「さびしさにたへたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山里」（西行法師）。「夢路まで人目はかれぬ草の原おきあかす霜に結ぼほれつつ」（拾遺愚草・定家）。

【作者】 源宗于朝臣（生没年未詳）。光孝天皇第一皇子是忠親王の子。右京太夫、正四位。天慶二年（九三九）没。

三十六歌仙の一人。「古今集」に六首、「後撰集」に三首、「新勅撰集」などに六首入首。家集に「宗于集」。秀歌に「つれもなくなり行く人の言の葉ぞ秋よりさきの紅葉なりける」「あはずして今宵明けなば春の日のながくや人をつらしと思はん」などがある。

▨出典 「古今集」巻六・冬の歌。「冬の歌とてよめる――源宗于朝臣」。

29 心あてに　折らばや折らむ初霜の
置きまどはせる白菊の花

凡河内躬恒

【歌意】心で見当をつけて折るなら折ってもみようか。初霜が白くおりて、どれが花の葉かわからなくなっている白菊の花よ。

誇張した表現であるが、白菊の印象がいかにもらしく、観念的なものを重くみた平安朝期の美意識が香る美しい歌である。

▨参考　「月夜にはそれとも見へず梅の花香を尋ねてぞ知るべかりける」（古今集・躬恒）。

【作者】凡河内躬恒（生没年未詳）。寛平六年（八九四）甲斐権少目、延喜七年（九〇七）丹波権大目、同十一年に和泉大掾にすすみ六位。終生、位の低い国司であったが、歌人としては当時の代表格。貫之、忠岑らとともに「古今集」の撰者となり、三十六歌仙の一人でもある。家集に「躬恒集」があり、勅撰集には百九十四首はいっている。秀歌としては「わが宿の花見がてらに来る人は散りなんのちぞ恋しかるべき」（古今集）、「わが恋はゆくへも知れず果てもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ」などが知られている。

▨出典　「古今集」巻五・秋の歌。「しらぎくの花をよめる――凡河内躬恒」。

30

有明の　つれなく見えし別より
暁ばかり憂きものはなし

壬生忠岑

【歌意】 月が残る夜明け、有明の空にそっけなく残るあの月のように、冷淡なそぶりのあなたと別れて帰ってから、毎夜、無情に見える月が残る暁ほど悲しいものはない。
きぬぎぬの別れを詠んだという説もあるが、片想いの心情がせまってくる歌である。

▨参考　「逢はずして今宵明けなば春の日のながくや人をつらしと思はむ」（古今集・源宗于）。「逢ふことのなぎさにも寄る浪なればうらみてのみぞたち帰りける」（同・石原元方）。

【作者】 壬生忠岑（生没年未詳）。安綱の子。「古今集」撰者の一人で、三十六歌仙の一人でもある。身分は藤原定国の随身で、摂津権大目で六位であった。康保二年（九六五）に九十八歳で没したという説がある。
家集に「忠岑集」があり、「忠岑十体」の歌論書が有名。勅撰集には「古今集」の三十五首をはじめ四十七首はいっている。

▨出典　「古今集」巻十三・恋の歌。「題しらず——みぶのたゞみね」。

31

朝ぼらけ　有明の月と見るまでに
吉野の里に降れる白雪

坂上是則

【歌意】吉野の里に泊って、ほのぼのと夜の明けゆくころ、外を見わたすと、まだ空に残っている月の光と思うくらいに、すがすがしい白雪が降りしいていた。

明けがたの、しらじらと清く美しい雪景色がまぶたにうかぶ歌である。

▨参考　「冬ごもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞ降りける」（古今集・紀貫之）。「消ぬがうへにまたも降り敷け春がすみ立ちなばみゆき稀にこそ見め」（同・読人しらず）。

【作者】坂上是則（生没年未詳）。坂上田村麿の子孫、好蔭の子。延長二年（九二四）従五位下、加賀介にすすむ。

蹴鞠の達人で、二百六度連続蹴ったと伝えられる。

三十六歌仙の一人で家集「坂上是則集」があり、「古今集」に七首のほか、勅撰集に三十九首はいっている。

▨出典　「古今集」巻六・冬の歌。「やまとのくににまかれりける時に雪のふりけるをみてよめる――坂上是則」。

32

山川に　風のかけたるしがらみは
流れもあへぬ紅葉なりけり

春道列樹

【歌意】 山あいを流れる川に、人がかけたのではなく、風が吹きよせてかけたしがらみ（柵）は、よくよく見ると、散りつもり流れようとしても流れきれない紅葉なのであった。

清流を紅葉でせきとめた光景が、あざやかによみがえる歌である。

▨参考　「風吹けば落つるもみぢ葉水清み散らぬ影さへ底に見へつつ」（古今集・凡河内躬恒）。「きのふといひけふとくらしてあすか川流れて早き月日なりけり」（同・列樹）。

【作者】 春道列樹（生年未詳）。新名宿禰の子。延喜十年（九一〇）文章博士。同二十年に壱岐守に任ぜられ、この年に没したと伝えられる。

勅撰集にはいっている歌は「古今集」三首と「後撰集」二首。そのうちの一首が、「数ならぬ深山がくれのほととぎす人知れぬ音をなきつつぞふる」である。

▨出典　「古今集」巻五・秋の歌。「志賀の山越にてよめる――春道列樹」。

33

久方の　光のどけき春の日に
しづ心なく花の散るらむ

紀友則

【歌意】陽の光がこんなにのどかな春の日に、どうして、さくらの花ばかりが、あわただしく散りゆくのであろうか。

散りいそぐ花によせる哀感ただよう絶唱である。

▨**参考**　「さくら花散りぬる風のなごりには水なき空になみぞ立ちける」（古今集・紀貫之）。

【作者】紀友則（生年未詳）。武内宿禰の子孫の紀有朋の子。紀貫之の従兄弟。延喜四年（九〇四）大内記、五位。翌五年、貫之らと「古今集」の撰者の一人に選ばれたが、撰が完了しない同年二月に六十一歳で病没した。友則の死を悼む貫之の歌に「明日知らぬわが身と思へどくれぬまの今日は人こそかなしかりけり」（古今集）がある。

三十六歌仙の一人で、「古今集」に四十六首のほか、「後撰集」などに二十首はいっている。家集に「友則集」があり、古今集時代の代表的歌人である。秀作に「夕されば佐保の河原の河霧に友まどわせる千鳥なくなり」がある。

▨**出典**　「古今集」巻二・春の歌。「さくらの花のちるをよめり――きのとものり」。

34

誰をかも　知る人にせむ高砂の
松もむかしの友ならなくに

藤原興風

【歌意】誰をまあ、知りあいにしようか。自分は年老いて、むかしの友人はみな他界し、いまはひとりもいない。せめてあの老松とでも語りたいと思うが、それもむかしなじみの友ではない。老いの孤感がひしひしとよせてくる歌である。

▨参考　「かくしつつ世をやつくさん高砂の尾上に立てる松ならなくに」(古今集・読人しらず)。「いたづらに世にふるものと高砂の松もわれをや友とみるらむ」(拾遺集・紀貫之)。

【作者】藤原興風（生没年未詳）。道成の子。延喜十四年（九一四）、下総権大掾。琴の名手として知られ、三十六歌仙の一人でもある。

紀貫之らと屏風歌もつくっているので、当代にはかなり知られた歌人。家集「興風集」があり、勅撰の歌は「古今集」に十七首、「後撰集」などに二十一首の計三十八首ある。

▨出典　「古今集」巻十七・雑の歌。「題しらず——藤原興風」。

35

人はいさ　心も知らずふるさとは
花ぞむかしの香ににほひける

紀貫之

【歌意】人はどうであろうか。心はわからないが、自分がふるさとのように思っているこの里はかわらず、なじみの庭の梅の花はむかしのままの香をただよわせ、咲いている。
かわりゆく人の心と、かわらない里やなつかしい花の香の対比がゆかしい歌である。

▨**参考**　「いろみへでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」（小野小町）。「わが園に梅の花散る久方の天より雪の流れ来るかも」（万葉集・大伴旅人）。

【作者】紀貫之（生没年未詳）。一説に貞観十年・八六八〜天慶八年・九四五とある）。望行の子。延喜五年（九〇六）御書所預となり、この年に躬恒、忠岑、友則らと勅撰歌集の第一集である「古今和歌集」の撰者に選ばれ、これまで漢文で書いていた例を破り、仮名まじり序文を書いた。のち土佐守在任中、任地で勅命により「新撰和歌集」を撰集した。帰途の記が「土佐日記」である。
三十六歌仙の一人。家集に「貫之集」。勅撰集には四百四十四首はいっており、これは定家についで多い。「万葉集」の柿本人麿とならぶ歌聖と称される。

▨**出典**　「古今集」巻一・春の歌。

36 夏の夜は　まだ宵ながら明けぬるを
雲のいづこに月やどるらむ

清原深養父

【歌意】 短い夏の夜は、まだ宵の口だと思っているうちに早くも明けてしまった。あの月はとても西山にたどりつけまい。いまごろ雲のどのあたりに宿りとどまっているだろうか。

短夜の暁に月の宿を想う、観月の余韻が香る歌である。

▨参考　「短夜の更けゆくままに高砂の峯の松風吹くかとぞきく」（後撰集・藤原兼輔）。「夏の夜のふすかとすればほととぎすなくひと声に明くるしののめ」（古今集）。

【作者】 清原深養父（生没年未詳）。「日本書紀」の撰者舎人親王の子孫、房則の子。「枕草子」の作者清少納言の曽祖父。延長元年（九二三）内蔵大允。琴の名手で、のちの三十六歌仙（後六々撰）の一人。家集に「深養父集」がある。「古今集」の十七首など勅撰歌は四十一首。

▨出典　「古今集」巻三・夏の歌。「月のおもしろかりける夜暁方によめる――ふかやぶ」。

37

白露に　風の吹きしく秋の野は
つらぬき止めぬ玉ぞ散りける

文屋朝康

【歌意】 秋の野に立つと、しきりに吹く風に草の葉に白く光る露が、糸をとおしてとめてない玉のように乱れて散る。

小粒の水晶の玉のような朝露が、ぱらぱらと散るさまが思いうかぶ歌である。

▨**参考**　「秋の野に置く白露は玉なれやつらぬきかくるくもの糸すぢ」（古今集・朝康）。「山城のくぜの原野のしのすすき玉ぬきあへぬ風の白露」（拾遺愚草）。「武蔵野につらぬき止めぬ白露の草はみながら月ぞこぼるる」（拾遺愚草・員外）。

【作者】 文屋朝康（生没年未詳）。康秀の子と伝えられるが定かではない。一説には、駿河掾から延喜二年（九〇二）に大舎人允にすすんだと伝えられる。

「寛平御時后宮歌合」の作者であったことが「古今集」で知られる。勅撰集は「古今集」に一首、「後撰集」に二首はいっている。なお、契冲は、22の「吹くからに……」は康秀の作ではなく朝康の作であるとしており、この説によると百人一首に朝康の歌が二首はいっていることになる。

▨**出典**　「後撰歌」巻六・秋の歌。「延喜御時歌めしければ――文尾朝康」。

38

忘らるる　身をば思はず誓ひてし
人の命の惜しくもあるかな

右近

【歌意】あなたに忘れられるわたしの身のつらさよりも、かわらぬ愛の約束をやぶったあなたが神罰をうけるのではないかと、あなたのいのちが惜しまれて、とても悲しいのです。
悲恋に歎く女心がせまりくる歌である。

▨参考　「忘られん時偲べとぞ浜千鳥行くへも知らぬあとをとどむる」(古今集)。「身を捨てて人の命を惜しむともありし誓ひのおぼへやはせむ」(拾遺愚草・定家)。

【作者】右近は右近衛少将藤原季縄の娘で、右近とは父の官職にちなむ呼称である(生没年未詳)。醍醐天皇の皇后七条后穏子に仕えた。「大和物語」によると、43の「逢ひ見ての……」の作者権中納言藤原敦忠との愛と失恋や、桃園宰相源保光などとの愛がうかがえる。「後撰集」に五首、「拾遺集」に三首、「新勅撰集」に一首はいっている。

▨出典　「拾遺集」巻十四・恋の歌。「題しらず——右近」。

39

浅茅生の　小野の篠原忍ぶれど
あまりてなどか人の恋しき

参議等

【歌意】茅草がまばらな、篠の生えている原の「しの」のように、わたしはしのびにしのんできたが、想いあまって、どうしてあの人がこんなにも恋しいのだろう。
つつみきれない恋のせつなさをうったえる歌である。

▨参考　「浅茅生の小野の篠原忍ぶとも人知るらめやいふ人なしに」（古今集・読人しらず）。「浅茅生の小野の篠原うちなびきをちかた人に秋風ぞ吹く」（拾遺愚草・藤原定家）。

【作者】参議等は源等（元慶四年・八八〇～天暦五年・九五一）。中納言希の二男、嵯峨天皇の曽孫。丹波守、太宰大弐とすすみ、天暦元年（九四七）、参議となる。
勅撰集には「後撰集」の四首のみ。その一首は「東路の佐野の船橋かけてのみ思ひ渡るを知る人のなき」である。

▨出典　「後撰集」巻九・恋の歌。「人に遣しける――源ひとしの朝臣」。

40 忍ぶれど　色に出にけりわが恋は
物や思ふと人の問ふまで

平兼盛

【歌意】 胸に秘めていたのだけれども、わたしの恋はついに表情にあらわれてしまったらしい。なにか思い悩むことでも……と人から尋ねられるようになったのだから。

ふかく秘めた恋の、かくしきれない心の歌である。

▨**参考**　「思ふには忍ぶることぞまけにける色には出じと思ひしものを」（古今集・読人しらず）。「恋しさをさらぬがほにて忍ぶれば物や思ふと見る人ぞ問ふ」（古歌・作者不詳）。

【作者】 平兼盛（生年未詳）。篤行王の第三子で、光孝天皇の玄孫、兼盛王とも称され、天暦四年（九五〇）、越前権守に任ぜられ、臣籍に下った。のち山城介、駿河守などを歴任。漢学にすぐれ、歌人としても知られ、三十六歌仙の一人。家集に「兼盛集」があり、「拾遺集」の三十八首など八十三首の勅撰歌がある。

▨**出典**　「拾遺集」巻十一・恋の歌。「天暦御時歌合――平兼盛」。

41

恋すてふ　わが名はまだき立ちにけり
人知れずこそ思ひ初めしか

壬生忠見

【歌意】わたしが恋をしているといううわさが、早くも世間にひろまってしまった。人に知られないように、心ひそかに想っていたのに。

初恋の香りがする恋の浮名を嘆く歌である。

▨参考　「美作やくめのさら山さらさらにわが名はたてじ萬代までに」（古今集）。「人知れずしのぶの浦にやく塩のわが名はまだき立つけぶりかな」（新勅撰集・藤原家隆）。

【作者】壬生忠見（生没年未詳）。忠岑の子。幼名は多々、ついで忠実、忠見と改める。幼少時から歌にすぐれ、宮中から召されたとき、家が貧しく乗物がないと返事、竹馬でまいれといわれ「竹馬は節鹿毛にしていと弱し今夕鹿毛に乗りて参らむ」と詠んだと伝えられる。天徳二年（九五八）に摂津権大目となる。

三十六歌仙の一人で「忠見集」がある。「後撰集」に一首、「拾遺集」十四首など勅撰歌は三十六首。

▨出典　「拾遺集」巻十一・恋の歌。「天暦御歌合——壬生忠見」。

42 契りきな　かたみに袖をしぼりつつ
末の松山浪越さじとは

清原元輔

【歌意】 約束したね、たがいに、涙で袖を濡らして、あの、絶対に波が越すことがないといわれている末の松山を波が越すことがあっても、愛する心はかわらないと。それなのに……。
恋人の心がわりを恨む心情をのべた歌である。

▨**参考**　「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山浪も越えなむ」（古今集）。「思い出でよ末の松山末までも浪越さじとは契らざりきや」（拾遺愚草）。

【作者】 清原元輔（延喜八年・九〇八～永祚二年・九九〇）。顕忠の子で（一説には春光の子とも）清少納言の父。寛和二年（九八六）の正月に肥後守になった。
歌人が輩出した家柄で、和歌所寄人となり、「万葉集」に訓点をつけた。内裏後宮五舎の一つである梨壺の五人の一人として「後撰集」の撰集にあたる。三十六歌仙の一人で、家集に「元輔集」がある。
「拾遺集」に四十八首をはじめ、勅撰歌は百五首と多い。

▨**出典**・「後拾遺集」巻十四・恋の歌。「心かはり侍りける女に、人に代りて――清原元輔」。

43

逢ひ見ての　後の心にくらぶれば
むかしは物を思はざりけり

権中納言敦忠

【**歌意**】恋いこがれ、逢ったらこの苦しみが軽くなると思っていたが、逢って契りをむすんだあとの、いまの恋しい、せつない心にくらべたら、逢い契る前の悩みなど、苦しまなかったと同じようなものである。

はじめて女性を知った男性の、やるせない想いがこめられた歌である。

▨**参考**　「逢ひ見ての後こそ恋はまさりけれつれなき人を今はうらみじ」（後拾遺集）。「逢ひ見ての後の心をまづ知ればつれなしとだにえこそ恨みね」（拾遺愚草）。

【**作者**】権中納言藤原敦忠（延喜六年・九〇六〜天慶六年・九四三）。時平の三男。天慶五年（九四二）、従三位権中納言となる。本院中納言、または枇杷中納言といわれた。琵琶の名手。右近との愛が「大和物語」に見える。三十八歳の若さで没した。

三十六歌仙の一人で「権中納言敦忠卿集」がある。「後撰集」の十首など、勅撰集には三十首はいっている。

▨**出典**　「拾遺集」巻十二・恋の歌。「題しらず――権中納言敦忠」。

44 逢ふことの　絶えてし無くばなかなかに
人をも身をも恨みざらまし

中納言朝忠

【歌意】この世で、恋人に逢い見ることがまったくないものならば、かえって、相手の無情を恨んだり、わが身のつらさ、ふがいなさを恨んだりすることもないであろうに。

いちど逢ったがためのせつない想いの歌である。

▨参考　「世の中に絶えて桜の無かりせば春の心はのどけからまし」（古今集・在原業平）。「憂くつらき人をも身をもよし知らじただ時の間の逢ふこともがな」（拾遺愚草）。

【作者】中納言藤原朝忠（延喜十年・九一〇～康保三年・九六六）。定方の次男。参議を経て応和三年（九六三）に中納言となる。屏風歌をよみ、和漢の学に秀で、笙の名手でもあり、土御門中納言とも呼ばれた。

三十六歌仙の一人で「権中納言朝忠卿集」という家集がある。「後撰集」に四首など勅撰歌は二十一首。

▨出典　「拾遺集」巻十一・恋の歌。「天暦御時歌合に――中納言朝忠」。

45

哀れとも　云ふべき人は思ほえで
身のいたづらになりぬべきかな

謙　徳　公

【歌意】 想いをよせたあなたはつれなく、あなたに恋い焦れてやがて死んでしまうが、こういうわたしのことを、あなたはいたわしいとも不愍だとも思ってくれないのであろう。
悲恋の溜息がきこえてくるような歌である。

▨**参考**　「哀れとも人に知らるる思ひだに積るはいかがあぢきなき世を」(拾遺愚草・員外)。「あぢきなしわが身にまさるものやあると恋せし人をもどきしものを」(後撰集・曽祢好忠)。

【作者】 謙徳公とは藤原伊尹のこと(延長二年・九二四〜天禄三年・九七二)。師輔の長男。天禄元年(九七〇)に摂政、翌年に太政大臣と急昇進、正一位を贈られた。
才智あり、眉目秀麗、歌に秀で、天暦五年(九五一)に和歌所別当(長官)として後撰集の撰にあたる。「一条摂政御集」という歌集があり、「後撰集」などに三十八首の勅撰歌がある。

▨**出典**　「拾遺集」巻十五・恋の歌。「もの云ひ侍ける女の後につれなく侍てさらに逢はず侍ければ——一条摂政」。

46

由良の門を　渡る舟人かぢを絶え
行方も知らぬ恋のみちかな

曽禰好忠

【歌意】丹後の由良の海峡を漕ぎ渡る船頭が舵を失ったように、自分もあの人を想う心を伝える伝手をみつけることができない。これからどうなることやら、先がわからない、はかない恋の道である。

恋する者が抱く不安がただよう歌である。

▨参考　「みさご居るおきつ荒磯に寄る浪の往方も知らず吾が恋ふらくは」（万葉集）。「すまのあまの浦漕ぐ舟のかぢを絶えよるべなき身ぞ悲しかりける」（続古今集・小野小町）。

【作者】曽弥好忠（生没年未詳）。丹後掾など地方の国司をつとめた。寛和元年（九八五）の正月に召されないのに円融院の「子の日の遊び」の歌人の座に列し、襟首をとって幕外に出された、という奇行が伝えられている。元日から大晦日までの日歌三百六十五首詠んだともいわれ、その中の「鳴けや鳴け蓬が杣のきりぎりす過ぎゆく秋はげにぞ悲しき」が代表作である。「曽丹集」という家集があり、中古三十六歌仙（和泉式部以下の平安朝歌人三十六名をいい、人麿以下の三十六歌仙とはことなる）の一人で、「拾遺集」「詞花集」「新古今集」などに八十九首はいっている。

▨出典　「新古今集」巻十一・恋の歌。「題不知――曽祢好忠」。

47

八重むぐら　茂れる宿のさびしきに
人こそ見えね秋は来にけり

恵慶法師

【歌意】 荒地に雑草が幾重にもおい茂ったこのさびしい家のあたりには、住む人もたずね来る人もないが、それでも秋だけは忘れずにおとずれてきた。

人の世のはかなさ、秋のわびしさを詠嘆した歌である。

▨**参考**　「八重むぐら茂き宿には夏虫の声よりほかにとふ人もなし」（後撰集・読人しらず）。「八重むぐらとぢける宿のかひもなし故郷とはぬ花にしあらねば」（拾遺愚草）。

【作者】 恵慶法師（生没年未詳）。花山天皇の寛和ごろの人で、平兼盛、源重之、紀時文らと交わりがあり、幡磨国の国分寺の講師であったこともある。

中古三十六歌仙の一人で、家集に「恵慶法師集」がある。本歌と同じころに詠んだと思われる歌に、「すだきけむむかしの人もなき宿にただ影するは秋の夜の月」（後拾遺集）がある。「拾遺集」などに五十四首の勅撰歌がある。

▨**出典**　「拾遺集」巻三・秋の歌。「河原院にて荒れたる宿に秋来るといふ心を人々によみ侍けるに――恵慶法師」。

48 風をいたみ　岩打つ波の己れのみ
砕けてものを思ふころかな

源重之

【歌意】あまりに風がはげしいので、岩に打ちあたる波がひとりでに砕け散るように、あのひと（女）は岩のように冷静なのに、自分ひとりが思い悩み、心を砕いているこのごろである。
恋のはげしさ、片想いのやるせなさが痛いほどの悲歌である。

▨参考　「いかにして岩打つ波のたちかへり砕くとだにも人に知らせむ」（新千載集）。「己のみ砕けて落つる岩波もあき吹く風にこゑかはるなり」（拾遺愚草・員外）。

【作者】源重之（生年未詳）。清和天皇の皇子貞元親王の孫で、兼信の子。貞元元年（九七六）に相模守となる。のち太宰大弐として太宰府に、また陸奥掾（一説には目）として陸奥に赴き、長保三年（一〇〇一）に当地で没した。
三十六歌仙の一人で「重之集」がある。勅撰歌は「拾遺集」などに六十六首。

▨出典　「詞花集」巻七・恋の歌。「冷泉院東宮と申しつけるとき百首の歌奉りけるによめる――源重之」。

49

御垣守(みかきもり)　衛士(えじ)の焚(た)く火(ひ)の夜(よる)は燃(も)えて
昼は消えつつものをこそ思へ
大中臣能宣朝臣(おおなかとみのよしのぶあそん)

【歌意】 皇居の門を守る兵士たちが焚く火の夜は燃え、昼は消えているように、わたしの胸の情火は夜は炎と燃え、昼は身も心も消え果てるほど思い悩んでいる。
火のような恋の悶(もだ)えがきこえる歌である。

▨**参考**　「みかきもり衛士の焚く火の昼は絶え夜は燃えつつものをこそ思へ」(古今六帖・読人しらず)。「限もなき衛士の焚く火のかげそひて月になれたる秋のみや人」(拾遺愚草)。

【作者】 大中臣能宣朝臣（延喜二十一年・九二一～正暦二年・九九一）。頼基の子。天徳二年（九五八）に神祇少祐(じんぎのしょうゆう)となり、神祇大副を経て祭守となった。
歌に秀で、天暦五年(九五一)に和歌所寄人となり、梨壺の五人の一人として「万葉集」の訓点や「後撰集」を撰集した。三十六歌仙の一人で「能宣朝臣集」がある。勅撰歌は「拾遺集」などに百二十四首。

▨**出典**　「詞花集」巻七・恋の歌。「題しらず――大中臣能宣朝臣」。

50 君がため　惜しからざりし命さへ
長くもがなと思ひけるかも

藤原義孝

【歌意】あなたに逢うためなら、惜しくないと思っていたいのちですが、あなたに逢って帰ってきたいまでは、急に惜しくなって、いつまでもいつまでも生きながらえて、あなたに逢いたいと思うようになりました。

恋の結実をまともによろこび、愛にいのちをかける、おおらかな歌である。

▨参考　「恋ひつつも後も逢はむと思へこそ己が命を長く欲りすれ」(万葉集)。「昨日まであふにしかへばと思ひしをけふは命のをしくもあるかな」(新古今集・頼忠)。

【作者】藤原義孝（天暦八年・九五四～天延二年・九七四）。伊尹の三男。天禄二年（九七一）に左近少将となったが、天延二年のはやり疱瘡（天然痘）にかかり、この年の九月十六日の朝に兄が亡くなり、その日の夕方には、彼も二十一歳の若さで没した。

中古三十六歌仙の一人で「義孝集」があり、勅撰歌は「後拾遺集」などに十二首ある。

▨出典　「後拾遺集」巻十二・恋の歌。「女のもとよりかへりてつかわしける——少将藤原義孝」。

51

かくとだに　えやはいぶきのさしも草
さしも知らじな燃ゆる思ひを

藤原実方朝臣

【歌意】 こんなにも、わたしはあなたを想っている。せめて、このことだけでもあなたに伝えたいのだが、できない。だから、伊吹山の艾草（蓬灸に用いる）の火のように燃えているわたしの胸のうちを、あなたはそうとは知らないでしょうね。

想いかよわぬ、それだからこそ燃える歎きの歌である。

参考　「あぢきなやいぶきの山のさしも草己が思ひに身をこがしつつ」「契りけむ心からこそさしも草己が思ひに燃えわたりけり」（以上二首、古今六帖）。

【作者】 藤原実方朝臣（生年未詳）。定時の子で、叔父済時の養子となる。一条天皇に仕え、寛和三年（九八七）に左近衛中将に任ぜられたが、藤原行成と争い、長徳元年（九九五）に陸奥守に左遷され、同四年任地で没した。

中古三十六歌仙の一人で「実方朝臣集」があり、「新古今集」「拾遺集」などに六十四首入首。

出典　「後拾遺集」巻十一・恋の歌。「女に始て遣しける——藤原実方朝臣」。

52 明けぬれば　暮るるものとは知りながら
なほ恨めしき朝ぼらけかな

藤原道信朝臣

【歌意】 夜が明ければ、やがてその日が暮れる。日が暮れればまたあなたに逢えるということは知りながらも、あなたとの別れの朝はつらく、恨めしい。きぬぎぬの未練をつつみかくさず、おおらかに語る歌である。

▨**参考**　「帰るさの道やはかはるかはらねど解くるにまどふ今朝の淡雪」（本歌とともに「後拾遺集」にある道信の歌である）。

【作者】 藤原道信朝臣（天禄三年・九七二〜正暦五年・九九四）。為光の子で右大臣道兼の養子となった。左近衛中将にすすんだが、正暦五年、二十三歳の若さで亡くなった。孝心厚く、正暦三年六月に父為光が没し、その一年の喪を終え、喪服を脱いだとき「限りあれば今はぬぎ捨てつ藤衣果なきものは涙なりけり」とよんでいる。

中古三十六歌仙の一人で、「道信朝臣集」があり、「拾遺集」などに勅撰歌四十九首ある。

▨**出典**　「後拾遺集」巻十二・恋の歌。「女のもとより雪ふり侍ける日かえりてつかはしける——藤原道信朝臣」。

53

歎きつつ　ひとり寝る夜の明くる間は
いかに久しきものとかは知る

右大将道綱母

【歌意】あなたはたまに訪れて、門を開けるのが遅いなどというけれども、あなたを待ち悲しみ、歎きつづけてひとり寝ている夜の夜明けまでが、どんなに長く待ち遠しいものであるか、あなたはご存知ないでしょう。お察しください。

愛人を待つ女ごころ存分の歌である。

▨**参考**　この歌に対する藤原兼家の返歌は「げにやげに冬の夜ならぬ槙の戸も遅く明くるはわびしかりけり」である。「ながしとてあけずやはあらむ秋の夜は待てかしまきのとばかりをだに」（和泉式部）。

【作者】右大将道綱母（承平七年・九三七〜長徳元年・九九五）。伊勢守倫寧の娘。藤原兼家の側室となり、道綱を生んだ。

「蜻蛉日記」の作者で、本朝古今三美人の一人と称された。中古三十六歌仙の一人で、「道綱母集」がある。「拾遺集」などに勅撰歌三十七首はいっている。

▨**出典**　「拾遺集」巻十四・恋の歌。「入道摂政（兼家のこと）まかりたりけるにかどをおそくあけければたちわづらひぬといひ入りて侍ければ――右大将道綱母」。

54　忘れじの　行末までは難ければ
今日を限りの命ともがな

儀同三司母

【歌意】あなたは、わたしのことをいつまでもわすれないといってくださる。それはありがたいのですが、先先までのことはむずかしいこともあると思いますので、うれしい思いにひたっているいま、今日を限りの命として果ててしまいたい。

不安と恍惚と、混沌。乙女の恋の歌である。

▨参考　「こよひさへあらばかくこそ思ほえめ今日暮れぬまの命ともがな」(後拾遺集・和泉式部)。「明日ならば忘らるる身になりぬべし今日を過さぬ命ともがな」(同・赤染衛門)。

【作者】儀同三司とは官名(太政大臣、左大臣、右大臣と同じ)。准大臣藤原伊周の母、従三位貴子のことである(生年未詳)。漢詩文に秀で、中の関白藤原道隆の妻となり、長徳元年(九九五)に道隆と死別して出家。翌年没。

家集はないが、「拾遺集」などに五首はいっている。

▨出典　「新古今集」巻十三・恋の歌。「中関白かよひそめ侍りけるころ――儀同三司女」。

55

滝の音は　絶えて久しくなりぬれど
名こそ流れてなほ聞えけれ

大納言公任

【歌意】滝が涸れて、その水の音が聞こえなくなってからすでに長歳月たつが、この滝の名声はいまもかわらず、世に伝えられ、知れ渡っている。

古滝をしのび、名声の源を想ったであろう歌である。

▨参考　「さざ浪やしがの都はあれにしをむかしながらの山桜かな」（千載集・読人しらず＝平忠度の歌）。

「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」（古今集・小野小町）。

【作者】大納言公任は藤原公任（康保三年・九六六～長久二年・一〇四一）。頼忠の長男。蔵人頭、中納言、大納言とすすむ。学、詩歌、管絃に秀で、能書家。「金玉集」など著書も多く、「北山抄」「和漢朗詠集」を編集。「拾遺集」の撰者でもあり、家集に「前大納言公任集」がある。中古三十六歌仙の一人で、「拾遺集」などに九十二首入首。

▨出典　「拾遺集」巻八・雑の歌。「大覚寺に人々あまたまかりたりけるにふるきたきをよみ侍ける――右衛門督公任」。

56

あらざらむ　この世の外の思ひ出に
今ひとたびの逢ふこともがな
和泉式部

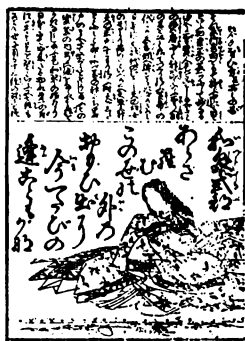
【歌意】病気のわたしは、もう、この世にながくないように思われるので、死んでからのちの、あの世（来世）での思ひ出にもういちどお逢いしたい。

死期を感じた女性が、恋人を恋うせつなる歌で、百人一首中の秀作である。

▨参考　「あらざらむのちの世までを恨みてもその面影をえこそうとまね」（拾遺愚草）。「せめて思ふ今ひとたびの逢ふことに渡らむ河や契りなるべき」（同・員外）。

【作者】和泉式部、本名は弁内侍（生没年未詳）。康保三年（九六六）以後の生まれ。越前守大江雅致の娘で、和泉守橘道貞の妻となる。夫と死別後、冷泉天皇の皇子弾正宮為尊、その弟の帥宮敦道に愛され、この二親王との恋愛を記したのが「和泉式部日記」である。

中古三十六歌仙の一人で「和泉式部集」がある。勅撰歌は「拾遺集」などに二百三十八首。

▨出典　「後拾遺集」巻十三・恋の歌。「心地例ならず侍ける比人のもとにつかはしける――和泉式部」。

57

めぐり逢ひて　見しやそれとも分かぬ間に
雲隠れにし夜半の月かな

紫式部

【歌意】幼ないころの友だちに久しぶりでめぐり逢ったが、その人であるかどうかはっきりわからないうちに、雲に隠れた今夜の月のように、あなたはいそいで帰ってしまった。
人なつかしい、出会いのよろこびと、あわただしい別れの名残りを惜しむ歌である。

▨参考　「忘るなよほどは雲井になりぬとも空ゆく月のめぐり逢ふまで」（拾遺集・橘忠基）。

【作者】紫式部（天禄元年・九七〇から貞元三年・九七八ころに生まれ、長和五年・一〇一六ころ没）。藤原為時の娘。藤原宣孝の妻となる。

不朽の大河小説「源氏物語」は、夫と死別してから書きはじめたもの。はじめ藤式部とよばれていたが、宮中（紫の上）のことを描いたので、紫式部と称されるようになったといわれる。「紫式部日記」と「紫式部集」という家集があり、中古三十六歌仙の一人。勅撰歌は「後拾遺集」などに五十八首ある。

▨出典　「新古今集」巻十六・雑の歌。「はやくより童友だちに侍りける人のとしごろへてゆきあひたるほのかにて七月十日のころ月にきほひ（競い）てかへり侍りければ――紫式部」。

58 有馬山　猪名の笹原風吹けば
いでそよ人を忘れやはする

大弐三位

【歌意】有馬山の麓の猪名野の笹原に風が吹き渡ると、笹の葉がそよぐ、ええ、それよ、お忘れになっているのはあなたのほうで、わたしは忘れません。あなたとのことを忘れはしません。切迫した情景なのに、余韻のある恋歌である。

▨参考　「しなが鳥猪名野をくれば有馬山夕霧立ちぬ宿はなくして」（万葉集）。「ましてや秋の風吹けばまがきの萩のなかなかにそよと答へむ」（蜻蛉日記）。

【作者】大弐三位は藤原賢子（生没年未詳）。左衛門佐藤原宣孝の娘で、母は紫式部。正三位太宰大弐高階成章の妻となったので、夫の官名、位階によって大弐三位と呼ばれた。歌に文に秀で「狭衣物語」の著者と目されたこともある。「大弐三位集」という家集があり、「後拾遺集」など勅撰歌は三十七首。

▨出典　「後拾遺集」巻十二・恋の歌。「か（離）れがれなるをとこのおぼつかなくなどいひたりけるによめる――大弐三位」。

59 やすらはで　寝なましものを小夜更けて
傾くまでの月を見しかな

赤染衛門

【歌意】来てくださらないとわかっていたのなら、ためらわずに寝てしまったでしょうに、おいでくださるとのお約束を信じてお待ちするうちに、夜が更け、月が西山に沈むのをひとりわびしくながめました。

▨参考　「やすらはで寝なむものかは山の端にいさよふ月を花に待ちつつ」（秋篠月清集・藤原良経）。想う人を待って、女の純情をよんだ歌である。

【作者】赤染衛門は（生没年未詳）。時用の娘で、父の官名（右衛門尉）でよばれた。のち、文章博士大江匡衡の妻となった。和泉式部、清少納言、伊勢大輔などとも親しく、長和元年（一〇一二）に夫と死別し、尼となった。

和泉式部とならび称される平安中期の代表的女流歌人で「栄華物語」の作者といわれる。中古三十六歌仙の一人で、家集に「赤染衛門集」があり、勅撰歌は「拾遺集」などに九十三首はいっている。

▨出典　「後拾遺集」巻十二・恋の歌。「なかの関白少将に侍ける時はらからなる人に物いひわたり侍けりたのめてこざりけるつとめて女にかはりてよめる――赤染衛門」。

60　大江山　いく野の道の遠ければ　まだふみも見ず天の橋立

小式部内侍

【歌意】（母に使いを出したか、返事はきたか、とおっしゃいますが、母が行っている丹後の国へ行くには）大江山を越え、生野を踏み分けて行かねばならず、道が遠いので、わたしはまだ、母からの手紙も見てないし、その地よりさらに遠い名所、天の橋立へも行って見たことがありません。

母がいなくて歌が詠めるかとからかわれた少女の、純な抗議がこめられた歌である。

▨**参考**　「大江山こえて生野の末遠み道あるよにも逢ひにけるかな」（新古今集）。

【作者】小式部内侍（生年未詳）。橘道貞の娘で、母は和泉式部。母の式部にちなんで小式部と称された。万寿二年（一〇二五）に二十五、六歳の若さで病没。勅撰集にとられている歌は「後拾遺集」などに四首。

▨**出典**　「金葉集」巻九・雑の歌。「和泉式部保昌に具して丹後に侍ける比都に歌合侍りけるに小式部内侍歌詠みにとられて侍けるを中納言定頼つぼねのかたにまうできて歌いかがさせ給ふ丹後へ人はつかはしけむやつかひはまうでこずやいかに心もとなくおぼすらむなどたはぶれて立けるをひきとどめてよめる——小式部内侍」。

61

いにしへの　奈良の都の八重桜
けふ九重に匂ひぬるかな

伊勢大輔

【歌意】むかしの都（平城京）、奈良の八重桜が、今日はここ平安京に美しく咲き匂っている。古都の桜によせて、帝を讃美した歌である。

▨参考　「八重匂ふ奈良の都に年ふりて知らぬ山路の花もたづねず」（続後撰集）。「九重に匂ふを見れば桜がり重ねてきたる春かとぞ思ふ」（伊勢大輔集・中宮＝上東門院彰子）。

【作者】伊勢大輔（生没年未詳）。大中臣能宣の孫で、伊勢の祭主輔親の娘である。父が伊勢の祭主で、神祇官の大輔、のち伯であったので伊勢大輔と呼ばれた。歌人が輩出した家に育ち、上東門院彰子に仕え、紫式部、和泉式部、相模らと親交、長久二年（一〇四一）ころ歌人として名が知られた。のち、筑前守高階成順の妻となった。

中古三十六歌仙の一人で「伊勢大輔集」があり、「後拾遺集」などに五十一首はいっている。

▨出典　「詞花集」巻一・春の歌。「一条院御時ならの八重桜を人の奉りけるをそのをり御前に侍ければそのはなを題にて歌詠めとおほせごとありければ――伊勢大輔」。

62

夜をこめて　鳥の空音ははかるとも
世に逢坂の関はゆるさじ

清少納言

【歌意】まだ夜の明けないうちに、従者に鶏の鳴き声をまねさせて函谷関の番人をだまして関所を越えたという斉（中国）の孟嘗君の故事（「史記」）にならうおつもりでしょうが、あなたとわたしとの逢坂の関の番人であるわたしはだまされませんよ。

恋する才女のよろこび、いたずらっぽさが、かいまみえるような歌である。

▨参考　「関の戸を鳥の空音にはかれどもあり明け月は猶ぞさしける」（拾遺愚草）。

【作者】清少納言（生没年未詳）。清原元輔の娘。一条天皇の皇后定子に仕え、和漢の学に歌にみがきをかけた。橘則光と結婚したが失敗。晩年は尼になったともいわれる。

随筆「枕草子」の著者で、紫式部とならび称される才女である。中古三十六歌仙の一人で、「清少納言集」がある。「後拾遺集」などに勅撰歌十五首。

▨出典　「後拾遺集」巻十六・雑の歌。「大納言行成物語などし侍けるに内の御物忌にこもればとていそぎ帰りてつとめて鳥のこゑにもよほされてといひをこせて侍ければ夜深かりける鳥のこゑは函谷関のことにやといひつかはしたりけるを立ちかへりこれは逢坂の関に侍とあればよみ侍ける――清少納言」。

63

今はただ　思ひ絶えなむとばかりを
人づてならでいふ由もがな

左京大夫道雅

【歌意】いいたいのはやまやまなのですが、あなたに自由に逢うことができなくなった今は、ただ悲しい、でも思いきります、とだけは人を介さないで、あなたに逢って話す機会がないものかと思い悩んでいます。

あきらめねばならない、いちずな思いを絶つ男の悲歌である。

▨参考　「逢ふならぬ恋なぐさめのあらばこそつれなしとても思ひ絶えなめ」(千載集)。「陸奥の緒絶の橋や是ならむふみみふまずみ心惑はす」(道雅)。

【作者】左右大夫道雅は藤原氏(正暦四年・九九四〜天喜二年・一〇五四)。伊周の子で、蔵人頭、右京大夫を歴任、寛徳二年(一〇四五)に左京大夫となる。本歌は相思の仲であった三条天皇の第一皇女常子内親王との逢瀬が許されなくなったときの歌である。

勅撰集には七首はいっている。

▨出典　「後拾遺集」巻十三・恋の歌。「伊勢の斎宮わたりよりまかり上て侍ける人に忍びて通ひけることをおほやけもきこしめしてまもりなどつけさせ給て忍にもかよはず成にければ詠み侍ける——左京大夫道雅」。

64 朝ぼらけ　宇治の川霧（かはぎり）たえだえに
あらはれわたる瀬々（せぜ）の網代木（あじろぎ）

権中納言定頼（ごんちゅうなごんさだより）

【歌意】 ほのぼの夜が明けゆくにつれて、宇治川に立ちこめていた川霧がうすらぎ、そのとぎれとぎれの間から、川瀬に打ち込んだ杙（網代木）が見えはじめてきた。

生きた自然をさらりと描写した歌である。

▨**参考**　「春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるるよし雲の空」（宇治十帖・藤原定家）。「霧晴るる浜名の橋のたえだえにあらはれわたる松のしきなみ」（拾遺愚草）。

【作者】 権中納言定頼は藤原氏（長徳元年・九九五〜寛徳二年・一〇四五）。大納言公任（きんとう）の長男で、侍従（じじゅう）右近衛少将（うこんえのしょうしょう）を経て権中納言となった。

詩歌、書画にすぐれ、歌人としても知られた。代表作に「水もなくみえわたるかな大井河峰の紅葉は雨とふれども」が伝えられている。晩年は病気で官を辞し、出家した。中古三十六歌仙の一人で、「権中納言定頼卿集」がある。勅撰歌は「後拾遺集」などに四十六首はいっている。

▨**出典**　「千載集」巻六・冬の歌。「宇治まかりて侍けるときよめる——中納言定頼」。

65

恨みわび　干さぬ袖だにあるものを
恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ

相模

【歌意】 つれない人を恨みかなしみ、涙でぬれる袖が乾くひまさえない、その袖すらあるのに、この恋のために人からとやかく噂されるのは口惜しい。
人のつれなさを歎き、わが身のゆく末を心ぼそく思う、やるせなさがみちた歌である。

参考　「あやしくもあらわれぬべきたもとかなしのびねにのみぬらすと思へど」（相模）。「さまざまに思ふこころはあるものををしひたすらにぬるる袖かな」（二四代集）。

【作者】 相模（生没年未詳）。源頼光の娘（一説では養女）と伝えられる。母は能登守慶滋保章の娘。相模守大江公資の妻となったので、夫の官名で呼ばれるようになったが、のちに離別。中納言定頼、参議資通らとの愛が知られる女流歌人。
中古三十六歌仙の一人で「相模集」がある。勅撰歌は「後拾遺集」などに百八首はいっている。

出典　「後拾遺集」巻十四・恋の歌。「永承内裏歌合に――相模」。

66

諸ともに　哀と思へ山桜
花よりほかに知る人もなし
前大僧正行尊

【歌意】 深山にひっそりと咲く山桜よ、わたしはおまえとの出会いがとてもなつかしい。ここには知人も友もいない、心を語る相手はおまえしかない。わたしのこのさびしさをおまえもわかってくれ。山奥でひとり、孤独のさびしさを花に語る、心かよいくる歌である。

▨**参考**　「山桜咲きそめしより久方のくもゐに見ゆる滝のしら糸」（金葉集・源俊頼）。「いくとせの春にこころをつくしきぬあはれと思へみ吉野の花」（新古今集・藤原俊成）。

【作者】 前大僧正行尊（天喜三年・一〇五五～保延元年・一一三五）。参議源基平の三男。十歳で父と死別、十二歳で出家。十七歳で諸国の名山霊地巡礼、修行の旅にでた。三井寺の僧正、延暦寺の座主をつとめ、天治二年（一一二五）に大僧正となった名僧。「行尊大僧正集」があり、「金葉集」「新古今集」などに勅撰歌四十七首ある。

▨**出典**　「金葉集」巻九・雑の歌。「大峯にて思ひかけず桜のはなをみてよめる――僧正行尊」。

67

春の夜の　夢ばかりなる手枕に
かひなく立たむ名こそ惜しけれ

周防内侍

【歌意】短い春の夜の、夢ほどにはかなくつかの間のたわむれに、あなたの手枕をかりたならば、つまらない噂をたてられましょう。それが口惜しい。

恋が人生のすべてのような、自由で優雅な宮人たちの語らいが聞こえてくるような、美しい歌である。

▨参考　この歌に対する大納言藤原忠家の返歌「契りありて春の夜深き手枕をいかがかひなき夢になすべき」(千載集)。

【作者】周防内侍（生没年未詳）。本名は仲子。周防守平継仲（一説には平棟仲）の娘。後冷泉天皇（一〇二五～一〇六八）に仕えた。内侍の役だったので、父と自分の官名で呼ばれた。のちに出家している。

よく知られる歌に「住みわびてわれさへ軒のしのぶ草忍ぶかたがた多き宿かな」がある。中古三十六歌仙の一人で「周防内侍集」がある。「後拾遺集」など勅撰歌は三十五首。

▨出典　「千載集」巻十六・雑の歌。「二月ばかり月のあかきよ二条院にて――周防ないし」。

68 心にも　あらでうき世にながらへば
恋しかるべき夜半の月かな

三条院

【歌意】自分の心に反して、憂きことの多い、つらい、定めないこの世に生きていたいとは思わないが、もし、生きながらえていたならば、今夜のこの月がさぞかし恋しく思い出されることであろう。

在位五年、病（眼病）で皇位を譲る決意をされた天皇の悲痛な哀歌である。

▨**参考**　「秋にまたあはむあはじも知らぬ身は今宵ばかりの月をだに見む」（詞花集・三条院）。「あしびきの山のあなたに住む人はまたでや秋の月を見るらむ」（新古今集・同）。

【作者】三条院（貞元元年・九七六～寛仁元年・一〇一七）。第六十七代三条天皇。諱は居貞。冷泉天皇の第二皇子で三十六歳で即位。在位中から眼の病に悩み、内裏が二度も炎上するなどのほか、左大臣藤原道長の圧迫もあり、五年でわずか四歳の敦成親王（後一条天皇）に譲位の翌年出家、崩御。

勅撰集は八首はいっている。

▨**出典**　「後拾遺集」巻十五・雑の歌。「例ならずおはしまして位などさらむとおぼしめしける頃月のあかかりけるを御覧じて――三条院御製」。

69　嵐吹く　三室の山のもみぢ葉は
竜田の川の錦なりけり

能因法師

【歌意】山風が吹き散らす、三室山のもみじ葉は、散ったそこでそのまま朽ちはててしまうのではなく、流れ流れて、竜田川の川面を錦織のように美しく染めるもみじ葉なのである。たんたんとした叙景の歌である。

▨参考　「秋山のもみぢを茂み迷ひぬる妹を求めむ山道しらずも」「もみぢ葉の散りぬるなべに玉づさの使を見れば逢ひし日おもほゆ」（万葉集・柿本人麿）。「竜田川もみぢば流る神なびの三室の山に時雨ふるらし」（古今集）。

【作者】能因法師（生没年未詳。一説には永延二年・九八八〜永承五年・一〇五〇）。俗名は橘永愷。肥後守元愷の子（養子という説も）。文章生となり、肥後進士と呼ばれたが三十歳ごろに出家した。法名は融円で、住地の古曽部入道とも呼ばれ、のち能因と改めた。

漂泊の旅で歌を詠み、中古三十六歌仙の一人で「歌枕」などの著があり、「能因法師集」がある。「後拾遺集」などに勅撰歌六十七首入首。

▨出典　「後拾遺集」巻五・秋の歌。「永承四年内裏歌合によめる——能因法師」。

70　さびしさに　宿を立ち出て眺むれば
いづこも同じ秋の夕暮

良暹法師

【歌意】さびしくて、じっとしておれないので、わが家を出てつくづく四方を見渡してみたが、秋の夕暮はどこも同じ、なんとさびしい光景であろうか。

山里の秋の寂寥がそくそくと伝わってくる歌である。

▨**参考**　「さびしさはその色としもなかりけりまきたつ山の秋の夕暮」（二四代集・寂蓮法師）。「心なき身にも哀れは知られけれ鴫立つ沢の秋の夕暮」（西行法師）。「見渡せば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」（定家）。「此道や行く人なしに秋の暮」（松尾芭蕉）。

【作者】良暹法師（生没年未詳）。父が道済、母が藤原実方の女童白菊で、叡山祇園の別当と伝えられるが不明。山城国（京都）大原に住み、素意法師との歌の応答が「後拾遺集」にある。

能因法師時代の歌人として知られた。「金葉集」「詞花集」「新古今集」などにはいっている勅撰歌は三十三首。

▨**出典**　「後拾遺集」巻四・秋の歌。「題しらず――良暹法師」。

71

夕されば　門田の稲葉おとづれて
芦のまろ屋に秋風ぞ吹く

大納言経信

【歌意】夕暮になると家の前の田の稲の葉をならして秋風がわたり、この芦ぶきの家にもさわやかに吹いてくる。

秋のそよ風がかもす、里のさびしい夕暮を詠んだ心地よい歌である。

▨参考　「夕されば野辺の秋風身にしみてうづら鳴くなり深草の里」（二四代集・藤原俊成）。

【作者】大納言経信は源姓（長和五年・一〇一六〜承徳元年・一〇九七）。道方の六男で、参議、権中納言などを経て寛治五年（一〇九一）に七十六歳で大納言となり、のち太宰権師として太宰府に赴任し、当地で没した。琵琶と蹴鞠の名手として知られる。

詩歌管絃に秀でた三船の才人といわれ、藤原公任とならべ称されている。「難後拾遺集」を著わし、「後拾遺集」を撰した藤原通俊を批判した。中古三十六歌仙の一人で、家集に「大納言経信集」があり、勅撰歌は八十七首ある。

▨出典　「金葉集」巻三・秋の歌。「師賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて田家秋風と云へることをよめる
——大納言経信」。

72　音にきく　高師(たかし)の浜のあだ浪(なみ)は
かけじや袖(そで)の濡(ぬ)れもこそすれ

祐子内親王家紀伊(ゆうしないしんのうけのきい)

【歌意】名高い高師の浜の、むなしく打ち寄せる波ではないが、うわさにきく浮気なあなたには、何といわれても、思いをかけないつもりよ。契りを結んだあと、涙で袖を濡らすようなつらい思いをするのはわたしですから。

浮気男の求愛をしりぞけた「艶書合(えんじょあわせ)」での遊びの歌であるが、余情あふれる歌である。

▨参考　この歌は、中納言俊忠(としただ)の歌「人知れぬ思ひありその浦風に浪の寄るこそいはまほしけれ」への返歌である。このとき俊忠二十九歳、紀伊七十歳と伝えられる。

【作者】祐子内親王家紀伊（生没年未詳）。武部大輔平経方(たいらのつねかた)の娘で、兄の重経が紀伊守（きのかみ）であったので、紀伊（き）と呼ばれた。第六十九代後朱雀天皇(ごすざくてんのう)の第一皇女(おうじょ)祐子内親王に仕え、一宮紀伊とも呼ばれた。

「祐子内親王家紀伊集」があり、勅撰歌は「後拾遺集」などに二十九首ある。

▨出典　「金葉集」巻八・恋の歌。「堀河院御時艶書合によめる　中納言俊忠に対するかへし――一宮紀伊」。

73

高砂の　尾上の桜咲きにけり
外山の霞立たずもあらなむ

権中納言匡房

【歌意】あの高い山の中腹に桜が美しく咲いている。里にちかいこちらの山から霞が立つと桜の花が見えなくなるから、どうぞ霞が立たないように。

美わしいもろもろに心をよせる、宮人の優雅な宴がしのばれる歌である。

▨参考　「山桜わが見にくれば春がすみ峯にも尾にもたちかくしつつ」（古今集）。

【作者】権中納言匡房は大江氏（長久二年・一〇四一〜天永二年・一一一一）。大学頭成衡の子。四歳のとき書を学び、八歳のときに史記など漢書を読み、十一歳で詩をつくったと伝えられるように才知すぐれ、十六歳で文章得業生、二十七歳で東宮学士に選ばれた。寛治八年（一〇九四）に権中納言となった。兵学にも通じ、八幡太郎源義家が兵法を学んだと伝えられる。

「狐媚記」「遊女記」「本朝神仙伝」「続本朝往生伝」など多くの著書がある。家集に「江師集」があり、「後拾遺集」などに勅撰歌百十四首はいっている。

▨出典　「後拾遺集」巻一・春の歌。「内のおおいまうち君（内大臣藤原師通）の家にて人々酒たうべて歌よみ侍りけるに遙に山桜を望といふ心をよめる——大江匡房朝臣」。

74　憂かりける　人を初瀬の山おろし
はげしかれとは祈らぬものを

源俊頼朝臣

【歌意】わたしにつれなかったあの人が、わたしにやさしくしてくれるようにと、長谷寺の観音さまにお祈りしたのに、あの人はかえってわたしにつらくあたるようになった。初瀬の山から吹きおろす風よ、おまえのようにはげしくとは祈らなかったのに。

恋のみのりを神仏に祈ったが、これだけはどうにもならないという嘆きがこめられた歌である。

▨**参考**　「いまはみな思ひつくばの山おろしよしげき嘆きと吹きも伝へよ」（拾遺愚草）。

【作者】源俊頼朝臣（天喜三年・一〇五五～大治四年・一一二九）。71の作者経信の三男。左近衛少将を経て木工権頭となる。

歌壇に新風を起こした当代の代表的歌人で、仏教の香りがする歌が多い。白河法皇の命をうけて「金葉和歌集」を撰し、歌論書「俊頼髄脳」がある。家集に「散木奇歌集」があり、中古三十六歌仙の一人で「金葉集」などに二百一首ある。

▨**出典**　「千載集」巻十二・恋の歌。**「権中納言俊忠家に恋の十首歌詠み侍ける時祈れどもあはぬ恋と云へる心をよめる――源としよりの朝臣」。**

75

契りおきし　させもが露を命にて
あはれ今年の秋も去ぬめり

藤原基俊

【歌意】（光覚が講師の請を受けるという）お約束いただいたおことばをいのちと頼りきって、そのときのくるのを待っていたのですが、そのかいもなく、今年の秋もむなしく暮れようとしています。

子の出世を願う親の気持ちと期待かなわぬ心ぼそさが去りゆく秋の哀愁とともにただよう歌である。

▨参考　基俊に頼まれたときの前太政大臣忠通の作「猶頼めしめぢが原のさせも草吾が世の中にあらんかぎりは」（新古今集）。

【作者】藤原基俊（天喜二年・一〇五四〜康治元年・一一四二）。右大臣俊家の子であるが、世にいれられず、官位は従五位左衛門佐で終わった。八十四歳で出家。

旧風を代表する歌人で、俊成の師でもあり、詩文に秀でた。「新撰朗詠集」の撰者で、「藤原基俊集」があり、「金葉集」などに百七首はいっている。

▨出典　「千載集」巻十六・雑の歌。「僧都光覚維摩会の講師の請を申ける時たびたびもれにければ法性寺入道前太政大臣に恨み申けるをしめぢが原と侍ければまたその年ももれにければつかはしける――もとし」。

76 わたの原　漕ぎ出でて見れば久方の
雲居にまがふ沖津白浪

法性寺入道前関白太政大臣

【歌意】 海原に舟を漕ぎ出して見渡すと、はるかかなたは空と見まちがえるような白波が立っている。果てなくつづく空と海がひとつになった、壮大な光景を詠んだおおらかな歌である。

▨**参考**　「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ」（古今集）。見渡せば碧の空に浪かけてとまりも知らぬ舟出しにけり」（新拾遺集・公能）。

【作者】 法性寺入道前関白太政大臣は藤原忠通（承徳元年・一〇九七～長寛二年・一一六四）。関白忠実の長男。十一歳で元服、二十五歳で関白となり、太政大臣二度、関白三度、摂政を二度つとめた政治家で、詩歌、書にも秀で、情厚い人であった。父や弟の頼長との不和が保元の乱の一因となった。六十六歳で出家、法性寺にはいり円観といったが二年後に没。「法性寺関白日記」と「田多民治集」という家集と詩集「法性寺関白御集」がある。「金葉集」などに六十九首はいっている。

▨**出典**　「詞花集」巻十・雑の歌。「新院位におはしましし時海上遠望といふことをよませ給けるによめる――関白前太政大臣」。

77

瀬を早み　岩にせかるる滝川の
われても末に逢はむとぞ思ふ

崇徳院

【歌意】浅瀬の流れが早くて、川中の岩にせきとめられ、そこで両方にわかれて流れる水も、のちにまた合流するように、私たちもいまは人に妨げられて自由に逢うことはできないが、のちにはきっと一緒になることができるであろう。

恋に託して処世の心境を詠んだ歌である。

▨参考　改作前の歌は「ゆきなやみ岩にせかるる谷川のわれても末にあはむとぞ思ふ」である。保元の乱に敗れたときの歌に「思ひきや身を浮雲となし果ててあらしの風にまかすべしとは」がある。

【作者】崇徳院（元永二年・一一一九～長寛二年・一一六四）。第七十五代天皇。諱は顕仁。五歳で立太子、即位。二十二歳で譲位。新院と呼ばれた。のちに保元の乱を起こし、戦い敗れて讃岐（香川県）に流され、四十六歳で崩御。

「金葉集」「詞花集」を撰上させた。中古三十六歌仙の一人で、御集に「久安御百首」があり、「詞花集」などに七十七首はいっている。

▨出典　「詞花集」巻七・恋の歌。「題しらず――新院御製」。

78

淡路島　通ふ千鳥の鳴く声に
幾夜寝覚めぬ須磨の関守

源　兼　昌

【歌意】旅の寝覚めに、淡路島からかよいくる千鳥の鳴き声が、波音まじりにものがなしくきこえる。この声に、ここ須磨に配された関守は幾夜、さびしい思いをしたであろうか。

旅の哀感がしみじみただよう歌である。

▨参考　「旅人は袂すずしくなりにけり関吹きこゆる須磨の浦風」（在原行平）。旅寝する夢路は絶えぬ須磨の関通ふ千鳥のあかつきの声」（藤原定家）。「須磨の関有明の空に鳴く千鳥傾ぶく月やなれもかなしき」（藤原俊成）。「秋くれば佐保の川原の川霧に友まどわせる千鳥鳴くなり」（紀友則）。

【作者】源兼昌（生没年未詳）。美濃守俊輔の次男で、従五位下・皇后宮少進から大進にすすみ、のち出家した。

永久四年・一一一六の「堀河院次郎百首」や大治三年・一一二八の「住吉歌合」（兼昌入道）の作者である。勅撰歌は「金葉集」などに七首はいっている。

▨出典　「金葉集」巻四・冬の歌。「関路千鳥と云へることをよめる――源兼昌」。

79

秋風に　たなびく雲の絶間より
もれ出づる月の影のさやけき
左京大夫顕輔

【歌意】秋風が吹きくると、たなびいている雲がきれぎれになり、その雲のきれ間からもれる月の光は冴え、清く、美しい。
ほんのつかの間の光景をとらえた、さわやかな歌である。

▨参考　「うす雲のただよふ空の月影はさやけきよりもあはれなりけり」(風雅集・後鳥羽院)。「夕暮は待たれしものをいまはただ行くらん方を思ひこそやれ」(後拾遺集)。「かづらきや高まの山のさくら花雲井のよそに見てや過ぎなん」(千載集)。

【作者】左京大夫顕輔は藤原氏（寛治四年・一〇九〇〜久寿二年・一一五五）。顕季の三男で、従三位、左京大夫、皇太后宮亮に任ぜられたが、のち、世をいとい出家した。
父顕季からの歌道・歌学の六条家の祖とされる家説を継ぎ、仁平元年（一一五一）に崇徳院の院宣をうけ「詞花集」を撰した。家集「顕輔集」があり、「金葉集」などに八十四首はいっている。

▨出典　「新古今集」巻四・秋の歌。「崇徳院に百首歌たてまつりけるに——左京大夫顕輔」。

80 長からむ　心も知らず黒髪の
乱れて今朝はものをこそ思へ

待賢門院堀川

【歌意】末ながく愛してくれるお心かどうかもわからないままにひと夜をともにしましたが、あなたとお別れした今朝は、寝乱れ髪のように心が乱れ、先が案じられ、はかない思いをしております。
男をゆるしたあとの、恋する女心の歌である。

▨参考　「朝な朝なけづればつもる落ち髪の乱れてものを思ふころかな」（拾遺集・紀貫之）。「人はいざ心もしらずふるさとは花ぞむかしの香に匂ひける」（古今集・同）。

【作者】待賢門院堀川（生没年未詳）。神祇伯顕仲の娘で、はじめは前斉院令子内親王に仕え、前斉院六条といい、のち鳥羽天皇の皇后待賢門院璋子に仕え、康治二年（一一四三）に待賢門院出家にしたがって尼となった。堀川と呼ばれたのは、祖父の兄が堀川左大臣といわれていたからとされる。
西行と親交があり、中古三十六歌仙の一人で「待賢門院堀川集」がある。「金葉集」などに六十五首はいっている。

▨出典　「千載集」巻十三・恋の歌。「百首歌奉りける時恋の心を詠める――待賢門院堀川」。

81

郭公(ほととぎす)　なきつる方(かた)をながむれば
ただ有明(ありあけ)の月ぞのこれる

後徳大寺左大臣(ごとくだいじのさだいじん)

【歌意】 ほととぎすが鳴いたので空を仰ぎ、声のしたほうをながめたが、鳥の姿も何も見えない。空には明け方の白い月が残っていた。

悲しく哀れをさそうほととぎすの鳴き声と、暁の空に残る月。悲哀みちくる歌である。

▨**参考**　「夏の夜のふすかとすればほととぎす鳴くひと声に明くるしののめ」（古今集・紀貫之）。「有明の月だにあれやほととぎすただひと声のゆくかたも見む」（後拾遺集・関白頼通）。「ほととぎす鳴くひと声のしののめに月の行方もあかぬ空かな」（藤原定家）。

【作者】 後徳大寺左大臣は藤原実定(ふじわらのさねさだ)（保延(ほうえん)五年・一一三九～建久(けんきゅう)二年・一一九一）。公能(きんよし)の子で定家とは従兄弟。内大臣、右大臣を経て左大臣となり、五十三歳で出家した。

詩歌管絃にすぐれた。中古三十六歌仙の一人で、日記「庭槐集」、家集「林下集」がある。「千載集」などに七十三首はいっている。

▨**出典**　「千載集」巻三・夏の歌。「暁聞(二)郭公(一)といへる心をよみ侍ける――右大臣」。

82　思ひ侘び　さても命はあるものを
憂きに堪へぬは涙なりけり

道因法師

【歌意】 つれない人を恋い慕い、わびしく、いっそ死んでしまいたいと思うが、それでも生きてだけはいるのに、涙はつらさにこらえきれずに、とめどなくこぼれ落ちる。

恋ひとすじの、歎きの哀歌である。

▨参考　「ながらへばまたこの頃やしのばれむ憂しと見し世ぞいまは恋しき」（藤原清輔）。「恋い死なむ身は惜しからず逢ふことにかへむほどまでと思ふばかりぞ」（道因法師）。「思ひわび命たえずはいかにしてけふとたのむる暮を待たまし」（新勅撰集）。

【作者】 道因法師は俗名藤原敦頼（生没年未詳。一説に寛治四年・一〇九〇～治承三年・一一七九頃とある）。対馬守敦輔の子で、崇徳天皇に仕え、従五位上右馬助をつとめ、のち出家した。

嘉応二年（一一七〇）の「住吉社歌合」、承安二年（一一七二）「広田社歌合」などに出席している。

撰集「現存集」と家集「楞散集」があり、「万葉集」に訓点をつけるなど学才にもすぐれ、勅撰歌は「千載集」などに四十一首ある。

▨出典　「千載集」巻十三・恋の歌。「題しらず――道因法師」。

83

世の中よ　道こそなけれ思ひ入る
山の奥にも鹿ぞ鳴くなる

皇太后宮大夫俊成

【歌意】 ああ、ままならぬこの世の中よ、この世をのがれる道はどこにもない。思い定めて深山に分け入ってきたが、こんな山奥にもつらいことがあるのだろう、もの悲しい鹿の鳴き声がきこえる。人生をまともにみつめた、生きとし生けるものの、いのちのあわれが身にしみる歌である。

▨参考　「世の憂きは人の心の憂きぞかしひとりをすまむ都なりとも」（藤原良経）。

【作者】 皇太后大夫俊成は藤原俊成（永久二年・一一一四〜元久元年・一二〇四）。権中納言俊忠の三男で、はじめ顕広といった。承安二年（一一七二）皇太后（後白河院の皇后）大夫となり、六十二歳で出家した。法名は釈阿。

御子左家の家学を継ぎ、西行と親交があり、「千載集」を撰した。伝統を重んじながら新風をとりいれた当代の代表的歌人で中古三十六歌仙の一人。歌学書「古来風体抄」「正治奏状」があり、家集「長秋詠藻」がある。「詞花集」などに四百十四首はいっている。

▨出典　「千載集」巻十七・雑の歌。「述懐百首の歌詠み侍ける時鹿の歌とてよめる——皇太后宮大夫俊成」。

84

ながらへば　またこの頃やしのばれむ
憂しと見し世ぞ今は恋しき

藤原清輔朝臣

【歌意】 幾歳生きながらえていたなら、また、いやなきのうきょうもなつかしく思うことがあるのであろう。あの、つらいと思ってすごした時代が、いまではかえって恋しく思われるから。

心晴れぬ日々、ありし日をしのび、わが心を慰める歌である。

▨**参考**　「散る花は後の春とも待たれけりまたも来まじきわが盛りかも」「更けにけるわが世の秋ぞ哀れなるかたぶく月はまたも出でけり」(以上二首、清輔)。

【作者】 藤原清輔朝臣(長治元年・一一〇四～治承元年・一一七七)。顕輔の次男で、はじめ隆長といった。正四位下太皇太后宮大進であった。

俊成とならび称される歌人で、二条院の崩御で勅撰集にならなかったが「続詞花集」を撰した。「袋草紙」、「奥儀抄」「和歌雑談抄」「和歌初学抄」などの著書があり、家集に「清輔朝臣集」がある。勅撰歌は「千載集」などに八十九首はいっている。

▨**出典**「新古今集」巻十八・雑の歌。「題不知――清輔朝臣」。

85　夜もすがら　物思ふ頃は明けやらで
閨のひまさへつれなかりけり

俊恵法師

【歌意】 待つあの人が来てくれないので、寝ようと思っても寝られず、夜通し思い悩んでいる。その苦しさに、早く夜が明けてくれたらと思うが、なかなか夜が明けず、光がはいってこない寝室のすき間さえつれなく感じられる。

ひとり寝のせつない女心を詠んだ歌である。

▨参考　「冬の夜に幾度ばかり寝覚めして物思ふ宿のいま白むらむ」（拾遺集・増基法師）。「思ひ寝の夢だにみえで明けぬれば逢はでも鳥の音こそつらけれ」（千載集・寂蓮法師）。

【作者】 俊恵法師。通称は大夫公（永久元年・一一一三生まれ）。源俊頼の子で東大寺の僧。歌人として知られ、自宅を「歌林苑」と呼び、歌会をひらいた。俊成、清輔、実定などと親交があり、鴨長明の歌の師である。中古三十六歌仙の一人で、著書に「歌苑抄」「歌撰合」などがあり、家集に「林葉和歌集」がある。勅撰歌は「詞花集」などに八十四首ある。

▨出典　「千載集」巻十二・恋の歌。「恋の歌とてよめる――俊恵法師」。

86　歎けとて　月やはものを思はする
かこち顔なるわが涙かな

西行法師

【歌意】 月は人に歎き悲しめと照っているのではない。わが心にもの思いがあるから悲しくなるのだ。それなのに、月を見ていると、月が歎けといったからというように、もの悲しく、涙がこぼれる。恋するものの哀愁がそこはかとただよう歌である。

▨参考 「おもかげに君が姿をみつるよりにはかに月のくもりぬるかな」(山家集)。「願はくは花の下にてわれ死なむそのきさらぎの望月の頃」(以上二首とも西行)。

【作者】 西行法師(元永元年・一一一八〜建久元年・一一九〇)。俗名は佐藤義清。康清の子で、鳥羽上皇に仕えて北面の武士となり従五位下、左兵衛尉となった。一族の憲康の突然の頓死などで明日をも知れぬ命を思い、遁世を念じていた彼は保延六年(一一四〇)十月十五日、自分にまつわりつく四歳の娘を突然蹴倒して家を出た。この夜から嵯峨で僧となった。法名は円位。西行と号した。

中古三十六歌仙の一人で、家集に「山家集」「聞書集」などがあり、勅撰歌は「千載集」などに二百五十二首ある。

▨出典 「千載集」巻十五・恋の歌。「月前恋と云へる心を詠める――円位法師」。

87

村雨の　露もまだ干ぬ槙の葉に
霧立ちのぼる秋の夕暮

寂蓮法師

【歌意】村雨がはらはらと降りすぎていったが、その雨にぬれた槙（杉、桧、槙などの常緑樹）の葉の露が乾かないうちに、あたりいちめんにほの白い霧がたちこめる、さびしい秋の夕暮れである。
わびしい秋の夕暮を写実的にとらえた歌である。

▨参考　西行法師の「心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮」、藤原定家の「見渡せば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」とならび、「新古今集」三夕の歌として知られる寂蓮法師の歌に、「さびしさはその色としもなかりけり槙立つ山の秋の夕暮」がある。

【作者】寂蓮法師（生年未詳。一説には保延五年・一一三九～建仁二年・一二〇二）。俗名は藤原定長。俊成の弟俊海阿闍梨の子。俊成の養子となり、従五位上・中務少輔になったが、のちに定家などが生まれたため、承安二年（一一七二）ごろ俊成の家を自ら出て僧となって寂蓮と称した。三十六歌仙の一人で、家集に「寂蓮法師集」があり、「千載集」などに百十七首はいっている。

▨出典　「新古今集」巻五・秋の歌。「五十首歌たてまつりし時――寂蓮法師」。

88

難波江の　芦のかり寝の一夜ゆゑ
身をづくしてや恋ひわたるべき

皇嘉門院別当

【歌意】 難波（大阪）の入江に生い茂る、芦の刈り根（刈りとったあとの根）の一節ほどの短い旅の宿での逢瀬でしたが、思わずこのひと夜の仮寝のために、澪標ではないですが、生涯、恋い慕いながらすごさなければならないのでしょうか。

ひと夜の契りに恋いわびる女の悲歌である。

▨**参考**　「なにはなる身をつくしてのかひもなしみじかき芦のひとよばかりは」（拾遺愚草）。「命こそ己がものから憂かりけれあればぞ人をつらしともみる」（別当）。

【作者】 皇嘉門院別当（生没年未詳）。太皇太后亮源俊隆の娘と伝えられ、崇徳天皇の皇后、皇嘉門院に仕えた。安元元年（一一七五）や治承三年（一一七九）の九条兼実の家の「右大臣家歌合」に加わっていたこと、のちに尼となったことが知られる。

勅撰歌は「千載集」などに九首ある。

▨**出典**　「千載集」巻十三・恋の歌。「摂政（兼実のこと）右大臣の時家の歌合に旅宿逢レ恋」と云へる心を詠める——皇嘉門院別当」。

89

玉の緒よ　絶えなば絶えね長らへば
忍ぶることの弱りもぞする

式子内親王

【歌意】わたしの命よ、絶えるなら絶えてしまうほうがよい。このまま生き長らえていると、恋しさをつつみこらえるちからが弱まって世間に知れ、うわさをたてられて悲しい思いをしますから。

燃えるいのちと、かよわい女のかなしみがにじむ歌である。

▨**参考**　「恋ふることと益ればいまは玉の緒の絶えて乱れて死ぬべく思ほゆ（万葉集）。「生きてよもあすまで人もつらからじこの夕暮を訪はば訪へかし（新古今集）。

【作者】式子内親王（生年未詳。没年は建仁元年・一二〇一）。後白河天皇の第二皇女。平治元年（一一五九）に賀茂神社の斎院となり、准三宮の位をうけたが、嘉応元年（一一六九）に病気のため任を辞した。

新古今集時代の女流歌人の第一人者で、俊成、定家と親交があった。中古三十六歌仙の一人で「式子内親王集」があり、勅撰歌は「千載集」などに百四十六首ある。

▨**出典**　「新古今集」巻十一・恋の歌。「百首歌の中に忍恋――式子内親王」。

90 見せばやな　雄島の蜑の袖だにも
濡れにぞ濡れし色はかはらず

殷富門院大輔

【歌意】 涙で色のかわったこのわたしの袖を、あの人に見せたいものです。海でくらしている奥州の雄島（宮城県にある島名）の漁夫の袖でさえ、いつも濡れながら、袖の色はかわらないというのに。つれない男にみせたいという、恋の恨みをうたった女性らしい歌である。

▨参考　「松島やをじまが磯はあさりせし海士の袖こそかくはぬれしか」（後拾遺集）。「白玉に見へし涙も年経ればから紅に移ろひにけり」（紀貫之）。「たびごろもうちこぎいづるつりぶねにものこひしくやきみとながるる」（殷富門院大輔集）。

【作者】 殷富門院大輔（生没年未詳。天承元年・一一三一～正治二年・一二〇〇頃の人）。従五位藤原信成の娘。後白河天皇の第一皇女で、順徳天皇の養女となり、文治三年（一一八七）六月に、門院の号をたてまつられた殷富門院に仕えていた官女（大輔という）である。
勅撰集にとられた歌は「千載集」「新勅撰集」などに六十五首ある。家集「殷富門院大輔集」。

▨出典　「千載集」巻十四・恋の歌。「歌合し侍りける時恋の歌とて詠める――殷富門院大輔」。

91

きりぎりす　鳴くや霜夜のさ莚に
衣片敷き一人かも寝む

後京極摂政前太政大臣

【歌意】 こおろぎがさびしげに鳴いている。そとは霜がおりているのであろう。寒い夜、むしろの上でわたしは自分の衣の片方を敷いてひとりで寝る。じつにわびしいことだ。恋人と一緒ならこんなことはあるまいに。

▨参考 「さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」(古今集)。「さむしろに衣かたしき今宵もや恋しき人にあはでのみ寝む」(伊勢物語)。

【作者】 後京極摂政前太政大臣は藤原良経(嘉応元年・一一六九〜建永元年・一二〇六)。摂政九条兼実の子。法性寺忠通の孫。建久元年(一一八九)権大納言、同六年内大臣、正治元年(一一九九)左大臣を経て建仁二年(一二〇二)十二月に摂政となる。元久元年(一二〇四)正月従一位、同年十二月太政大臣となったが、建永元年三月、兇賊の槍に刺殺された。三十八歳。

俊成に歌を学び、「新古今集」の撰に加わり、仮名序を書き、「み吉野は山もかすみて白雪のふりにし里に春は来にけり」という巻頭の作者となる。家集「秋篠月清集」。勅撰歌は三百十三首。

▨出典 「新古今集」巻五・秋の歌。「百首の歌奉りし時――摂政太政大臣」。

92

我袖は　潮干に見えぬ沖の石の
人こそ知らね乾く間もなし

二条院讃岐

【作者】あのお方を想い、しのび泣くわたしの袖は、潮がひいたときにも見えない沖の石のように、人は気づかないでしょうが、乾くひまがないのです。
片想いに涙する女心がにじみでる恋の歌である。

参考　「ともすれば涙に沈む枕かな潮みつ磯の石ならなくに」。

【作者】二条院讃岐（生没年未詳。永治元年・一一四一〜建保五年・一二一七頃の人）。源三位頼政の娘。二条天皇に仕えた女官で讃岐といった。二条天皇は、後白河天皇の第一皇子で、保元三年（一一五八）十六歳で即位、永万元年（一一六五）七月に三十三歳で崩御した。天皇崩御後、藤原重頼と結婚、後鳥羽院の中宮宜秋門院に仕え、のち出家した。
藤原定家が高く評価した女流歌人で、「千載集」のころにはすでに高名であった。家集に「二条院讃岐集」がある。勅撰歌は「千載集」などに六十九首。

出典　「千載集」巻十二・恋の歌。「寄レ石恋と云へる心を――二条院讃岐」。

93　世の中は　常にもがもな渚漕ぐ

海士の小舟の綱手悲しも

鎌倉右大臣

【歌意】世の中はつねにかわらないでいてほしいもの。波打ちぎわをこぐ漁夫の、小さい舟の引き綱を引くさまがおもしろく、心ひかれる。

無常観がふかいところから湧きだしている詠嘆と、永遠の生命をねがう、味わいぶかかい歌である。

▨参考　「綱手引くちかのしほがまくかへしかなしき世をぞうらみはてつる」(定家)。

【作者】鎌倉右大臣は源実朝(建久三年・一一九二〜承久元年・一二一九)。源頼朝の二男。兄頼家が伊豆の修禅寺に蟄居したあとをうけ十二歳で従五位上、征夷大将軍となる。建保六年(一二一八)十二月に右大臣左大将になったが、翌承久元年一月二十七日夜、鶴岡八幡宮に拝賀の帰り、甥の公暁に暗殺された。二十八歳。

歌は定家に師事し、家集に「金槐集」がある。勅撰歌としては「新勅撰集」などに八十一首がはいっている。

▨出典　「新勅撰集」巻八・羇旅の歌。「題知らず——鎌倉右大臣」。

94 み吉野の　山の秋風小夜ふけて
故郷寒く衣うつなり

参議雅経

【歌意】吉野の山の秋風が、夜ふけてもやまず、そのさびしい風のなかに、古跡の多い吉野の里は寒々として、砧の音（布地をやわらげ、つやをだすため布をうつ）がしみじみときこえてくる。

吉野には奈良の飛鳥時代よりも古くから、応神、雄略天皇の離宮があることから、吉野を故郷と詠んでいる。叙情、詩情ゆたかな歌である。

▨参考　「み吉野の山の白雪つもるらし古里寒くなりまさるなり」（古今集）。

【作者】参議雅経（嘉応二年・一一七〇〜承久三年・一二二一）。藤原氏。刑部卿頼輔の孫で、刑部卿頼経の二男。越前介、加賀介などを経て左近衛少将となり、「新古今集」の撰者となる。承久二年（一二二〇）に従五位、同年十二月に参議となり、五十二歳で没。

定家の父俊成に師事して歌を学び、飛鳥井家と称し、家集「明日香井集」がある。勅撰集には百三十二首の歌がはいっている。

▨出典　「新古今集」巻五・秋の歌。「擣衣（砧のこと）のこゝろを——藤原雅経」。

95

おほけなく　浮世の民におほふかな
わがたつ杣に墨染の袖

前大僧上慈円

【歌意】徳をつまない者が、身分不相応にもこの杣（伝教大師が建立した比叡山）に住んでいるからには、この墨染の袖で世の人々をおおいかけて、多くの人たちが無事安全であるように祈ろう。

僧侶としての衆生済度の大任を歌った慈悲の歌である。

▨参考　「いまもなほわが立つ杣の朝霞世におほふべき袖かとぞみる」（新千載集）。

【作者】前大僧正慈円（久寿二年・一一五五～嘉禄元年・一二二五）。関白太政大臣藤原忠通の子。九条実兼の弟。永万元年（一一六五）十一歳で延暦寺の座主覚快法親王に師事し、十三歳で出家。はじめ道快といい、養和三年（一一八一）十一月に慈円と改める。政治にも参与し、別称は吉水和尚。七十一歳で入滅した。

著書「愚管抄」、家集「拾玉集」がある。若いころ西行法師に歌を学んだため歌風は西行にちかく、多作で新歌風を開拓した。「新古今集」時代の代表的歌人。勅撰集にとられた歌は「新古今集」の九十一首をはじめ、二百五十首。

▨出典　「千載集」巻十七・雑の歌。「題知らず――法印慈円」。

96　花さそふ　嵐の庭の雪ならで
　ふり行(ゆ)くものは我身(わがみ)なりけり

入道前太政大臣(にゅうどうさきのだじょうだいじん)

【歌意】つよい風に吹き散らされ、庭に雪が降ったように白くなった桜の花びら。ここに散りつもった花吹雪ばかりがふりゆくものではなく、年ごとに古(ふ)りゆくものは老いてゆくわが身なのである。風に散る花をみて、老いゆくわが身を歎いた述懐の歌である。

▨**参考**　「花さそふひらの山風吹きにけりこぎ行く舟の跡見ゆるまで」（新古今集）。

【作者】入道前太政大臣は藤原公経(きんつね)（承安元年・一一七一～寛元二年・一二四四）。内大臣実宗(さねむね)の二男。定家の妻の弟。源頼朝の妹婿一条能保(よしやす)の娘を妻とし、承久の乱（一二二一）には幕府方を支持、乱後は内大臣を経て貞応元年（一二二八）八月太政大臣と権勢を増し、西園寺を建立し、そのため西園寺殿と呼ばれた。

栄華をつくし、寛喜三年（一二三一）十二月、病気のため六十六歳で出家。七十四歳で没。

勅撰集にとられた歌は百十二首。

▨**出典**　「新勅撰集」巻十六・雑の歌。「落花を詠み侍(はべ)りける——入道前太政大臣」。

97

来ぬ人を　まつほの浦の夕凪に
焼くや藻塩の身もこがれつつ

権中納言定家

【歌意】待てども待てども来ない人を、松帆の浦（淡路国）の、夕暮の風のとまったときの藻塩を焼く火のように、やるせない想いに身をこがして、わたしは恋しい人を待つ、せつない日をおくっている。

恋歌の本意を詠んだ定家自讃の歌である。

▨参考　「朝なぎに玉藻苅りつつ暮なぎに藻塩焼きつつ」（万葉集）。

【作者】権中納言定家（応保二年・一一六二〜仁治二年・一二四一）。藤原氏。藤原俊成の子。安貞元年に正二位、貞永元年に権中納言となる。

歌学者、歌人として当代第一人者。「新古今集」の撰者に加わり「新勅撰集」を選ぶ。「古今集」「源氏物語」などの古典集勘の功績も大きい。著書には日記「明月記」、「近代秀歌」「二四代集」「毎月抄」「詠歌大概」「顕註密勘」「定家十体」などがある。家集に「拾遺愚草」。天福元年（一二三三）十二月に出家。小倉山の山荘に隠遁していた、宇都宮頼綱入道蓮生に依頼されて、選んだ百首を色紙に書いたが、これが「百人一首」として今日に伝わっているものである。

▨出典　「新勅撰集」巻十三・恋の歌。「建保六年内裏の歌合——権中納言定家」。

98　風そよぐ　ならの小川の夕ぐれは
御禊ぞ夏のしるしなりける

従二位家隆

【歌意】風がそよそよと吹いている夕暮の景色をみていると、楢の葉ゆれにも小川のせせらぎの音にも、しのびよる秋が感じられる。しかし、この小川でみそぎが行なわれているので、まだ夏だということがわかる。

香り高い叙事の歌である。これは寛喜元年（一二二九）、前関白藤原道家の娘竴子が後堀河天皇の中宮として入内したとき詠進された、三十六首のうちの一つである。

▨参考　「夏山の楢の葉そよぐ夕暮はことしも秋の心地こそすれ」（後拾遺集）。

【作者】従二位家隆（保元三年・一一五八～嘉禎三年・一二三七）。藤原氏。藤原光隆の四男。はじめ雅隆という。元久三年（一二〇六）宮内卿、嘉禎元年（一二三五）従二位。翌年病気のため出家。

俊成に歌を学ぶ。「千五番歌合」の作者。和歌所寄人となり、定家らと「新古今集」の撰者になる。生涯に六万首も詠んだといわれるが、伝わっているのは十分の一。勅撰集にとられた歌は「千載集」などに二百八十一首。

▨出典　「新勅撰集」巻三・夏の歌。「寛喜元年女御入内の屏風――正三位家隆」。

99

人もをし　人も恨めしあぢきなく
世を思ふゆゑにもの思ふ身は

後鳥羽院

【歌意】面白くもないこの世を憂え、ああしよう、こうもしようと思う自分には、いとしいと思う人もあれば、また悪いと思う人もいるものである。

　これは建暦二年（一二一二）春、後鳥羽院三十三歳のときの作といわれ、鎌倉幕府の世を憂えた、悲憤の歌とされている。

▨**参考**　「いかにせん三十あまりの初霜をうち払うほどになりにけるかな」（後鳥羽院）。

【作者】御鳥羽院（治承四年・一一八〇～延応元年・一二三九）。高倉天皇の第四皇子。諱は尊成。寿永二年（一一八三）四歳で即位。第八十二代天皇。建久九年（一一九八）十九歳で譲位院政（二十四年間）。承久三年（一二二一）北条氏討伐をはかり（承久の乱）、敗れて出家。隠岐島へ移る。在島十九年。延応元年同地で崩御。六十歳。

　和歌にすぐれ、建仁元年（一二〇一）に和歌所を定め、「新古今集」を親撰した。勅撰集にとられている御製は二百四十八首。

▨**出典**　「続後撰集」巻十七・雑の歌。題知らず——後鳥羽院」。

100

百敷や古き軒端のしのぶにも
なほあまりある昔なりけり

順徳院

【歌意】大宮のいまはだれも住んでいない古く荒れはてた軒端には、忍ぶ草が生えている。それを見るにつけても、忍ぶ草という名を聞くにつけても、昔のよい時代のことがしのばれ、しのんでもなおしのびきれない昔である。

懐古の情が痛切にこめられた歌である。

▨参考　「かくばかりもの思ふ秋の幾年になほ残りけるわが涙かな」(順徳院)。

【作者】順徳院(建久八年・一一九七〜仁治二年・一二四一)。後鳥羽院の第三皇子。承元四年(一二一〇)十二月に十四歳で即位。第八十四代天皇。諱は守成。父後鳥羽上皇とともに、鎌倉幕府討伐をはかった承久の乱に敗れ、承久三年(一二二一)二十五歳で譲位。佐渡が島へ移り、在島二十二年。仁治三年(一二四二)四十六歳で崩御。

文武にすぐれ、父や定家らに歌の道を学び、「八雲御抄」「禁秘抄」の著がある。勅撰集にとられている御製は百五十四首。

▨出典　「続後撰集」巻十八・雑の歌。「題知らず――順徳院御製」。

2 百人一首考

・九百種こえる百人一首

百人一首とは、百人の歌人の和歌を一首ずつ選び、百首まとめた歌集である。なかでも、百人一首として知られているのは「小倉百人一首」である。本書も百人一首の一つである小倉百人一首である。

百人一首には、足利義尚(よしひさ)が撰んだと伝えられる「新百人一首」や「後撰和歌集」から二条良基(よしもと)が撰んだとされる「後撰百人一首」をはじめ、「武家百人一首」「女房百人一首」「源氏百人一首」「道歌百人一首」「畸人百人一首」「花街百人一首」「現存百人一首」などがあり、明治時代には「古今百人一首」「明治百人一首」「教訓百人一首」などがあり、太平洋戦争中の昭和十七年には、日本文学報国会撰「愛国百人一首」が刊行され、戦後は「平和百人一首」が出るなどがある。

また、「続武家百人一首」「新葉百人一首」といった、百人一首という名がつかない〝百人一首〟つまり「蔵笥百首」「万葉山常百首」「心学道歌古今百首」「古今和歌集一首撰」「近代百首」「当世通歌仙」、明治にはいってからの「名教百首」「明治英名百首」「明倫百首歌」「近世名婦百人撰」などが、研究者によって明らかにされている。

そして類書をふくめると、その数は九百種をこすとさえいわれている。

このように多くの〝百人一首〟があるなかで、百人一首という場合は「小倉百人一首」をさすわけで、それがいかにすぐれた撰集であるか、いかに日本人に親しまれてきたものであるか、改めて、小倉百人一首の魅力がよみがえり、惹かれるのである。

・小倉百人一首の原形

百人一首の名がはじめて文献に見えるのは、室町時代の末期で、一条兼良の著と伝えられる「榻鴫暁筆」に出ている〝今の世に百人一首と申し侍るなり〟という、藤原定家の嵯峨山荘の色紙のことを記した文字が最初とされている。

小倉百人一首は百人一首ともいわれているが、はじめは「小椋山庄色紙和歌」、「小倉山庄色紙形和歌」、「嵯峨山庄色紙形」などといわれ、「小倉百人一首」ともよばれたことが文献に見える。

小倉とか嵯峨というのは地名で、この「小倉百人一首」の撰者（異説がある）と伝えられる藤原定家の山荘があった、いまの京都市右京区嵯峨の小倉山のことである。

百人一首の原形は、定家の日記「明月記」の文暦二年（一二三五―この年十月に嘉禎と改元）五月二十七日の記事などから、古来の人の歌を、定家が書いて、嫡男・為家の妻の父・宇都宮頼綱におくり、頼綱が嵯峨中院別荘の障子（ふすま）に貼った色紙である。

この小倉色紙ともよばれる色紙和歌は、一面に歌一首を四行書きにしたもので、作者名はない。「小倉山山庄色紙形和歌」という題名は、色紙を書き写して冊子にしたときにつけられたものとされ、現在のような「小倉百人一首」という名称が定着するのは、のちのことである。

・小倉百人一首の成立と成書

百人一首の原形である小倉色紙の和歌は、「古今和歌集」から「新古今和歌集」にいたる八代集の中

から、定家が撰した「二四代集」（一七九一首収録）から撰している。このときの元本として成ったと推定されるのが、百一人百一首の「百人秀歌」である。

この「百人秀歌」と現在の「百人一首」と比較すると、配列順はちがっても、九十七首が一致する。こうして抄出した和歌を定家が書き、頼綱におくられたと考えられるが、この小倉色紙を「百人一首」という冊子にしたのは定家の子、為家である、という説が定着しつつある。定家が撰した和歌百首を為家がほぼ年代順に配列し、色紙にはなかった作者名と官位を記し、巻頭・巻末にそれぞれ天智・持統両天皇、後鳥羽・順徳両院父子の歌を揚げた、という説である。

もっとも、この説には異論があり、現在の百人一首の成立についても、文中元年（一三七二）前後とする説があるが、明らかではない。

・小倉百人一首の内容

小倉百人一首は、奈良、平安、鎌倉の三期、約五百七十年にわたる時代の、天智天皇から順徳院にいたる百人の歌である。

百首はすべて勅撰集から撰ばれた歌で、「古今和歌集」から二十四首、「後撰和歌集」から七首、「拾遺和歌集」から十一首、「後拾遺和歌集」から十四首、「金葉和歌集」から五首、「詞花和歌集」から五首、「千載和歌集」から十四首、「新古今集和歌集」から十四首、「新勅撰和歌集」から四首、「続後撰和歌集」から二首となっている。

歌の部立（分類）は、春の歌六首、夏の歌四首、秋の歌十六首、冬の歌六首、恋の歌四十三首、雑の歌二十首、羇旅の歌四首、離別の歌一首で、恋の歌が多い。ついで秋の歌が多いなど、心の歌を求めて撰したといわれる定家の和歌によせる気持ちがしのばれる。

・百人一首の出典（カッコ内は百人一首通し番号）

・古今和歌集……二十四首（5・7・8・9・11・12・14・15・16・17・18・21・22・23・24・28・29・30・31・32・33・34・35・36）
・後撰和歌集……七首（1・10・13・20・25・37・39）
・拾遺和歌集……十一首（3・26・38・40・41・43・44・45・47・53・55）
・後拾遺和歌集…十四首（42・50・51・52・56・58・59・62・63・65・68・69・70・73）
・金葉和歌集……五首（60・66・71・72・78）
・詞花和歌集……五首（48・49・61・76・77）
・千載和歌集……十四首（64・67・74・75・80・81・82・83・85・86・88・90・92・95）
・新古今和歌集…十四首（2・4・6・19・27・46・54・57・79・84・87・89・91・94）
・新勅撰和歌集……四首（93・96・97・98）
・続後撰和歌集……二首（99・100）

●百人一首の部立（分類）

別立／出典	春の歌	夏の歌	秋の歌	冬の歌	恋の歌	雑の歌	羇旅の歌	離別の歌	計
古今	4	1	6	2	4	3	3	1	24
後撰			2		4	1			7
拾遺			1		8	2			11
後拾遺	1		2		9	2			14
金葉			1	1	1	2			5
詞花	1				3	1			5
千載		1		1	8	4			14
新古今		1	4	2	5	2			14
新勅撰		1			1	1	1		4
続後撰						2			2
計	6	4	16	6	43	20	4	1	合計 100

3 かるた遊びのいろいろと早取り法

かるた遊びの由来

小倉百人一首が「かるた遊び」に用いられるようになったのは、ポルトガル人やスペイン人が日本にやってきた戦国時代（西暦一五〇〇年代）の後半と推定される。

日本にはじめて上陸した西洋人である、ポルトガル人が種子島(たねがしま)に漂着したのが、天文十二年（一五四三）で、このとき、鉄砲・火薬が伝えられたのであるが、それらとともに、彼らはトランプのようなカードを持参、楽しんだであろうことが想像される。

それは、カルタという言葉がポルトガル語で、スペイン語ではカルトということからも、彼らのカード遊びをみた日本人が、当時、およそ三百年ほど前から伝えられ、知られた小倉百人一首をカードに書き、歌合わせのような遊びをはじめたと考えられる。

フランシスコ＝ザビエルが鹿児島にきて、日本にはじめてキリスト教が伝来したのが天文十八年（一五四九）で、この四年後に川中島の戦いがはじまり、十三年後には大村純忠(すみただ)が洗礼をうけ、日本ではじめてのキリシタン大名が生まれた、室町時代の末期で、このころかるたの類が移入されたと思われる。当初は宮中や大名の遊戯であった。

それが武家に、やがて徳川末期に一般にひろまったもので、小倉百人一首のかるた遊びが、国民的な遊戯として普及したのは明治にはいってからである。

風雅を好む日本人と小倉かるた

百人一首のなかで、小倉百人一首が最も古く、最もすぐれ、最もひろく知られているように、百人一首を応用したかるたの最初は〃小倉かるた〃であり、いちばん普及し、かるた遊びの意味で百人一首という場合は、小倉かるたをさすのが普通である。

小倉百人一首という和歌集が、これほどながく、ひろく、多くの人びとに知られ、親しまれてきたのは、情緒ゆたかで風雅を好む日本の国民性とともに、小倉百人一首がかるた遊びに応用されたからであるといえる。

就学率が低く、読み書きが不自由な人たちの多かった、明治、大正時代の、日頃、文字に親しむことのない人たちでも百人一首、つまり小倉かるたは知っており、家族で、親族・知人集まって、かるた取りに興じ、正月に雅をそえたのである。

このよき風情が、戦後も遠くなりにけり、といわれ、世の中に古きよき時代をなつかしむ風潮が息吹きはじめた昭和三十年代後半から、復活した。

昭和四十七年の年末には、小倉百人一首のかるたが、前年より二、三割増刷したにもかかわらず、三大メーカー（大石天狗堂、田村将軍堂、任天堂）とも売り切れたという。百人一首ブームに突入したのであった。

日本の伝統精神へのめざめ

当時の新聞報道によると、全国の小倉百人一首のかるた競技人口は約十八万人を超え、自宅で〝百人一首〟を楽しもうという人は四百万世帯、一千万人を超える、という盛況で、今後も年毎に、百人一首愛好者がふえるであろうと予測されている。

そのブームの背景としては、テレビで「新平家物語」などの時代物が放映される影響や、高校の国語で、古文が必修になったことなどがあげられている。

しかし、源流は、限界がみえてきた物質文明の、そのなかでの、公害や環境汚染、安心して食べられない食品、遠のく自然などなど、不安定なくらしのなかで、自分の依(よ)って立つ場を見直そう、原点に還ろう、という人間恢復の願望にあるといえよう。

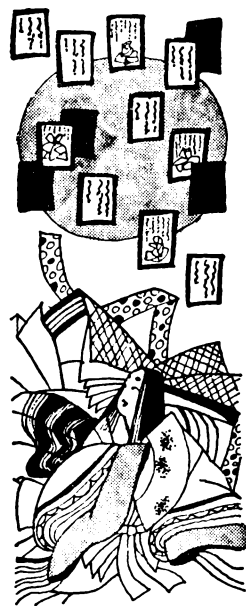
これは、単なる歴史ブーム、復古ブームといった一時的なものではなく、日本人がながい戦争、そして戦後の、ただただ前進あるのみ、ものを確保するだけの、欲求オンリー時代に別れを告げ、古来、日本人が大事に育(は)ぐくんできた、情緒の再発見であり、忘れかけた日本の伝統精神へのめざめであり、風雅なくらしの希求であるといえよう。

日本人としてまことによろこばしい開眼である。

かるた遊び・いまむかし

小倉百人一首のかるたは、一首全歌詞（五七五七七）が書いてある「上の句札」（読札）と、下の句（七七）だけ書いてある「下の句札」（取札）と各百枚ずつある。

かるた遊びは、読人（よみびと）が読札を持ち、取札を並べ、読人が作者の名前から読みはじめて、全歌詞を読むうちに、一座の人たちが並べた取札のなかからさがして取るのである。

いまは作者の名前を読まないのが普通であるが、むかしはいまのような早取り競技ではなかった。与えられ、並べた札のなかに出札（該当札）があれば、それを裏返しに伏せ、伏せおわった順に勝ちとなるしくみであった。

もっとも、出札があった場合には、右隣りに坐った人にそのかわりの一枚を送る、あるいは月、雪、花の文字がはいった札が出た場合には二枚送る、などの〝送り勘定〟なども行なわれたようであるが、いわゆる「早取り競争」ではない優雅な遊びであったと想像される。

・散らし

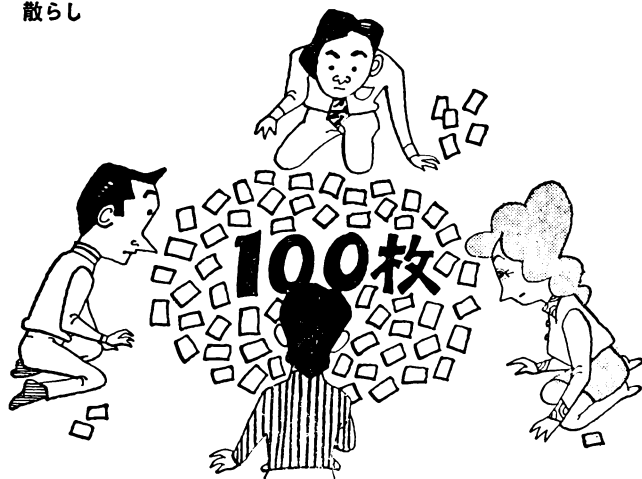
いまでも行なわれる「散らし」の遊びが普及したのは徳川中期ころからとされる。この遊びは百枚の取札全部を場に円形にまき散らし、そのまわりに一同が輪になって坐り、読みにしたがって取り合う。この遊びは札を多く取った人が勝ちで、いまよく行なわれる『源平合戦』の原形といえる。

・源平合戦

源平合戦というのは、参加者が二組に別れ、取札百枚を二分し、それぞれ五十枚ずつをまいて相対し、読みにしたがって合計百枚の札を取り合う遊びである。

男子が白軍、女子が紅軍と組んでもよく、男女を交えて、ジャンケンで組をつくってもよく、この遊びは〃共同責任〃というところに面白味があり、明治時代の遊びはこれが主であった。

散らし

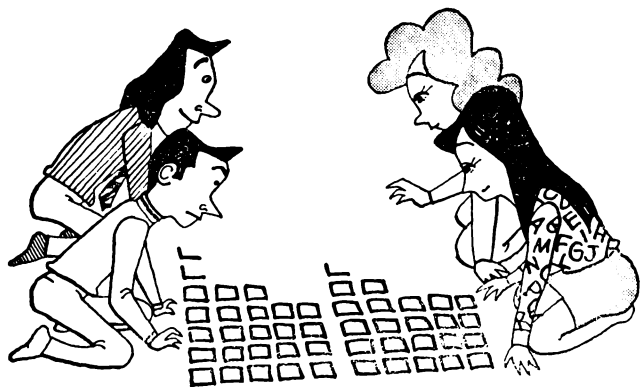
100枚

勝敗は、どちらか一方の組の場の札がなくなったときにきまる。つまり、早くなくなったほうの組が勝ちというわけである。

この遊びにはいろいろな約束ごとがある。

まず、相手方の札を取った場合は、こちらの組の札を相手方にそのたびに一枚ずつ送る。同じように、相手方にこちらの組の札を取られた場合は、相手方からそのたびに一枚ずつ送られる。これを「送り札」という。

つぎは、読まれた札がこちらの組の場にないのに、まちがってこちらの組の札に手をつけた場合、または読まれた札が相手方の場にないのに、相手方の場の札に手をつけた場合は「お手付」といって、相手方から札一枚を送られる。

ただし、まちがって札に手をふれた場合でも、読まれた札が同一の陣営（場）内にあった場合にはお手付とはならず、札のやりとりはない。

源平合戦

●かるた神経衰弱

これは、トランプゲームの「神経衰弱」を、百人一首でやろうというもの。やり方は、トランプのものとまったく同じで、取札と読札の計二百枚を裏返しにし、何回となくめくっていき（一人が1回にめくるのは二回だけ）、取札と読札が同じものならそれを取ることができる。

記憶力のよさ（どこに何の札があったか）が物をいうゲームで、トランプの場合は、同じ組が二つあるが、百人一首では、札の数が多い上、同じ組は一つしかないから、かなりむずかしい。だがそれだけに面白いゲームといえよう。

人数は、札の数が多いから七〜八人くらいが適当で、取ったペアの札は、一組で一として数え、たくさん取った人が勝ちとなる。

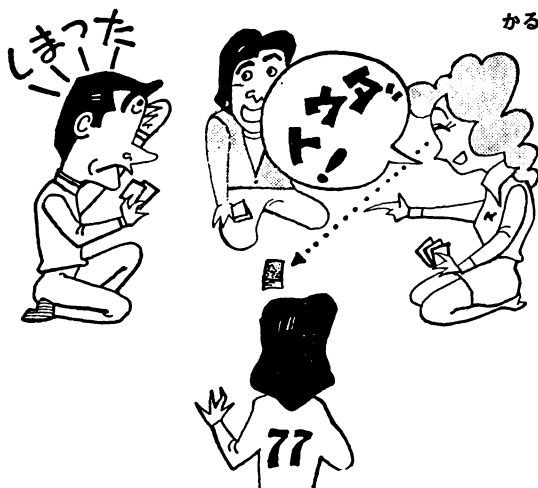
競技かるたをやるための、記憶力の訓練にもなるゲームである。

かるた神経衰弱

・かるたダウト

絵札のなかから春の歌六首、夏の歌四首、秋の歌十六首、冬の歌六首の三十二枚を取り出し、人数に等分に分ける。だれか一人を最初の親にして、場の中央に、「春の歌！」とか、「秋の歌！」とかいいながら、一枚出してもらう。となりの人（あらかじめ、右まわりか左まわりかをきめておく）がつづいて札を一枚出すわけだが、最初にいった人と同じ季節の歌でなければならない。もしなければ、しらばくれて、手持ちの札から一枚出す。このとき、つぎの人が札を出す前に、だれかが「季節が違う……」と思ったら「ダウト！」といい、季節の違う札を出した人は、場の札を全部もらわなければならない。

そうしたら、今度はダウトをかけた人が親になって札を出していき、早く札をなくした人が勝ち。親は、はっきりと「○の歌」といい、もしそれがまちがいだったら、場の札を全部もらう義務がある。

かるたダウト

・ペアペアかるた

絵札のなかから女性札を二十枚、男性札を六十枚出し、よくきってから、参加者に五枚ずつ配る。残った札は場の中央に裏向きにしておく（1の山、2の山に分けたほうがよい）。

さて、参加者は、まず1枚の札を手持ちのなかから取り出し、場の積札から一枚持ってくる。そして自分の手持ちの札と、持ってきた札が、男性札と女性札のペアになっていれば、一組完成でその札を自分の横に置いておく。もし、女性札と女性札、あるいは男性札と男性札ならば、どちらか一枚だけを自分の手持ち札に加え、もう一枚は場に、捨て札として処理する。

このようにして、なるべく多くのペアを作った人が勝ちとなるゲームである。女性札二十枚に、男性札六十枚だから、手持ちの札に女性札がたくさんあれば勝利も早い気がするが……さて！

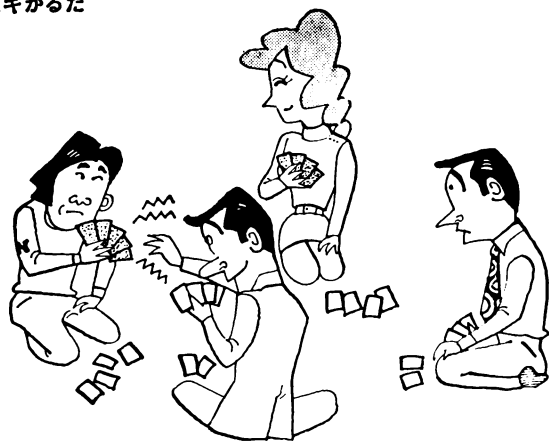
ペアペアかるた

・ババヌキかるた

絵札のなかから、地位や職業が同じ札を、おのおの四枚ずつ（四枚以下のものははぶく）選び出す。たとえば、天皇なら天智天皇、持統天皇、三条院、光孝天皇。大臣なら、河原左大臣、三条右大臣、鎌倉右大臣、入道前太政大臣。官女なら小野小町、伊勢、右近、紫式部。法師なら喜撰法師、素性法師、西行、寂蓮法師など。

これらの札に、もう一枚、なんでもよいから加えて、参加者に配り、地位や職業の同じ人物同士をペアにして、場に捨てる。

残った札を、トランプのババヌキのようにして、となりの人から取っていき、ペアになる札があったら場に捨ててゆく。これをくり返し、早く手持ちの札をなくした人が勝ちとなるゲーム。もちろん、最後まで、はんぱの札を持っていた人が負けになるのだが、それが何の札であるかわからないのがミソ。

ババヌキかるた

・五番ならべ

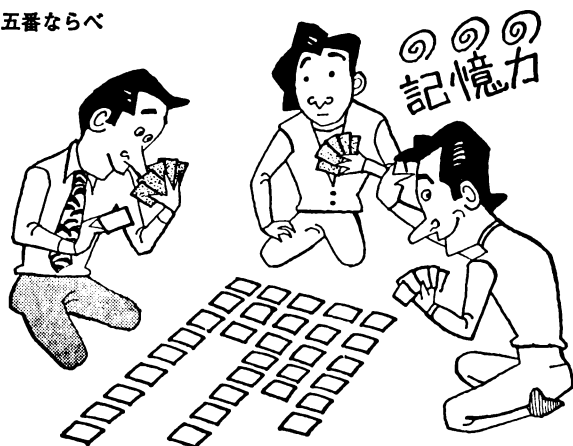
詠人順にしたがって暗記する方法をとる人には、たいへん役に立つゲームがこれ。いわゆるトランプの「七ならべ」を百人一首に応用したもの。

百人一首の通し番号の「五番目」の札（絵札）を配られた札のなかから場に出し、「七ならべ」と同じ要領で並べてゆくゲームである。

「五番目」の札とは、五番の猿丸太夫、十五番の光孝天皇、二十五番の三条右大臣、三十五番の紀貫之と、四十五番の謙徳公である。五十五番以上の五の札は、枚数が多くなってゲームがつまらなくなるので、最初に、一番〜五十番までの五十枚、二回戦に五十一番〜百番というぐあいにゲームを行なう。

ならべ方は、十枚を横に五段というようにする。

このゲームは、参加者に、同じぐらいの詠人順の記憶力がないと行なえないが、この方面から百人一首を研究する人には、ためになるゲームである。

五番ならべ

・さかさまかるた

百人一首は、全歌詞が書いてある「上の句札」が読札で、下の句だけ書いてある「下の句札」が取札だが、これを逆にならべて早取りを競うのがこのゲーム。

美しい色刷りの札がズラッと場にならび、ふつうのゲームとはまた違った趣きをかもし出してくれるのも、このゲームのよいところだ。

また、下の句札は、仮名文字ばかりだが、上の句札は漢字がまじるため、視覚からくる錯覚なども加わって、思わぬ「お手付」などもあるだろう。

方法はすべて「競技かるた」と同じなので、135ページ以下を参照のこと。

これは、「下の句を聞いて上の句を知る」ための訓練となり、百人一首に強くなるお遊びゲームといえる。

さかさまかるた

・坊主めくり

お座敷かるたで、いちばん簡単な競技である。幼い子どもも老人も参加して楽しめる遊びで、むかしから広く普及している。

遊び方は、絵札全部をよくきって3～4等分し、場の中央に裏向きに積み、参加者はそれぞれ順に、自分の好む積札の上から順に一枚ずつめくり出す。めくり出した札が、一般の男性の札であれば取りおく。ぼうず（僧侶・法師＝遍昭、行尊、慈円、喜撰、素性、恵慶、能因、良暹、道因、俊恵、西行、寂蓮）の札をめくり出したときは、取りおいた札を全部、場の積札のなかにかえす。

おひめさん（女性の札＝二十一枚）札が出た場合は、場にある札を全部取り、さらに、つぎの番の人から十枚（十枚なければあるだけ全部）をもらう。

天皇（女帝はおひめさん札とする）の札が出た場合は、参加者全員の札と場の札全部を取得すること

坊主めくり

ができる。
　こうして、場の積札がなくなったときが競技終了で、そのときの各自の手持ちの札のいちばん多い人が勝ちで、手持ち札の数によって順位をきめる遊びである。

● 競技かるた（個人戦）

　散らしは一座のみんなを相手にして札を取り合う遊びで、源平合戦はその場で組んだ人たちと共同して札を取り合う、それぞれの面白味があるが、さらに興味ぶかいのが「個人対抗戦」あるいは単に「個人戦」とよばれる「競技かるた」である。
　競技かるたは、二人がむかい合って坐り、相対者と二人だけで勝負する競技で、かるた名人戦もこの競技規定で行なわれる。
　この競技かるたの特色は、札の組数、つまり取札一組があれば、読人ひとりで何十組もいっしょに勝負できることである。

競技かるた（個人戦）

競技かるたの主要規定

全日本かるた協会競技規定、東京かるた会競技規定、かるた名人戦競技規定を参照した競技かるたの主要規定はつぎのとおりである。
（★印は公式戦以外の例）

・競技と持札

競技は二人相対して行なう。持札は各二十五枚とし、早く持札がなくなった者を勝者とする。
★公式戦以外であれば、持札は場合によっては二十五枚以上でも競技できるが、興味は半減する。しかし、相手が初心者であったり、年齢その他、実力に差がある場合は、一方の持札を二十枚あるいは十五枚にして競技するなどの〝ハンデ戦〟がよく行なわれる。

・札の配列と暗記時間

札の配列は膝の前方三段以下に並べ、縦二十五センチ、横八十センチ以内とし、対者の上段札との間隔は三センチとする。札の暗記時間は、札の配列をはじめた時から十五分とする。
★札は自分のほうに向けて取りやすいように、つまり暗記が楽なように並べる。規定の範囲は早取り研究の成果であり、公式戦外でも縦に三段、横はたたみ半畳以内に並べると楽しい競技ができる。自分の持札二十五枚（あるいはハンデのある場合はその数）を並べおわったら、暗記し、相手方の札をよく見、覚える。公式戦では暗記時間が十五分ときめられているが、お座敷かるたではあまりながい時間暗記し合っていると、かえって競技の興味が減ってしまうことがあり、なるべく早く並

べ、場の札を見覚えることである。とくに多勢での競技では、他人の迷惑にならないよう心したいものである。

・手

手は配列した持札の三段目（いちばん後方）札より後方（自分のほう）に置くこと。

★競技中にあれこれと札を真上から指さしたり、平手で相手から自分の持札が見えないようにするなど、ふざけた行為をする人もいるようであるが、いくら親しい間柄でも、競技を楽しむにはこの規定は守りたいものである。

・取り方

読まれた札（出札という）に早く手を触れた者がその札を取ったものとする。ただし、両手を用いてはならない。

・取り手

札を取る手は、原則として人さし指および中指の二本とする。ただし、取る時間の相違した場合はこの限りではない。出札に触れた手が同時の場合はセームとして、その札の所有者が取ったものとする。

（東京かるた会競技規定）

★とっさのことで、出札を両手でおさえたり、からだごと持札をかばったり、げんこつでおさえたり、ことさらに出札を飛ばしたり、人によって取り方はさまざまであるが、この小倉百人一首かるたは、勝負とはいえ、優雅な競技であり、それらしく出札に触れることが競技をいっそう楽しく、取る人のゆかしさも香るというものである。

・札の紛失

札が紛失したままま、その札が読まれたときは、その札の所有者の責任として、出札は取られたこととし、相手から札を一枚送られるものとする。（東京かるた会競技規定）

・送り札

競技者は、相手の出札を相手より早く取ったときは、その都度自分の持札一枚を相手に送ることができる。（一度送った札は他の札と代えてはならない）

★送り札は、自分が自由に選んだ札を相手に送るわけで、自分の札を取られた場合は相手から送られる。配列のときに暗記したように、この送り札をよく覚えておく必要がある。

・お手付

出札が自分の持札のなかにないとき、誤って自分の持札に手を触れるか、あるいは相手の持札のなかに出札がないとき、誤って相手の持札に手を触れたときは「お手付」とする。「お手付」をした者は、その都度、相手から札一枚を受ける義務がある。

・両お手付

相手が「お手付」をしている札に、自分も手を触れ、あるいはその「お手付」をしている手に自分の手を重ね、もしくはつよく触れたときは「両お手付」として、札の移動はない。

出札が双方の陣（場）にないのに、同一人が双方へ「お手付」したときは、札二枚を相手から受ける義務がある。

★競技かるたは、持札が二十五枚ずつの五十枚しか場にないわけで、読まれた札全部がその場にある

わけではない。自分のほうにも相手方の場にもない札がある。そのために、読まれた札が双方の場にない場合のお手付が非常に多い。

・**返り手**(かえりて)

上段の札を取る際、同時に出札と反対側の札に手を触れたときは「お手付」とする。返り手による場合もまた同じくお手付とする。

・**持札の位置変更**

競技者が持札の位置を変更したときは、その都度相手に知らせなければならない。

・**読　唱**(どくしょう)

読唱は全歌として、いかなる理由があっても、読みかえしてはならない。

競技者は札の整理以外、読みを待たしてはならない。

競技者は、読まれた札、きまり字などについて何人とも問答してはならない。

・**取札の無効**

読まれないうちに手を出すなど、相手方に妨害と認められる行為をなした場合は、その都度その取札を無効とし、相手がこれを取ったものとみなす。

・**審　判**

競技者は、審判員の裁断に対して服従の義務を負うものとする。

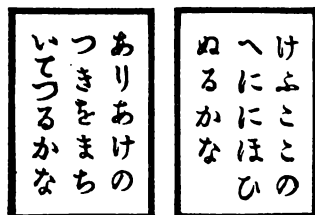
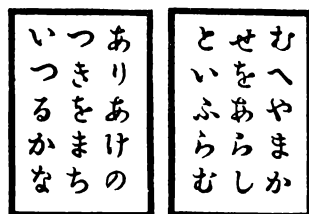
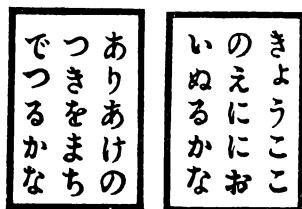
★親しい人たちの競技でも、審判の人がいると張りのある競技が楽しめよう。

百人一首かるたの知識

小倉百人一首のかるたは、いまはほとんど紙製であるが、朴の木でつくったかるたや、合成樹脂製のかるたもある。大きさも、初心者向きの小型版がある。

しかし、デパートのおもちゃ売り場や書籍売り場での売れ行きは、最低（昭和四十七年末調べ）四〜五百円前後のかるたと、三千円もする最高級品がよく、千円から二千円の中級品が、前記二種よりも売れ行きがにぶかったようである。

いずれも紙質が厚く、彩色のあざやかなものに人気が集まり、種類は四百円から三千円の七種ほどが店頭にある。

これらのかるたは、読札と取札を一組にしたもので、ほとんどは読札に詠人名と全歌が、取札にはひらがなで三行に印刷されている。読札に詠人の肖像がはいった、古風なしかし彩色あざやかのものもある。

むかしの小倉百人一首のかるた札は、それぞれの書体で、書き方も独特なものであったが、現代人には、だれでも読める活字印刷のかるたがよろこばれている。

競技会用のかるたとしては、特別な活字を用い、一定の方式によって作成されたつぎの札が使用されている。

・**公定かるた札**（歴史かなづかい）　全日本かるた協会発行。

・**歌かるた札**（歴史かなづかい）　日本かるた院（京都）認定。

・**新制かるた札**（新かなづかい）　東京かるた会発案。

公定かるた札

けふここの
へににほひ
ぬるかな

ありあけの
つきをまち
いてつるかな

歌かるた札

むへやまか
せをあらし
といふらむ

ありあけの
つきをまち
いつるかな

新制かるた札

きようここ
のえににお
いぬるかな

ありあけの
つきをまち
でつるかな

競技かるたの由来

小倉百人一首のかるた競技は優雅な娯楽である。もっとも、このかるた競技を「かるた道」として取り組んでいる人もおり、段位があり、名人戦があり、各種の大会がひらかれ、技を競い合っている。その競技人口は約十八万人といわれ、年毎にふえつつある。女性の有段者も多い。

正月に自宅で百人一首を楽しもうという人は、およそ四百万世帯一千万人を超える。お座敷かるた、つまり、遊びにしても、それをより楽しくということで、それぞれ早取りの工夫がなされている。

小倉百人一首のかるた競技は、読人が上の句札（読札）で全歌詞を読むうちに、一座の人たちが下の句札（取札）をさがして取るわけで、早取りのポイントは歌を知っていることである。

お座敷遊びであった小倉百人一首のかるたを競技として、のちの盛況をもたらしたのは黒岩涙香（くろいわるいか）という人の努力に負うところが大きい。小説家であり、「萬朝報」新聞社の社長であった黒岩涙香氏は、ながい伝統をもつ小倉百人一首のかるたを科学的に分析研究し、早取り法をあみだし、従来の遊び方法を変え、一対一で対戦する競技方法を打ち出した。

その新しい競技方法による初の全国かるた大会が開かれたのは、日露戦争中の明治三十七年二月であった。これが全国各都市に波及、地元新聞社などの後援で、各地でかるた大会がひらかれるようになった。中心は東京かるた会で、毎年選手権大会が開かれ、現在にいたっている。

公定かるたの源流

黒岩涙香氏は、はじめ漢字交りの変体平仮名で、お家流の草書体であった取札を、漢字交り平仮名の楷書体に改め、寸法を定め、裏打の色も茶色と定めた「標準かるた」を考案し、新聞社から発売、好評を博した。それまでは自作自書のものが多く、木版摺り、石版刷りにすすんだが、基準がなかったからである。

「標準かるた」は画期的なものであったが、実際に競技に使用してみると、札の中の漢字の位置や字画によって、見やすい札と見にくい札とがあることなどが指摘された。そこでこんどは漢字を一切省いた総平仮名の楷書体のかるたを作成したのであった。これが現在の「公定かるた」である。いまのかるたは平仮名、青の裏打と定まっているが、その源流はこの「公定かるた」である。

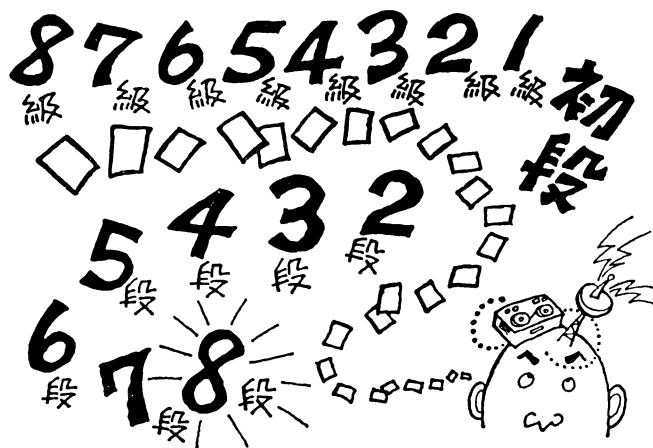
このように小倉百人一首のかるたが競技かるたとして普及してから、ながい歳月を経て、全国各地にかるた会が生まれ、育ち、戦中、戦後の一時期をのぞいて、連綿とさまざまな競技会が開かれてきたのである。

なかでもひろく知られているのは、全国各地のかるた会の総合団体である「全日本かるた協会」主催の、毎年東京と大阪で開催される全国選手権大会、毎日新聞社およびスポーツ日本社後援の名人戦で、女性日本一クイーン戦などもくわえ、年毎に盛況さを増している。

精神統一の修養

全日本かるた協会傘下の団体は約百三十で、会員数は約五万名。有段者は五千名を越えるという盛況で、段位級位制度も競技者の励みになっている。

競技かるたについて、指導者が強調することは、優雅で、子どもでも老人でも、字が読める人ならだれでもが楽しめる。お金もかからない。若人には情操教育にも役立つ、ということである。

理論的には、歌を暗記するなど、記憶力が増進し、配列の工夫、作戦など、思考力が発達し、なによりも注意力の集中などによって、精神統一の修養になる、ということである。短時間に、一枚ごとにはりつめた興奮を味わう、しかも、見るスポーツではなく、自らが行なう競技での残念であり、爽快さであるところに、かるた競技の格別の味わいがある。

早く取るには歌を知ること

競技に参加する以上、負けるよりは勝ったほうが気分爽快である。かるた競技をより楽しいものにするためには、早取り法を研究することである。

歌を暗記し、配列した札を覚えていれば、初心者でも読人が上の句を読みすすむうちに出札の見当のつくのが二、三枚あるはずである。それが修練を積むと読みだしたとたんに出札がわかるようになる。それには、歌を知り、さらに〃きまり字〃や同音の歌などを知っていなければならない。つまり「あきのたの……」の〃あ〃ではじまる歌が何首あるか、〃か〃音ではじまる歌は何首で、それがどういう歌であるか、ということを記憶することである。

それから、その歌にしかでてこない〃きまり字〃があるので、それを知っていれば有利である。つまり「あきのたの……」の場合は〃の〃がきまり字で、「あきかぜに……」という、「あき」までは同じ歌が二首あるが、つぎの「の」と「か」がちがうわけで、読人が「あきの……」と読んだときは、「あきのたの　かりほのいほのとまをあらみ　わがころもではつゆにぬれつつ」であることがわかる。また「あきか……」と読んだときは、「あきかぜに　たなびくくものたえまより　もれいづるつきのかげのさやけさ」であることがわかる。このように、上の句を音別に記憶することは競技をいっそう楽しくし、暗記もしやすいことが、多くの研究、実践者によって明らかにされている。

能率的な音別暗記

・上の句をみて下の句を知る

小倉百人一首の全歌を知るためには、上の句を見て下の句を知ることからはじめる。
その手がかりとして最適なのが「音別表」である。つまり上の句の最初の音によって同じ音の歌を並べた「百人一首音別・きまり字一覧」である。まず、この音別の歌をくりかえし読み、暗記する。
すると「あ」ではじまる歌が十七首あることがわかる。そのうちの一首「あふことの……」は「おうことの……」と読むので、「あ」音ではじまる歌は十六首となる。
さらに「あ」音の歌には「あきかぜに……」と「あきのたの……」という〝あき〟の歌が二首、同じように「あさぼらけ……」という歌が二首ある、といったことがわかる。
こういうことに気をくばりながら、百人一首をひととおり〝ひらがな〟で読み、暗記する。といっても、いちどに百首を暗記することは容易でない。そこで、はじめは「あ」の部、つぎに「い」の部といった方法をとる。それができたならば、いよいよ競技のための実践段階にはいる。
上の句を見て下の句が何であるか、それをできるだけ早く知る訓練である。そのために「百人一首下句音別一覧」を研究することも必要である。

・下の句を見て上の句を知る

これは、競技の「場」に配列されるのは下の句の札であり、上の句を見て下の句がわかったあとは、この「場」にある下の句札を見て上の句をわかることが、早取りのポイントであるからで、札を配列するときに、その下の句札で読まれる上の句を思い出し、そのときにそなえるのである。
そのうえに、きまり字とその変化を知れば早く取れ、競技はいっそう楽しくなる。

・記憶に役立つ歌意、作者の認識

暗記の具体的な方法は、音別に、順に、一首がよくよくわかるまでくりかえし読み、完全に暗記することである。それには、最初の全歌の認識が大事である。
下の句を見えないようにして上の句だけをみて下の句を思い出す、あるいはその反対にするなどの練習で、二、三首ずつ完全暗記してゆくことで、いちどに二十首も三十首もと無理をしないことである。
歌を書き写すこと、暗誦することも役立つ。
歌の意味がわかればいっそう理解がふかまり、記憶がたしかで、早く暗記できる。とくに、小野小町とか、紫式部の歌として記憶にとどめることも楽しく、早い。本書の歌意、参考の歌、作者、出典に目を通すだけでも、記憶の役に立つはずである。

百人一首音別・きまり字一覧

＊ルビ点は同音。ゴシックは上の句きまり字。（ ）内は百人一首通し番号。

あ……十七首（うち一首は「お」）（関連札三・友札十三）

あきかぜに　たなびくくものたえまより　もれいづるつきのかげのさやけき（七十九）

あきのたの　かりほのいほのとまをあらみ　わがころもではつゆにぬれつつ（一）

あけぬれば　くるるものとはしりながら　なほうらめしきあさぼらけかな（五十二）

あさぢふの　をののしのはらしのぶれど　あまりてなどかひとのこひしき（三十九）

あさぼらけ　**あ**りあけのつきとみるまでに　よしののさとにふれるしらゆき（三十一）

あさぼらけ　**う**ぢのかはぎりたえだえに　あらはれわたるせぜのあじろぎ（六十四）

あ**し**びきの　やまどりのをのしだりをの　ながながしよをひとりかもねむ（三）

あは**ぢ**しま　かよふちどりのなくこゑに　いくよねざめぬすまのせきもり（七十八）

あは**れ**とも　いふべきひとはおもほえで　みのいたづらになりぬべきかな（四十五）

あ**ひ**みての　のちのこころにくらぶれば　むかしはものをおもはざりけり（四十三）

★あふ（おう）**こ**との　たえてしなくばなかなかに　ひとをもみをもうらみざらまし（四十四）

あま**つ**かぜ　くものかよひぢふきとぢよ　をとめのすがたしばしとどめむ（十二）

あま**の**はら　ふりさけみればかすがなる　みかさのやまにいでしつきかも（七）

あら**ざ**らむ　このよのほかのおもひでに　いまひとたびのあふこともがな（五十六）

あら**し**ふく　みむろのやまのもみぢばは　たつたのかはのにしきなりけり（六十九）

あり**あ**けの　つれなくみえしわかれより　あかつきばかりうきものはなし（三十）

あり**ま**やま　ゐなのささはらかぜふけば　いでそよひとをわすれやはする（五十八）

い……三首（関連札一・友札二）

い**に**しへの　ならのみやこのやへざくら　けふここのへににほひぬるかな（六十一）

いま**こ**むと　いひしばかりにながつきの　ありあけのつきをまちいでつるかな（二十一）

いま**は**ただ　おもひたえなむとばかりを　ひとづてならでいふよしもがな（六十三）

う……二首（関連札二）

う**か**りける　ひとをはつせのやまおろし　はげしかれとはいのらぬものを（七十四）

う**ら**みわび　ほさぬそでだにあるものを　こひにくちなむなこそをしけれ（六十五）

お……七首（うち一首は「を」、一首は「あ」）（関連札四・友札三）

★おう（あふ）**こ**との　たえてしなくばなかなかに　ひとをもみをもうらみざらまし（四十四）

おくやまに　もみぢふみわけなくしかの　こゑきくときぞあきはかなしき（五）

をぐらやま　みねのもみぢばこころあらば　いまひとたびのみゆきまたなむ（二十六）

おとにきく　たかしのはまのあだなみは　かけじやそでのぬれもこそすれ（七十二）

おほえやま　いくののみちのとほければ　まだふみもみずあまのはしだて（六十）

おほけなく　うきよのたみにおほふかな　わがたつそまにすみぞめのそで（九十五）

おもひわび　さてもいのちはあるものを　うきにたへぬはなみだなりけり（八十二）

か……四首（関連札二・友札二）

かくとだに　えやはいぶきのさしもぐさ　さしもしらじなもゆるおもひを（五十一）

かささぎの　わたせるはしにおくしもの　しろきをみればよぞふけにける（六）

かぜそよぐ　ならのをがわのゆふぐれは　みそぎぞなつのしるしなりける（九十八）

かぜをいたみ　いはうつなみのおのれのみ　くだけてものをおもふころかな（四十八）

き……三首（関連札一・友札二）

きみがため　はるののにいでてわかなつむ　わがころもでにゆきはふりつつ（十五）

きみがため　をしからざりしいのちさへ　ながくもがなとおもひけるかも（五十）

きりぎりす　なくやしもよのさむしろに　ころもかたしきひとりかもねむ（九十一）

こ……六首（関連札四・友札二）

こころあてに　をらばやをらむはつしもの　おきまどはせるしらぎくのはな（二十九）

こころにも　あらでうきよにながらへば　こひしかるべきよはのつきかな（六十八）

こぬひとを　まつほのうらのゆふなぎに　やくやもしほのみもこがれつつ（九十七）

このたびは　ぬさもとりあへずたむけやま　もみぢのにしきかみのまにまに（二十四）

こひすてふ　わがなはまだきたちにけり　ひとしれずこそおもひそめしか（四十一）

これやこの　ゆくもかへるもわかれても　しるもしらぬもあふさかのせき（十）

さ……一首

さびしさに　やどをたちいでてながむれば　いづこもおなじあきのゆふぐれ（七十）

し……二首（関連札二）

しのぶれど　いろにいでにけりわがこひは　ものやおもふとひとのとふまで（四十）

しらつゆに　かぜのふきしくあきののは　つらぬきとめぬたまぞちりける（三十七）

す……一首

すみのえの　きしによるなみよるさへや　ゆめのかよひぢひとめよくらむ（十八）

せ……一首

せをはやみ　いはにせかるるたきがはの　われてもすゑにあはむとぞおもふ（七十七）

た……六首（関連札六・友札〇）

たかさごの　をのへのさくらさきにけり　とやまのかすみたたずもあらなむ（七十三）

たきのおとは　たえてひさしくなりぬれど　なこそながれてなほきこえけれ（五十五）

たごのうらに　うちいでてみればしろたへの　ふじのたかねにゆきはふりつつ（四）

たちわかれ　いなばのやまのみねにおふる　まつとしきかばいまかへりこむ（十六）

たまのをよ　たえなばたえねながらへば　しのぶることのよわりもぞする（八十九）

たれをかも　しるひとにせむたかさごの　まつもむかしのともならなくに（三十四）

ち……三首（関連札一・友札二）

ちぎりおきし　させもがつゆをいのちにて　あはれことしのあきもいぬめり（七十五）

ちぎりきな　かたみにそでをしぼりつつ　すゑのまつやまなみこさじとは（四十二）

ちはやぶる　かみよもきかずたつたがは　からくれなゐにみづくくるとは（十七）

つ……二首（関連二・友札〇）

つきみれば　ちぢにものこそかなしけれ　わがみひとつのあきにはあらねど（二十三）

つくばねの　みねよりおつるみなのかは　こひぞつもりてふちとなりぬる（十三）

な……八首（関連札一・友札七）

なが**か**らむ　こころもしらずくろかみの　みだれてけさはものをこそおもへ（八十）

なが**ら**へば　またこのごろやしのばれむ　うしとみしよぞいまはこひしき（八十四）

なげ**き**つつ　ひとりぬるよのあくるまは　いかにひさしきものとかはしる（五十三）

なげ**け**とて　つきやはものをおもはする　かこちがほなるわがなみだかな（八十六）

な**つ**のよは　まだよひながらあけぬるを　くものいづこにつきやどるらむ（三十六）

なにしおはば　あふさかやまのさねかづら　ひとにしられでくるよしもがな（二十五）
なにはえの　あしのかりねのひとよゆゑ　みをつくしてやこひわたるべき（八十八）
なにはがた　みじかきあしのふしのまも　あはでこのよをすぐしてよとや（十九）

は……四首（関連札〇・友札四）

はなさそふ　あらしのにはのゆきならで　ふりゆくものはわがみなりけり（九十六）
はなのいろは　うつりにけりないたづらに　わがみよにふるながめせしまに（九）
はるすぎて　なつきにけらししろたへの　ころもほすてふあまのかぐやま（二）
はるのよの　ゆめばかりなるたまくらに　かひなくたたむなこそをしけれ（六十七）

ひ……三首（関連札一・友札二）

ひさかたの　ひかりのどけきはるのひに　しづこころなくはなのちるらむ（三十三）

ひとはいさ　こころもしらずふるさとは　はなぞむかしのかににほひける（三十五）
ひともをし　ひともうらめしあぢきなく　よをおもふゆゑにものおもふみは（九十九）

ふ……一首

ふくからに　あきのくさきのしをるれば　むべやまかぜをあらしといふらむ（二十二）

ほ……一首

ほととぎす　なきつるかたをながむれば　ただありあけのつきぞのこれる（八十一）

み……五首（関連札三・友札二）

みかきもり　えじのたくひのよるはもえて　ひるはきえつつものをこそおもへ（四十九）
みかのはら　わきてながるるいづみがは　いつみきとこかこひしかるらむ（二十七）
みせばやな　をじまのあまのそでだにも　ぬれにぞぬれしいろはかはらず（九十）
みちのくの　しのぶもちずりたれゆゑに　みだれそめにしわれならなくに（十四）

みよしの　やまのあきかぜさよふけて　ふるさとさむくころもうつなり（九十四）

む……一首

むらさめの　つゆもまだひぬまきのはに　きりたちのぼるあきのゆふぐれ（八十七）

め……一首

めぐりあひて　みしやそれともわかぬまに　くもがくれにしよはのつきかな（五十七）

も……二首（関連札二・友札〇）

ももしきや　ふるきのきばのしのぶにも　なほあまりあるむかしなりけり（百）

もろともに　あはれとおもへやまざくら　はなよりほかにしるひともなし（六十六）

や……四首（関連札二・友札二）

やすらはで　ねなましものをさよふけて　かたぶくまでのつきをみしかな（五十九）

やへむぐら　しげれるやどのさびしきに　ひとこそみえねあきはきにけり（四十七）

やま**が**はに　かぜのかけたるしがらみは　ながれもあへぬもみぢなりけり（三十二）

やま**ざ**とは　ふゆぞさびしさまさりける　ひとめもくさもかれぬとおもへば（二十八）

ゆ……二首（関連札二・友札〇）

ゆ**ふ**されば　かどたのいなばおとづれて　あしのまろやにあきかぜぞふく（七十一）

ゆ**ら**のとを　わたるふなびとかぢをたえ　ゆくへもしらぬこひのみちかな（四十六）

よ……四首（関連札二・友札二）

よ**を**こめて　とりのそらねははかるとも　よにあふさかのせきはゆるさじ（六十二）

よのなか**は**　つねにもがもななぎさこぐ　あまのこぶねのつなでかなしも（九十三）

よのなか**よ**　みちこそなけれおもひいる　やまのおくにもしかぞなくなる（八十三）

よ**も**すがら　ものおもふころはあけやらで　ねやのひまさへつれなかりけり（八十五）

わ……七首（関連札一・友札六）

わがいほは　みやこのたつみしかぞすむ　よをうぢやまとひとはいふなり（八）

わがそでは　しほひにみえぬおきのいしの　ひとこそしらねかはくまもなし（九十二）

わすらるる　みをばおもはずちかひてし　ひとのいのちのおしくもあるかな（三十八）

わすれじの　ゆくすゑまではかたければ　けふをかぎりのいのちともがな（五十四）

わたのはら　こぎいでてみればひさかたの　くもゐにまがふおきつしらなみ（七十六）

わたのはら　やをしまかけてこぎいでぬと　ひとにはつげよあまのつりぶね（十一）

わびぬれば　いまはたおなじなにはなる　みをつくしてもあはむとぞおもふ（二十）

百人一首きまり字一覧

＊ルビ点はきまり字。（　）は百人一首の通し番号。

・**一字きまり**……七首（さ・す・せ・ふ・ほ・む・め）

さびしさに　やどをたちいでてながむれば　いづこもおなじあきのゆふぐれ（七十）

すみのえの　きしによるなみよるさへや　ゆめのかよひぢひとめよくらむ（十八）

せをはやみ　いはにせかるるたきがはの　われてもすゑにあはむとぞおもふ（七十七）

ふくからに　あきのくさきのしをるれば　むべやまかぜをあらしといふらむ（二十二）

ほととぎす　なきつるかたをながむれば　ただありあけのつきぞのこれる（八十一）

むらさめの　つゆもまだひぬまきのはに　きりたちのぼるあきのゆふぐれ（八十七）

めぐりあひて　みしやそれともわかぬまに　くもがくれにしよはのつきかな（五十七）

・二字きまり……四十二首

【あ】――三首

あけぬれば　くるるものとはしりながら　なほうらめしきあさぼらけかな（五十二）

あしびきの　やまどりのをのしだりをの　ながながしよをひとりかもねむ（三）

あひみての　のちのこころにくらぶれば　むかしはものをおもはざりけり（四十三）

【い】――一首

いにしへの　ならのみやこのやへざくら　けふここのへににほひぬるかな（六十一）

【う】――二首

うかりける　ひとをはつせのやまおろし　はげしかれとはいのらぬものを（七十四）

うらみわび　ほさぬそでだにあるものを　こひにくちなむなこそをしけれ（六十五）

【お（を）】……四首

おくやまに　もみぢふみわけなくしかの　こゑきくときぞあきはかなしき（五）

をぐらやま　みねのもみぢばこころあらば　いまひとたびのみゆきまたなむ（二十六）

おとにきく　たかしのはまのあだなみは　かけじやそでのぬれもこそすれ（七十二）

おもひわび　さてもいのちはあるものを　うきにたへぬはなみだなりけり（八十二）

【か】……二首

かくとだに　えやはいぶきのさしもぐさ　さしもしらじなもゆるおもひを（五十一）

かささぎの　わたせるはしにおくしもの　しろきをみればよぞふけにける（六）

【き】……一首

きりぎりす　なくやしもよのさむしろに　ころもかたしきひとりかもねむ（九十一）

【こ】……四首

こぬひとを　まつほのうらのゆふなぎに　やくやもしほのみもこがれつつ（九十七）

このたびは　ぬさもとりあへずたむけやま　もみぢのにしきかみのまにまに（二十四）

こひすてふ　わがなはまだきたちにけり　ひとしれずこそおもひそめしか（四十一）

これやこの　ゆくもかへるもわかれても　しるもしらぬもあふさかのせき（十）

【し】……二首

しのぶれど　いろにいでにけりわがこひは　ものやおもふとひとのとふまで（四十）

しらつゆに　かぜのふきしくあきののは　つらぬきとめぬたまぞちりける（三十七）

【た】……六首

たかさごの　をのへのさくらさきにけり　とやまのかすみたたずもあらなむ（七十三）

たきのおとは　たえてひさしくなりぬれど　なこそながれてなほきこえけれ（五十五）

たごのうらに　うちいでてみればしろたへの　ふじのたかねにゆきはふりつつ（四）

たちわかれ　いなばのやまのみねにおふる　まつとしきかばいまかへりこむ（十六）

たまのをよ　たえなばたえねながらへば　しのぶることのよわりもぞする（八十九）

たれをかも　しるひとにせむたかさごの　まつもむかしのともならなくに（三十四）

【ち】……一首

ちはやぶる　かみよもきかずたつたがは　からくれなゐにみづくくるとは（十七）

【つ】……二首

つきみれば　ちぢにものこそかなしけれ　わがみひとつのあきにはあらねど（二十三）

つくばねの　みねよりおつるみなのがは　こひぞつもりてふちとなりぬる（十三）

【な】……一首

なつのよは　まだよひながらあけぬるを　くものいづこにつきやどるらむ（三十六）

【ひ】……一首

ひさかたの　ひかりのどけきはるのひに　しづこころなくはなのちるらむ（三十三）

【み】……三首

みせばやな　をじまのあまのそでだにも　ぬれにぞぬれしいろはかはらず（九十）

みちのくの　しのぶもぢずりたれゆゑに　みだれそめにしわれならなくに（十四）

みよしのの　やまのあきかぜさよふけて　ふるさとさむくころもうつなり（九十四）

【も】……二首

ももしきや　ふるきのきばのしのぶにも　なほあまりあるむかしなりけり（百）

もろともに　あはれとおもへやまざくら　はなよりほかにしるひともなし（六十六）

【や】……二首

やすらはで　ねなましものをさよふけて　かたぶくまでのつきをみしかな（五十九）

やへむぐら　しげれるやどのさびしきに　ひとこそみえねあきはきにけり（四十七）

【ゆ】……二首

ゆふされば　かどたのいなばおとづれて　あしのまろやにあきかぜぞふく（七十一）

ゆらのとを　わたるふなびとかぢをたえ　ゆくへもしらぬこひのみちかな（四十六）

【よ】……二首

よをこめて　とりのそらねははかるとも　よにあふさかのせきはゆるさじ（六十二）

よもすがら　ものおもふころはあけやらで　ねやのひまさへつれなかりけり（八十五）

【わ】……一首

わびぬれば　いまはたおなじなにはなる　みをつくしてもあはむとぞおもふ（二十）

三字きまり……三十七首

【あ】……十二首

あきかぜに　たなびくくものたえまより　もれいづるつきのかげのさやけき（七十九）

あきのたの　かりほのいほのとまをあらみ　わがころもではつゆにぬれつつ（一）

あさぢふの　をののしのはらしのぶれど　あまりてなどかひとのこひしき（三十九）

あはぢしま　かよふちどりのなくこゑに　いくよねざめぬすまのせきもの（七十八）

あはれとも　いふべきひとはおもほえで　みのいたづらになりぬべきかな（四十五）

★あふ（おう）ことの　たえてしなくばなかなかに　ひとをもみをもうらみざらまし（四十四）

あまつかぜ　くものかよひぢふきとぢよ　をとめのすがたしばしとどめむ（十二）

あまのはら　ふりさけみればかすがなる　みかさのやまにいでしつきかも（七）

あらざらむ　このよのほかのおもひでに　いまひとたびのあふこともがな（五十六）
あらしふく　みむろのやまのもみぢばは　たつたのかはのにしきなりけり（六十九）
ありあけの　つれなくみえしわかれより　あかつきばかりうきものはなし（三十）
ありまやま　ゐなのささはらかぜふけば　いでそよひとをわすれやはする（五十八）
【い】……二首
いまこむと　いひしばかりにながつきの　ありあけのつきをまちいでつるかな（二十一）
いまはただ　おもひたえなむとばかりを　ひとづてならでいふよしもがな（六十三）
【お】……三首
★おう（あふ）ことの　たえてしなくばなかなかに　ひとをもみをもうらみざらまし（四十四）
おほえやま　いくののみちのとほければ　まだふみもみずあまのはしだて（六十）
おほけなく　うきよのたみにおほふかな　わがたつそまにすみぞめのそで（九十五）
【か】……二首

かぜをいたみ　いはうつなみのおのれのみ　くだけてものをおもふころかな（四十八）
かぜそよぐ　ならのをがわのゆふぐれは　みそぎぞなつのしるしなりける（九十八）
【な】……五首
ながからむ　こころもしらずくろかみの　みだれてけさはものをこそおもへ（八十）
ながらへば　またこのごろやしのばれむ　うしとみしよぞいまはこひしき（八十四）
なげきつつ　ひとりぬるよのあくるまは　いかにひさしきものとかはしる（五十三）
なげけとて　つきやはものをおもはする　かこちがほなるわがなみだかな（八十六）
なにしおはば　あふさかやまのさねかづら　ひとにしられでくるよしもがな（二十五）
【は】……四首
はなさそふ　あらしのにはのゆきならで　ふりゆくものはわがみなりけり（九十六）
はなのいろは　うつりにけりないたづらに　わがみよにふるながめせしまに（九）

はるすぎて　なつきにけらししろたへの　ころもほすてふあまのかぐやま（二）

はるのよの　ゆめばかりなるたまくらに　かひなくたたむなこそをしけれ（六十七）

【ひ】……二首

ひとはいさ　こころもしらずふるさとは　はなぞむかしのかににほひける（三十五）

ひともをし　ひともうらめしあぢきなく　よをおもふゆゑにものおもふみは（九十九）

【み】……二首

みかきもり　えじのたくひのよるはもえて　ひるはきえつつものをこそおもへ（四十九）

みかのはら　わきてながるるいづみがは　いつみきとかこひしかるらむ（二十七）

【や】……二首

やまがはに　かぜのかけたるしがらみは　ながれもあへぬもみぢなりけり（三十二）

やまざとは　ふゆぞさびしさまさりける　ひとめもくさもかれぬとおもへば（二十八）

【わ】……四首

わがいほは　みやこのたつみしかぞすむ　よをうぢやまとひとはいふなり（八）

わがそでは　しほひにみえぬおきのいしの　ひとこそしらねかはくまもなし（九十二）
わすらるる　みをばおもはずちかひてし　ひとのいのちのおしくもあるかな（三十八）
わすれじの　ゆくすゑまではかたければ　けふをかぎりのいのちともがな（五十四）

・四字きまり……六首

【こ】……二首

こころあてに　をらばやをらむはつしもの　おきまどはせるしらぎくのはな（二十九）
こころにも　あらでうきよにながらへば　こひしかるべきよはのつきかな（六十八）

【ち】……二首

ちぎりおきし　させもがつゆをいのちにて　あはれことしのあきもいぬめり（七十五）
ちぎりきな　かたみにそでをしぼりつつ　すゑのまつやまなみこさじとは（四十二）

【な】……二首

なにはえの　あしのかりねのひとよゆゑ　みをつくしてやこひわたるべき（八十八）

なにはがた　みじかきあしのふしのまも　あはでこのよをすぐしてよとや（十九）

・五字きまり……二首（【よ】二首）

よのなかは　つねにもがもななぎさこぐ　あまのこぶねのつなでかなしも（九十三）

よのなかよ　みちこそなけれおもひいる　やまのおくにもしかぞなくなる（八十三）

・六字きまり……六首

【あ】……二首

あさぼらけ　ありあけのつきとみるまでに　よしののさとにふれるしらゆき（三十一）

あさぼらけ　うぢのかはぎりたえだえに　あらはれわたるせぜのあじろぎ（六十四）

【き】……二首

きみがため　をしからざりしいのちさへ　ながくもがなとおもひけるかも（五十）

きみがため　はるののにいでてわかなつむ　わがころもでにゆきはふりつつ（十五）

【わ】……二首

わたのはら　こぎいでてみればひさかたの　くもゐにまがふおきつしらなみ（七十六）

わたのはら　やそしまかけてこぎいでぬと　ひとにはつげよあまのつりぶね（十一）

百人一首下の句音別一覧

＊（ ）内は上の句と百人一首通し番号。ルビ点は同音。ゴシックはきまり字。

あ……八首

あ**かつ**きばかりうきものはなし（ありあけの……三十）

あ**し**のまろやにあきかぜぞふく（ゆふされば……七十一）

あ**はで**このよをすぐしてよとや（なにはがた……十九）

あ**はれ**ことしのあきもいぬめり（ちぎりおきし……七十五）

あま**の**をぶねのつなでかなしも（よのなかは……九十三）

あま**り**てなどかひとのこひしき（あさちふの……三十九）

あらはれわたるせぜのあじろぎ（あさぼらけ　うぢの……六十四）

ありあけのつきをまちいでつるかな（いまこむと……二十一）

い……七首

いかにひさしきものとかはしる（なげきつつ……五十三）

いくよねざめぬすまのせきもり（あはぢしま……七十八）

いづこもおなじあきのゆふぐれ（さびしさに……七十）

いつみきとこかこひしかるらむ（みかのはら……二十七）

いでそよひとをわすれやはする（ありまやま……五十八）

いまひとたびのあふこともがな（あらざらむ……五十六）

いまひとたびのみゆきまたなむ（をぐらやま……二十六）

か**ひ**なくたたむなこそをしけれ（はる**の**よの……六十七）

か**ら**くれなゐにみづくくるとは（ち**は**やぶる……十七）

き……三首（うち「け」二首）

き**り**たちのぼるあきのゆふぐれ（**む**らさめの……八十七）

けふ**こ**このへににほひぬるかな（い**に**しへの……六十一）

けふ**を**かぎりのいのちともがな（わす**れ**じの……五十四）

く……四首

く**だ**けてものをおもふころかな（かぜ**を**いたみ……四十八）

くも**が**く**れ**にしよはのつきかな（**め**ぐりあひて……五十七）

くも**の**いづこにつきやどるら**む**（な**つ**のよは……三十六）

し……四首

しづこころなくはなのちるらむ（ひさかたの……三十三）
しのぶることのよわりもぞする（たまのをよ……八十九）
しるもしらぬもあふさかのせき（これやこの……十）
しろきをみればよぞふけにける（かささぎの……六）

す……一首

すゑのまつやまなみこさじとは（ちぎりきな……四十二）

た……二首

ただありあけのつきぞのこれる（ほととぎす……八十一）
たつたのかはのにしきなりけり（あらしふく……六十九）

つ……一首

つらぬきとめぬたまぞちりける（し**ら**つゆに……三十七）

と……一首

とやまのかすみたたずもあらなむ（た**か**さごの……七十三）

な……六首

なが**く**もがなとおもひけるかも（きみがため　**を**し……五十）

なが**な**がしよをひとりかもねむ（あ**し**びきの……三）

なが**れ**もあへぬもみぢなりけり（やま**が**はに……三十二）

な**こ**そながれてなほきこえけれ（た**き**のおとは……五十五）

なほ**あ**まりあるむかしなりけり（も**も**しきや……百）

なほうらめしきあさぼらけかな（あけぬれば……五十二）

ぬ……一首

ぬれにぞぬれしいろはかはらず（みせばやな……九十）

ね……一首

ねやのひまさへつれなかりけり（よもすがら……八十五）

は……三首

はげしかれとはいのらぬものを（うかりける……七十四）

はなぞむかしのかににほひける（ひとはいさ……三十五）

はなよりほかにしるひともなし（もろともに……六十六）

ひ……十首

ひとこそしらねかわくまもなし（わがそでは……九十二）

ふ……三首

ふじのたかねにゆきはふりつつ（**たご**のうらに……四）

ふりゆくものはわがみなりけり（はな**さ**そふ……九十六）

ふるさとさむくころもうつなり（み**よ**しのの……九十四）

ま……三首

ま**だ**ふみもみずあまのはしだて（おほ**え**やま……六十）

まつ**と**しきかばいまかへりこむ（た**ち**わか**れ**……十六）

まつ**も**むかしのともならなくに（た**れ**をかも……三十四）

み……七首

み**か**さのやまにいでしつきかも（あま**の**はら……七）

も、のやおもふとひとのとふまで（し、のぶれど……四十）

も、みぢのにしきかみのまにまに（こ、のたびは……二十四）

も、れいづるつきのかげのさやけさ（あ、き、かぜに……七十九）

や……二首

や、くやもしほのみもこがれつつ（こ、ぬひとを……九十七）

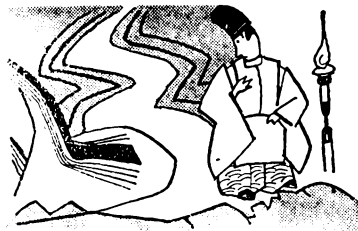
や、まのおくにもしかぞなくなる（よ、のなか、よ……八十三）

ゆ……二首

ゆ、くへもしらぬこひのみちかな（ゆ、らのとを……四十六）

ゆ、めのかよひぢひとめよくらむ（すみのえの……十八）

よ……四首

よ、しののさとにふれるしらゆき（あ、さ、ぼ、ら、け、　あり……三十一）

よにあふ（おう）さかのせきはゆるさじ（よをこめて……六十二）

よをうぢやまとひとはいふなり（わがいほは……八）

よをおもふゆゑにものおもふみは（ひともをし……九十九）

わ……六首

わがころもでにゆきはふりつつ（きみがため　はるの……十五）

わがころもではつゆにぬれつつ（あきのたの……一）

わがたつそまにすみぞめのそで（おほけなく……九十五）

わがみひとつのあきにはあらねど（つきみれば……二十三）

わがみよにふるながめせしまに（はなのいろは……九）

われてもすゑにあはむとぞおもふ（せをはやみ……七十七）

百人一首・類句一覧

【上の句】……カッコ内は百人一首通し番号。

あさぼらけ　ありあけのつきとみるまでに　**よしののさとにふれるしらゆき**（三十一）

あさぼらけ　うぢのかはぎりたえだえに　**あらはれわたるせぜのあじろぎ**（六十四）

きみがため　をしからざりしいのちさへ　**ながくもがなとおもひけるかも**（五十）

きみがため　はるののにいでてわかなつむ　**わがころもでにゆきはふりつつ**（十五）

わたのはら　こぎいでてみればひさかたの　**くもゐにまがふおきつしらなみ**（七十六）

わたのはら　やそしまかけてこぎいでぬと　**ひとにはつげよあまのつりぶね**（十一）

【下の句】……カッコ内は上の句と百人一首通し番号。

いまひとたびのあふこともがな（あらざらむ……五十六）

いまひとたびのみゆきまたなむ（をぐらやま……二十六）

ころもかたしきひとりかもねむ（きりぎりす……九十一）

通し読みと音訓暗記

小倉百人一首・競技かるたの早取りのポイントは、百首全部を知っていて、場に並べた下の句札をひと目見ただけで、上の句が何という札であるかわかることである。

歌を知るには、まず首人一首を通し読みして、和歌とはどういうものか、百人一首にはどんな歌がはいっているのか、おおつかみに知ること、つまり、百人一首に親しむことである。

何度も読みかえせばわかるように、第一音が同じ歌や、類句のあることがわかる。

百人一首には「あ」ではじまる歌が十七首ある。音では「あふ」を「おう」と発音する一首があるので、「あ」の音の札は十六枚ある。同じく「か」の音ではじまる札が四枚ある。

この音別によって暗記する方法がいちばんやさしく、能率的であることが、これまでの多くの人たちの研究・実践で証明されている。もっとも、人によっては、天智天皇から順徳院まで、年代順になっている百人一首を、その一から百まで順に暗記する人もいる。

しかし、この場合は、歌と歌の間に「あ」とか「か」などの関連がなく、記憶、整理、応用、つまり早取りに役立てるのに、記憶からひきだして実績をあげるという、競技かるた本来の目的からいうと非能率な面があり、音別による暗記が、より合理的である。

きまり字

音別に暗記しているうちにわかってくるのは、上の句が同じ音ではじまった場合でも、何字目かの音で取札がきまる字のあることである。その歌はその字で取札がきまる。それを「きまり字」という。なお、第一音が同じ（同一頭文字）札を「友札」といったことがあるが、正式には「友札」は「三字きまり」以上をいい、同じ頭文字の札でも「二字きまり」は「関連札」という。

具体的には「むらさめの　つゆもまだひぬまきのはに　きりたちのぼるあきのゆふぐれ」という歌は一字きまりで「む」がきまり字であり、同じように「さびしさに……」「ほととぎす……」「せをはやみ」など、一字きまりの歌は七枚ある。

二字きまりには「ちはやぶる……」「わびぬれば……」など四十二枚ある。

三字きまりには「あきのたの……」「あきかぜに……」など三十七枚あり、四字きまりには「なにはがた……」「こころにも……」など六枚、五字きまりには「よのなかよ……」と「よのなかは……」の二枚があり、六字きまりには「あさぼらけありあけつきと……」「わたのはらやそしまかけて……」など六枚がある。

「お手付」の罰則をうけずに早く取るためには、このきまり字を知ることである。

この「きまり字」を知っていれば、一字きまりの「む、す、め、ふ、さ、ほ、せ」の七枚は、読人が

第一音を発した瞬間に取札がわかり、配列などに工夫していればすぐ取れるわけで〝一字札〟ともよばれている。

二字きまりの札も同じことで「ちはやぶる……」の「ちは」と読まれときに、その取札が「からくれなゐにみづくくるとは」であることがわかるわけである。

・きまり字の変化

きまり字は歌と歌の関連で成立するので、実際の競技では持札によって変化する。本来なら六字目を読むまで待たなければ取れないので〝大山札〟とよばれている六札ぎまりの「わたのはら……」という札は、場合によっては二札ぎまりに変化する。

つまり「わたのはら　こぎいでてみればひさかたの　くもゐにまがふおきつしらなみ」と「わたのはら　やそしまかけてこぎいでぬと　ひとにはつげよあまのつりぶね」の二枚の札は本来ならば六札ぎまりで、読人が「こ」と「や」を読むのを待って取るべき札であるが、この二枚の札が自分の陣中（場）か、相手の陣中（場）かに二枚そろってあれば（配列のときか、送り札などによって）、わたの二字ぎまりに変化しているので、〝わた〟と読みすすんだときが勝負になる。本来の六字読むまで待てば、相手がこのきまり字の変化のことを知っていると、自分はその札を見ていながら取り遅れることになる。

読まれた札が持札（自分の場）のなかにないのに、まちがって札に手を触れれば「お手付」として相手から札を一枚受けねばならないが、出札と同じ陣中なら、二、三度ついてもさしつかえなく、「お手付」は同じ陣中なら何度ついても受ける札は一枚なので、きまり字を知っていれば績極的に取れる。

このように、自分の持札や、相手の陣中（場）にどんな札があるかよく見ておき、とくにきまり字の変化を考えに入れておく必要がある。お手付などで、札を相手に送ったり、送られたりしたときには、その都度、その場の札との関連、つまり、きまり字の変化を頭に入れることである。

・競技進行ときまり字の変化

きまり札は、送り札によって変化するだけでなく、競技の進行につれても変化する。「あさぼらけ……」という六字ぎまりの札は、「あさぼらけ　ありあけのつきとみるまでに　よしののさとにふれるしらゆき」が出たあとは、「あさぼ……」の三字ぎまりに変化しており、〝ぼ〟まで読まれたときに取れる。さらに競技がすすみ「あさぢふの　をののしのはらしのぶれど　あまりてなどかひとのこひしき」が出たあとは、残る「あさぼらけ　うぢのかはぎりたえだえに　あらはれわたるせぜのあじろぎ」という札は「あさ……」の二字ぎまりとなる。

・きまり字認識の活用

きまり字を知ること、それが持札、送り札、競技の進行などでつねに変化することを知り、それを競技中覚え、活用しなければならない。自分の持ち札二十五枚と、相手方の二十五枚を暗記し、場にない残り五十枚も記憶にあり、その都度変化する「きまり字」をおぼえていて競技するわけで、その実践を積みかさねることによって、記憶力が増進するのは当然といえる。まさしく〝記憶術の競技〟であり、物質文明に疲れ果てた現代人には、心あらわれる、情緒ゆたかな競技といえる。

読人と読み方

かるたの楽しさは読人によって左右される。とくに小倉百人一首のかるた競技は、読手が下手であれば競技にならない。

お座敷かるたでも、読手は一人が百首全部を読むのが望ましい。競技の場合は何組が一緒の場合も、広い場所でも、一人で読むことになっている。

読人の条件は、歌を正しく読める、声量のある人、ということになる。読札にはふりがながついているので、小学生でも読めるわけであるが、つかえ、つかえのたどたどしい読みや、あまりにも単調な、棒読みでは聞いているほうがあきてしまう。

といって、あまりにも〝味つけ〟した、節(ふし)にばかり気をつかっているような読み方では、競技の興味どころか嫌気をさすことになりかねない。やはり、歌を知っている人の、余韻が残る、流れのある読みが望ましい。競技かるたでは節をつけない、音に高低、長短のない読みが

読人によって楽しくもなり、シラケもする

強調される。

読人は、競技者の札の配列、暗記など、取る準備ができたところで、最初に〝空札(からふだ)〟を読む。この空読みの歌はどういう歌でもいいわけであるが、競技者が錯覚を起こしやすいので、百人一首のなかの歌は避けたい。空読みの歌としてよく聞くのは国歌「君が代」である。

読み方は、全歌を読み、つぎの出札(歌)を読む前に、もういちど前の歌の下の句だけを読み、つぎの歌の上の句に移る。この下の句のくりかえしは、静かに、一定の調子で読み、ことにつぎの上の句に移る最後の音に注意し、合間が一定し、余韻を残して移ると競技も盛りあがる。

なお、競技かるたでは詠人名は読まないことになっている。

また、お座敷かるたでは、下の句だけを読んで遊ぶ人たちもいるようであるが、小倉百人一首のかるたは、やはり上の句から読みはじめ、下の句をくりかえし読む、それを取り合うのがいちばん楽しい。

競技かるたは一回一時間から一時間半かかる。お座敷かるたでは十五分から二十分で読む例もあるようだが、じっくりと味わうことをおすすめしたい。

それは回を重ねればわかることであるが、百人一首かるたは、はじめから、全歌を読み、その上の句を読みはじめたときに、歌の記憶や、きまり字、さらにきまりの変化など、覚えていたすべてを動員して取る、その爽快さを味わうべきである。

歌の暗記は、音別法(174ページ参照)によるのがいちばん能率的であるが、そのほかでは、春夏秋冬という四季別、恋・旅・雑といった部別に暗記する方法もある。なかには詠人順に一から百まで順を追って暗記する人もいるが、実際に取り組んでみるとわかるが、むずかしい。

読んで暗記・取札を見て暗誦

百人一首の全歌を暗記、折にふれて暗誦をくりかえしていると、上の句が読まれると、下の句がうかび、下の句を見ると上の句が思いだせるようになる。

さらに、きまり字の記憶がたしかで、そのきまり字の変化を知っていれば、そのきまり字を見たり、聞いたりすると、下の句、つまり取り札がすぐわかるようになる。

それには、本を読んで暗記、さらに実際に取札をみて暗誦、それを、自分が取りやすいように配列して、札を裏がえしにして取る練習などをくりかえすことである。

取札を見て上の句がうかんでくるようになれば、お座敷かるたでは存分に楽しめる。競技で勝つには上の句のきまり字、その変化を完全に知っていることであり、これは実践を重ねるうちに完全になってくる。暗記ができたら、実際に競技に参加することである。

持札二十五枚の配列法

持札の数がきまったら（競技かるたは二十五枚）、これをならべる。きめられた範囲内なら、どうならべてもよいのであるが、この持札のならべ方は直接勝負に影響するので、自分の配列法をあみだし、つねにその方法による一定のならべ方をすることである。

自分の配列法にしたがえば、札の暗記が楽で、友札、関連札、それによるきまり字の変化も配列中にわかり、取りやすい。

配列法には、上の句ならべ、下の句ならべ、その上・下の句のくずれならべ、きまり字によるならべ方、春夏秋冬、恋・旅・雑などによるならべ方、出典歌集別、詠人順などいろいろある。

自分が取りやすく、相手には取りにくいようにならべる、それが、自分の配列法をきめるポイントである。

それは、相手から取られる心配のあまり、自分も取りにくいならべ方をしない、ということである。

・初心者向きの上の句ならべ

初心者には「上の句ならべ」が適当である。これは歌の暗記ができていれば簡単にならべられ、取りやすい配列法である。ところが、これは裏をかえせば相手からも取られやすいということである。しか

も、相手から送られた札の位置もわかりやすいなどの欠陥がある。しかし、この配列法によって実践を積むことが上達の早道とされている。

上の句ならべの望ましいかたちは、中央にはなるべく札をならべないよう、下段は右側は右から、左側は左から札を密着してならべ、上段はすこし間をおいてならべることが早取りにつながる。上達すれば上段に札を多くならべ、積極的に相手を攻めるのが上策とされている。しかも、送り札や競技の進行にともなって、配列をかえる工夫が必要である。

持札は二十五枚であるから、それを上段、中段、下段にわけてならべる場合、上段には十枚か十一枚ならべ、中段の右側に四枚か五枚つけてならべ、左にははなして二枚か三枚、下段の右側には四枚か五枚をつけてならべ、左側には中段左側と同様に、はなして三枚か四枚ならべる。こういうならべ方をすれば、中段まん中に四枚分、下段中央に二枚ほどの空白ができ、取りやすい。あるいは、上段を八枚にして、下段を二、三枚ふやし、中央をあける方法もある。

持札はどういう札かわからないので、百人一首の百枚の札の自分なりのならべ方をきめておくわけである。そうしておけば、二十五枚の持札がどういう札でも、その順にしたがってならべられる。

たとえば、上段の右からは、上の句の「あきかぜに……」ときめておけば、そこには「もれいづるつきのさやけさ」という札をならべておき、読人が「あきか……」と、きまり字の「か」を読んだ瞬間に上段右端に手をふれればよいわけである。

もし、二十五枚の持札に「あきかぜ……」の札がなければ、そこには「あきのたの……」の「わがころもではつゆにぬれつつ……」をおくわけで、これもきまり字の「あきの……」で右端に手をやれば、

札を、場のあちこちをさがさないでも取れるわけである。

このことは、上段、中段、下段とも、自分の好む場に、好む方法で配列すればそれでよいわけで、そういう配列法を何通りか知っていれば、競技はいっそう記憶の勝負、頭脳戦となる。

百枚の配列は、上段中央をあける方法であれば、上段が二十八枚から三十二枚、中段は中央をあけるので、三十一枚から三十三枚ぐらいを予定し、下段の中央もすこしあけることを考慮に入れ、三十五枚から三十七枚ぐらいの配置を描き、自分の好きな、取りやすい配列法をあみだすことである。

上段四十枚、中段二十五枚〜二十八枚、下段三十二枚〜三十五枚という、中央をひろくあける方法などもある。

配列は自分の好む方法で……

★上の句ならべ参考

上段（35枚）

あ……十六枚
い……三枚
う……二枚
お（を）……七枚
か……四枚
き……三枚

中段（30枚）

こ……六枚
さ……一枚
し……二枚
す……一枚
せ……一枚
た……六枚
ち……三枚
つ……二枚
な……八枚

下段（35枚）

は……四枚
ひ……三枚
ふ……一枚
ほ……一枚
み……五枚
む……一枚
め……一枚
も……二枚
や……四枚
ゆ……二枚
よ……四枚
わ……七枚

★上の句ならべ順例（百枚）

段											
上段（39）	わ七	よ四	ゆ二	や四		な八		う二	こ六	つ二	か四
中段（26）	ち三	た六	せ一	す一	し二	さ一		も二	め一	む一	み五	き三
下段（35）	は四	ひ三	ふ一	ほ一		お（を）七		い三		あ十六	

★上の句ならべ例（二十五枚）

上段（八～十枚）	中段（七枚）	下段（九～十枚）
かぜそよぐ…………	きみがため…………	あしびきの…………
つきみれば…………	みせばやな…………	ありあけの…………
こぬひとを…………	むらさめの…………	いにしえの…………
うらみわび…………	ももしきや…………	おくやまに…………
ながらえば…………		をぐらやま…………
やまざとは…………		ほととぎす…………
ゆうされば…………	しのぶれど…………	ふくからに…………
よのなかは…………	たごのうらに………	ひさかたの…………
わびぬれば…………	ちはやぶる…………	はるすぎて…………

★下の句ならべ参考

あ……八枚
い……七枚
う……二枚
お(を)……二枚
か……五枚
き……一枚
く……四枚
け……二枚
こ……六枚
さ……一枚
し……四枚
す……一枚
た……二枚
つ……一枚
と……一枚

な……六枚
ぬ……一枚
ね……一枚
は……三枚
ひ……十枚
ふ……三枚
ま……三枚
み……七枚
む……二枚
も……三枚
や……二枚
ゆ……二枚
よ……四枚
わ……六枚

★下の句ならべ順例（百枚）

上段（32）　中段（30）　下段（38）

ね	ぬ	な	と	つ	た	す		お	う	い	あ
一	一	六	一	一	二	一		二	二	七	八
こ	け	く	き	か					む	み	ま
六	二	四	一	五					二	七	三
わ	よ	ゆ	や	も	し	さ			ふ	ひ	は
六	四	二	二	三	四	一			三	十	三

関連札と友札

小倉百人一首のかるたには、一字きまりの札（さ・す・せ・ふ・ほ・む・め）七枚をのぞく九十三枚の札は、それぞれ頭文字が同じ二十種の、関連札、友札からなっている。

同じ頭文字の札を、ふつう〃友札〃とよぶが、競技かるたでは、友札は三字きまり以上の札をいい、二字きまりは関連札としてよんでいる。この分類によると二字きまりの関連札は四十二枚、三字きまり以上の友札は五十一枚ある。これを「きまり字一覧」でみながら、早く取れる関連札と、三字以上のきまり字を待って取る友札と区別して練習すると能率的である。

関連札・友札一覧

音別	関連札	友札	計
あ	3	13	16
い	1	2	3
う	2		2
お	4	3	7
か	2	2	4
き	1	2	3
こ	4	2	6
し	2		2
た	6		6
ち	1	2	3
つ	2		2
な	1	7	8
は		4	4
ひ	1	2	3
み	3	2	5
も	2		2
や	2	2	4
ゆ	2		2
よ	2	2	4
わ	1	6	7

上の句友札（多い順）

字	数
あ	十六
な	八
お	七
わ	七
こ	六
た	六
み	五
か	四
は	四
や	四
よ	四
い	三
き	三
ち	三
ひ	三
う	二
し	二
つ	二
も	二
ゆ	二
さ	一
す	一
せ	一
ふ	一
ほ	一
む	一
め	一

下の句友札（多い順）

字	数
ひ	十
あ	八
い	七
み	七
こ	六
な	六
か	五
わ	五
く	四
し	四
よ	四
う	三
は	三
ふ	三
ま	三
も	三
お	二
け	二
た	二
や	二
ゆ	二
き	一
さ	一
す	一
せ	一
つ	一
と	一
ぬ	一
ね	一
む	一

持札と相手方の札の暗記

競技かるたでは、札をならべはじめるときから十五分間の暗記時間がある。持札は二十五枚であり、これを暗記するのに五分、相手方の札を暗記するのに十分というのが、競技者の心得となっている。もちろん人によって差があるが、この時間配分を目標に練習するのも一方法である。

お座敷かるたでは、ほとんど暗記の時間なしで読みはじめるようであるが、やはり十分か十五分ぐらいは静かに札を見つめ、暗記する時間をとったほうが楽しいはずである。

このときの暗記は、下の句を見ながら上の句を思い出し、その位置、関連札、友札、きまり字、きまり字の変化を確認するわけである。持札のならべ方は、あらかじめ研究した自分の方法にしたがい、上の句の音順とか、下の句の音順、あるいはきまり字別などにならべ、位置を確認する。

相手方の札を暗記するには、相手方の札は相手方から読めるようにならべてあるので、練習中に、競技と同じようなかたちにならべて、相手方の札の見方、暗記の仕方を研究しておくとよい。

札は、百枚の下の句札をよくきって四つにわけ、そのうちの二十五枚をとってならべるので、音によってはないものもある。しかし、配列法が自分のものであれば、その順にしたがい、その場の札を完全に暗記する。暗記の練習には、自分の配列法にしたがい、それを暗記したら、裏返しにし、だれかに読んでもらって、その裏返しの歌を取るなどが効果的である。

競技かるたの心得

・マナー

持札の配列が終わったら、洋服なら上着を、着物なら羽織をぬぐことになっている。ついで読人が読みの座に着いたとき、相手に対しおねがいしますと礼をする。

出た札は座の左側に積みかさねる。飛んだ札はすぐさがし、ほかの競技者の札が飛んできた場合にもすぐに持ち主に返す。

競技中には音をたてたり、人に迷惑をかけないようにする。読みを待たせない。物言いを慎む。勝負が終わったら礼をいう。札をきちんとそろえてから座を立つ。

マナーを守ろう！

・姿勢と呼吸と視線

坐ったままの姿勢で、自分の札、相手の札のすべてがよく見え、取れるように坐る。それには、ならべた下段の札から五〜六センチさがった中央に正座し、右足をややうしろに、つま先を立てて踵(かかと)をあげ、左足のうえに軽くお尻をのせる坐り方が取りやすいとされている。

右手で札を取る人は、左手を左膝の前においてからだを支え、前かがみになる。右は中央に、どの札の位置にも伸びるように浮かして構える。

雑念をはらい、精神を統一し、呼吸は、読みが前歌の下の句から上の句の第一音にかかる瞬間を、息を吸いつめて待つ。吐息のときにはどうしても、瞬時の敏速な反応ができにくい。

目は相手方の場にむける。これは、自分の札は配列のときに、自分の知りつくした順でならべてあれば、読まれた札は記憶にしたがって、とっさにその

札に手が伸びる。それほど暗記していればこそである。それができずに自分の札を見ていなければ取れないとすれば、完全暗記ではない。練習不足で、本格的な競技での勝ちは望めない。暗記ができていれば、気おくれせずに積極的に札を取れる。

●持札に起こりやすい「お手付」

お手付は相手が一枚減って持札が一枚ふえる、つまり、相手との差が二枚となるので、これを再三くりかえしていては勝ち目がなくなる。めざす札を相手に取られただけなら、一枚とられて一枚受けるので差引ゼロ、相手が一枚減るだけであるが、お手付をすると持札がふえる。そこでお手付をしない工夫と努力が必要である。それには、お手付が持札に起こりやすい、ということを考えてみたい。これは相手方の札に手がとどきにくいということもあるが、やはり多くは気のゆるみによるといえる。

気のゆるみがお手付に……

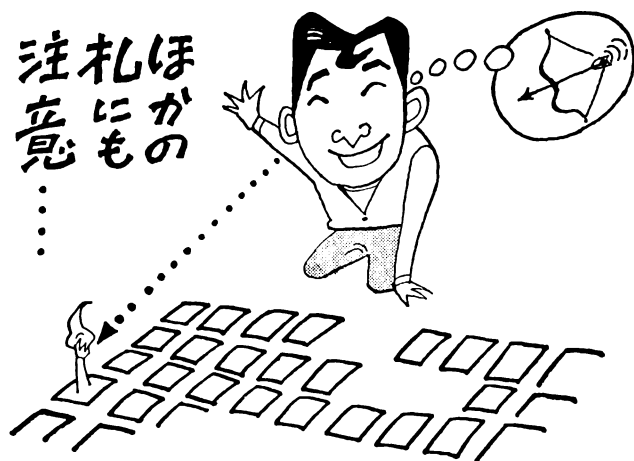
送り札の攻防

送り札をどれにするか、これはそのときどきの問題ではあるが、自分の不得意な札から送るのが有利といえる。考え方によっては、自分の得意な札を相手方に送り、その機会を待つのが有利ともいえるが、自分の場の札はいつも取れる状態にしておき、相手方の札を取るのが有利というのが定説である。

不得意な札を送ったからといって、それを放置しては元も子もなくなる。送られた札は相手にとっても〝新参〟であり、相手の記憶やその場に定着しないうちに取るのが上策で、送った札はしっかりと覚えておくことである。そうでないと、まだ自分の場にあったような気がして、お手付をしたりすることになる。

ということは、相手から送られた札もそのようにみられ、ねらわれているということであり、とくに、その送り札によるきまり字の変化をすばやく確認することである。

● 送り札とねらい変更

人にはそれぞれ好きな札と、どうしてもなじめない札があるようで、好きな札が相手の場にあると、その札が気になる。どうしても自分が取りたい衝動にかられる。こういう心情からのねらい札や、そうでなくとも、相手方の上段の左にある札が気になるとか、出そうな札など、競技では必然的にねらい札

ねらいをつけるのはいいが、あまりこだわると相手にやられることもある

がでるものである。

ねらいをつけることは、それだけ、その札の記憶が鮮明な状態で持続するからいい面が多い。しかし、あまりこだわりすぎると、ほかの札に対する注意がおろそかになって、当然取れる札を、相手に先をこされることにもなりかねない。

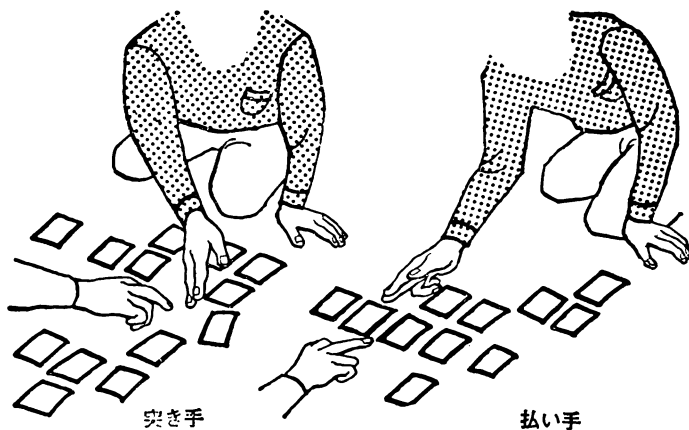
そこで、ねらいは出札とか送り札など、ある場面場面で変えることが得策とされる。また、相手がねらっている札を送り札にして、場の流れを変える作戦もある。相手のお手付がこんな場面で起こることが多いからである。

送り札は記憶の混乱と表裏紙一重といえるので、友札が多くあるときには、それがねらわれ、しかも取られやすいので、これを送り札とするのが得策である。ながいきまり字の札をそろえないことも上策である。

札の取り方

札を取るということは、読まれた札に相手より一瞬でも早く手を触れるということである。札をにぎるとか、場の他の札をも飛ばすことではない。しかし、瞬時の勝負であり、出札、つまり読まれた札をねらっても、そのまわりの札に手が触れたり、飛んだりすることがあり、これは人間であればしかたのないことである。が、あまりにも乱暴な取り分は感心しない。

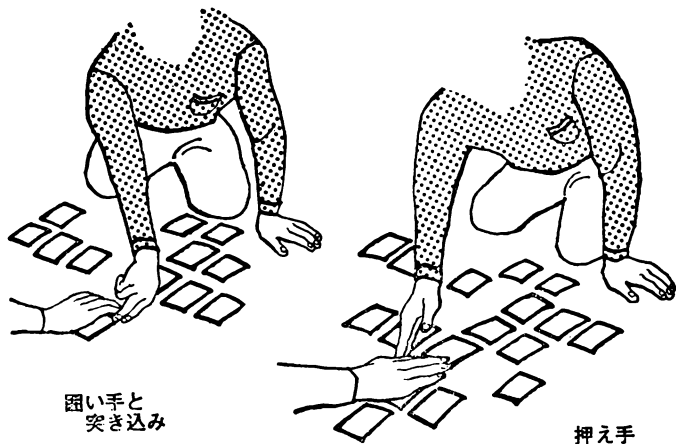
取り方は出札の位置、関連札、友札の関係その他でいろいろ変わるが、大別して払い手、突き手、押え手、引き手、掴み手、渡り手、囲い手、逆く手、突き込みなどの手がある。

競技かるたでは、右か左か、はじめにきめたどちらか片方の手で取ることになっており、両手をつか

うこと、にぎりこぶしをつかうことなどは許されていない。優雅な取り方は、人さし指と中指をつかった払い手と突き手である。

・自分の持札の取り方

上段の札は突き手（札を突き上げる）で、右側にならべた札は上・中・下段とも右に払う。左側の札は全部左に払う手が早い。しかし、お手付をさけるなどを考慮すると、中段の札は手を低く出しての押え手が有利な場合がある。手を低く出し、記憶にある出札の上で待つ（確かめている）と相手の攻め手で出札に手が触れることなどもある。競技かるたは、お手付の罰をうけずに、相手より瞬時早く取ればよいのである。

・相手の持札の取り方

右側の札は右に払うが、それは突き上げ気味がよい。掴み手や押え手をつかって有効なのもこの場で

ある。中央に位置する札を取る手は突き手がいちばんよい。
左側の札は上・中・下段とも全部左へ払い飛ばす払い手が確実である。この場の札を取るとき、離れたところから手を伸ばすことになり、姿勢が適当でないとからだがぐらつき、手前の札を何枚も払い飛ばしたりするので、気をつけたい。

・その他の取り方

早取りの手をひとつあげれば突き手といえる。その機会を確実にとらえるには、突ける範囲を練習などで確かめておき、有効に突き手を活用することである。
囲い手が用いられるのは、六字きまりなどの大山札を取る場合である。そして、相手が囲い手をつかったときには、あいているところ、それは横である場合が多いので、そこから中指を裏に向けての突き込みの手を用いると有効である。
渡り手などがつかわれるのは、自分と相手の両方に大山札がわかれていて、自分の持札を囲い手で守っていて、出札が相手方にあったとわかった瞬間に囲い手から相手方へ手を伸ばして取るときである。
そのほか、札の位置、きまり字などによっていろいろな取り方があるが、要するに、読まれた札（出札）を早く取るには、取り手がその札に一直線にとどく取り手をつかうことであり、それは練習をくりかえし、競技を重ねることで自分の手法となるものである。
競技かるたであるから、相手より早く取り、勝利のよろこびを味わいたいのは人情であるが、小倉百人一首のかるた本来の優雅な競技を心したいものである。

あとがき

小倉百人一首は日本文学の精華である。そして理知的で優雅なかるた競技の、だれもが気軽に味わえる唯一の文化財である。身も心も燃え、もだえるはげしい恋、生を超えて深まり、自然に還ってゆく寂寥。優雅、幽玄な伝統の歌風、繊細な技巧、写生の美、どの一首にも、なつかしい日本の香りが充ちている。

本書が、出会いうれしい人との心の交流に、ゆたかな情緒をはぐくむかるた遊びへいざなう一助になればしあわせである。

著者

・主な参考文献

・百人一首改観抄――釈契沖
・宇比麻奈備――賀茂真淵
・百首異見――香川景樹
・百人一首一夕話――尾崎雅嘉
・百人一首講義――佐々木信綱
・新釈百人一首夜話――吉井　勇
・小倉百人一首――鈴木知太郎
・百人一首――島津忠夫・訳注
・解釈と鑑賞・小倉百人一首――三木華信
・鑑賞・小倉百人一首――水田　潤
・百人一首――金子武雄・伊藤秀吉
・百人一首――平井　勲・夏目延雄
・百人一首の探究――中島悦次
・百人一首の世界――久保田正文

★作者索引（50音順）

読者の皆様へ

ご愛読をいただき、ありがとうございます。あなたは、この本を読まれてどのようにお感じですか。本書に対する、きたんのないご批判、ご感想をどしどしお寄せください。当社では、読者の皆様のご意見を参考にさせていただき、一層よりよき図書を発行するよう努力いたします。

なお、落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、お取りかえいたします。お買い求めの書店または本社へお申し出でください。

東京都文京区白山二丁目一番一五号
土屋書店

絵入り百人一首入門

著者　佐藤安志
発行者　土屋弘
印刷所　(有)大文社
製本所　大和工業株式会社

発行所　(有)土屋書店
東京都文京区白山2－1－15
TEL 代表 (03) 814－8648

絵入り百人一首入門

昭和57年11月30日　発行　　定価780円

著　者　佐　藤　安　志

発行者　土　屋　　弘

印刷所　(有)大　文　社

製本所　大和工業株式会社

発行所　(有)土　屋　書　店

東京都文京区白山2－1－15

TEL 代表 (03) 814－8648

落丁·乱丁本はおとりかえいたします　検印省略

本書は、「小倉百人一首」の香り高い文学を味わいながら、優雅な、もっとも日本的な遊びである〝歌かるた〟を楽しむための入門書である。
百人一首かるた競技は〝記憶の勝負〟といわれる。歌をおぼえるためには歌意を知り、詠人を知る必要がある。古きよき時代に心を寄せるため、本書は歌意、参考歌、作者、出典を記し、競技については心得、方法、規則、歌の暗記法、札のならべ方、早取り法などを記した。
また、百の歌のすべてに、日本人に永く親しまれてきた先人の麗筆になる貴重な絵札を配し、いっそう香り高いものにしてある。
百人一首をはじめて手にする人たちでも、すぐ親しめるよう意を用いた、画期的なハンドブックといえよう。

土屋書店
定価780円
ISBN4-8069-0029-X C2076 ¥780E